

計画的居住環境に関する研究

―秋田県大潟村のケーススタディー―

岩佐明彦



計画的居住環境に関する研究

— 秋田県大湯村のケーススタディ —

岩佐明彦

東京大学 学位請求論文 2000年3月

八郎潟の干拓と大潟村の誕生



↑干拓前の水位を記念した碑と、↑その現在



↑干拓前の八郎潟



↑農耕機械を用いた農業



↑住宅の風景



↑入植者はここで一年間の研修生活をした。



八郎潟の干拓と大潟村の誕生



↑干拓前に八郎潟で漁をしていた打瀬船



↑干拓直後の総合中心地（記念植樹を実施）



↑干拓前の水位を記念した碑と、↑その現在



↑干拓前の八郎潟



↑干拓後の八郎潟（大潟村）



↑総合中心地（1975年撮影）住居の屋根の色は入植年度によって区別されていた。



↑大型農耕機械を用いた農業



↑住宅の風景



↑訓練所 入植者はここで一年間の研修生活をした。



大潟村の現在



元の三角屋根が現存する住宅



街路の花壇
(街区ごとに婦人会が世話)



サンルーラル (ホテル)



公民館と展望台



住戸後背の緑道



ほぼオリジナルのままの住宅



公園



商店街

ホテル・健康センター・高齢者センター
ふるさと衛生一帯で作られた温泉を
まっかけに建てられたもの

センターベルト
施設の公共施設がこのベルト上に集中して
配置されている。



町ごとに、中心に緑地と公園があり、児童館が設けられている。



大潟神社



干陸式が行われた場所は神社となり、
土俵は現存している。

カントリーエレベータ公社
米を集積するところ



格納庫



育苗用ビニールハウス

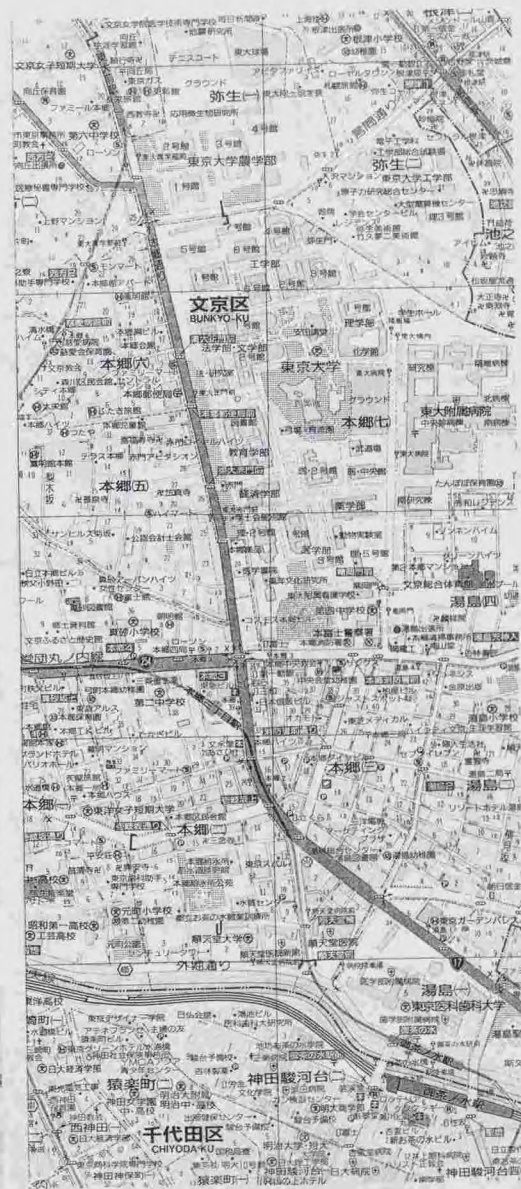


干陸式 (1964年)



公民館展望台からの眺め

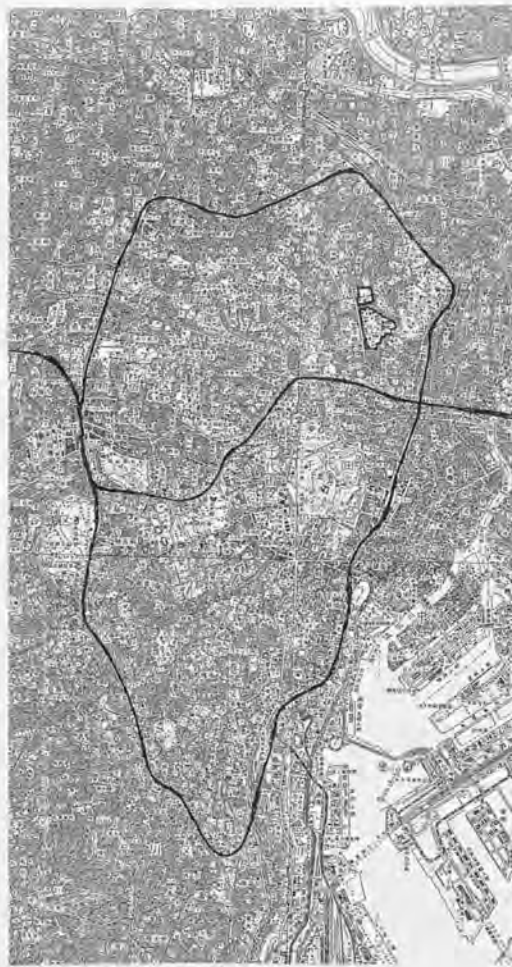
総合中心地



面積と人口の比較



秋田県：大潟村
人口：約3400人



東京都：山の手線内周部
人口：約280万人



ニューヨーク：マンハッタン島
人口：約140万人

大 潟 村 の 歴 史

1964年

9月15日 八郎潟干陸・新村設置記念式典を挙行
10月1日 大潟村発足

1965年

9月1日 八郎潟新農村建設事業団発足

1966年

5月21日 中央干拓地干陸完了

11月10日 第一次入植者訓練開始

1967年

11月1日 第一次入植者入村(56名)
12月26日 総合中心地に役場庁舎が完成移転

1968年

4月15日 簡易保健所を村役場内に設置
6月15日 東京大学安田講堂を学生が占拠
9月1日 第一回村民大運動会
11月1日 大潟小・中学校が入校式を挙行
(小学校6学級52名、中学校3学級17名)

1969年

11月1日 第二次入植者入村(86名)

1970年

1月1日 大潟村立幼穂圃を開園(2学級24名)

8月2日 秋田農業博覧会開催

8月18日 第一回盆踊り大会を開催

8月27日 昭和天皇が来村

9月30日 中央公民館が開設

11月1日 第三次入植者入村(175名)

1970年

3月23日 カントリーエレベータ公社設立

10月28日 皇太子(明仁皇)来村

11月1日 第四次入植者入村(143名)

1971年

2月1日 簡易郵便局が役場内に設立される
4月23日 大潟村診療所・母子保健センター開設

1972年

7月18日 三笠宮殿下が来村

1973年

4月26日 秋田県立農業短大が開設

8月28日 墓地公園が完成

1974年

1月17日 警察官派出所を完成

2月12日 大潟村郵便局が完成

5月11日 商店5店舗が開業
(総合食品・精肉・鮮魚・日用雑貨・飲食)

11月8日 村設置10周年記念式典挙行

1975年

2月20日 商店3店舗が開業(理容・美容・衣料)

12月11日 全国花いっぱいコンクールで農林大臣賞受賞

1976年

3月24日 村議会議事堂が完成

9月5日 初の村長選挙

10月27日 八郎潟新農村建設事業完工式を挙行

1977年

4月1日 集落内の土地表示を変更

1978年

3月31日 八郎潟新農村建設事業団が解散

11月25日 大潟神社完成

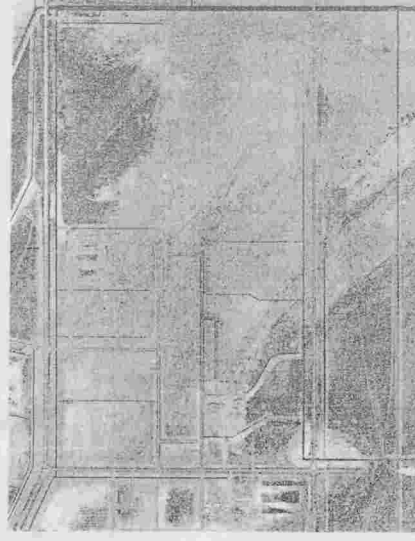
1979年

4月25日 村民体育館・保育園が完成

9月10日 第一回大潟神社例大祭

12月13日 初代村政死去、初の村葬

総合中心地 (S=1:25000)



1967



1971



1973



1976

10月10日 東京オリンピック開催

2月7日 アメリカ軍がベトナム侵襲を開始

8月20日 中国で文化大革命始まる

自動車保有数が1000万台を突破

7月20日 アポロ11号が月面着陸に成功

2月5日 米の減反政策が始まる

3月14日 日本万国博覧会 EXPO'70 開催

3月31日 よど号ハイジャックされる

2月19日 浅間山荘事件
5月15日 沖縄返還

1月27日 ベトナム戦争集結

10月6日 第四次中東戦争勃発、石油危機

1月31日 日本初の5つ子誕生

7月27日 ロッキード事件で田中角栄前首相を逮捕

9月3日 王選平がホームラン世界記録を樹立

5月20日 成田空港が開港
10月31日 1ドル180円台に

2月28日 スリーマイル島原発事故

1980年

11月15日

村民野球場が完成

1981年

8月23日

台風15号により大きな被害

1982年

3月31日

ゴミ処理施設完成

6月6日

第一回入防湖クリーンアップ作戦実施

1983年

5月26日

日本海中部地震

1984年

4月27日

村民憲章、村民の歌、村の木・花・鳥を制定

11月9日

村創立20周年記念式典を挙行

1985年

1986年

3月10日

ふれあい遊園地が完成

1987年

4月1日

三葉種を誘致（タクシー・住宅営業・整備）

11月30日

後場庁舎増築工完了

1988年

3月25日

上水場が完成

7月24日

交通死亡事故ゼロ記録2508日で途絶える

11月22日

幼小中学校創立20周年記念式典

1989年

2月6日

農協会館完成

6月30日

村内で温泉湧出

8月1日

大湯村特産品センター完成

11月25日

花いっぱい運動で内閣総理大臣賞受賞

1990年

10月10日

村創立25周年記念式典

12月21日

村民初のプロ野球選手誕生

1991年

2月8日

温泉施設「ポルター湯の湯」オープン

9月25日

バイオミミックエリアオープン

10月27日

大湯村イメージソング「麗女（ほしびと）よ」製作・発表

1992年

3月31日

入権記念碑建立

6月12日

オランダ王国トロンテン市と友好都市協定を結ぶ

1993年

4月1日

コミュニティ研修施設「ポルター研修館」がオープン

6月4日

歴代村プールの完成

8月1日

第一回ワールドソーラーカーラリー開催

1994年

4月1日

ソーラー課新設

10月1日

村創立30周年記念式典

1995年

2月20日

大湯村が「毎日・地方自治大賞」奨励賞に

8月11日

標高0mの日本一低い山「大湯富士」山開き

1996年

4月26日

サンルラル大湯（宿泊施設）オープン



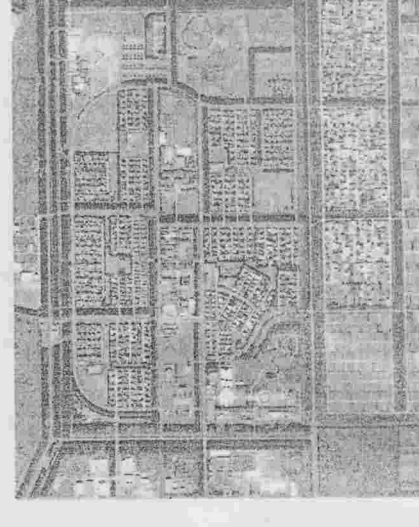
1980



1984



1989



1994

1章：序
1-1 目的と背景
初めに
「究極」
研究の
研究の
用語は
1-2 ニュータ
空間的
生活環
ほろひ
ニュー
近年の
1-3 サバース
アメリ
アメリ
サバー
日本の
1-4 ニュータ
サステ
アワコ
住宅地
1-5 本論の構

2章：調査
2-1 調査対象
歴史的
地理的
営農方
人口、
当時の
集落計
大湯村
大湯村
2-2 調査の概
(1) ア
(2) 現
(3) 住
(4) 計
2-3 アンケー



1989



1994

10月5日 統一ドイツ誕生
11月17日 雲仙・普賢岳噴火

村創立25周年記念式典
村民初のプロ野球選手誕生

1991年
10月10日
12月21日

温泉施設「ポルター湖の湯」オープン
バイオミックスエアオープン
大湯村イメージソング「星女（ほしびと）よ」製作・発表

1992年
3月31日
6月12日

入籍記念碑建立
オランダ王国下ロンドンテンと友好都市協定を結ぶ

1993年
4月1日
6月4日

コミュニティ研修施設「ポルター湖研修館」がオープン
屋敷付アパート完成

1994年
8月1日

第一回ワールドソーラーカーラリー開催

1995年
4月1日
10月1日

ソーラー観新設
村創立30周年記念式典

1996年
4月26日

10月13日 大江健三郎氏がノーベル賞受賞

大湯村が「毎日・地方自治大賞」奨励賞に
標高0mの日本一低い山「大湯富士」山開き

1995年
2月20日
8月11日

サンルール大湯（宿泊施設）オープン

1996年
4月26日

目次

1章：序	1
1-1 目的と背景	1
初めに	1
「究極のニュータウン」秋田県大湯村	2
研究の狙い	3
研究の特色と位置付け	3
用語に関して（ニュータウンと郊外）	5
1-2 ニュータウンを巡る言説（計画的居住環境に関する言説）	5
空間的違和感（均質性、画一性、地形）	5
生活環境としての疑念	6
ほろびゆく農村集落へのノスタルジー、既存とのコンフリクト	7
ニュータウンを原風景とする世代	7
近年の郊外批判	8
1-3 サバープ（アメリカの計画的居住環境）	9
アメリカの郊外開発の背景	9
アメリカの典型的郊外：レヴィットタウン	9
サバープニズムに対する議論（同調性の強要）	10
日本の郊外とアメリカの郊外が決定的に異なる点	10
1-4 ニュータウンの現在（住宅地計画の動向）	11
サスティナブルコミュニティ	11
アウニー原則	12
住宅地計画の動向	13
1-5 本論の構成	14
2章：調査対象地および調査方法の概要	15
2-1 調査対象地の概要	15
歴史的背景（大湯村開発の経緯）	15
地理的概要	15
営農方法、集荷方法	16
人口、世代構成の変化	17
当時の住宅地計画論	17
集落計画の変遷とその背景	19
大湯村開発を巡る前後の調査研究	22
大湯村の特徴（調査地選定の理由）	23
2-2 調査の概要	26
(1) アンケート調査	26
(2) 実測・インタビュー調査	27
(3) 街路の実踏調査	27
(4) 計画初期、経年的な変化に関する調査	27
2-3 アンケートの回答者像	28

3章：住宅レベルの居住環境の変遷（住宅の増改築）..... 29

- 3-1 住宅の初期計画 29
- 3-2 調査方法 34
- 3-3 アンケート統計からみた住居改変の概要 34
 - 初期住宅の残存と増改築の回数 34
 - 増改築の内容 35
 - 増改築時期毎の分析 35
- 3-4 実測事例からみた住居改変の詳細 40
 - 面積の拡大とその要因 40
 - 用途の変遷 41
 - 緑地による接続 44
 - 増改築の順序 44
- 3-5 増改築の動機と決定要因 44
 - 増改築の計画性 44
 - 動機と決定要因 45
- 3-6 まとめ 48

4章：住区レベルの居住環境の変遷（街路景観の形成）..... 49

- 4-1 住区の初期計画 49
 - 大塚村の住宅の構成 49
- 4-2 調査方法 50
- 4-3 緑道の現状 51
- 4-4 街路景観の構成要素 53
- 4-5 (1) 宅地における住宅の位置と増築方向 53
 - 住戸形状の傾向 53
 - 住戸形状と接道方向 56
 - 街路毎の住戸形状の収束 58
- 4-6 (2) 外構（住宅まわりの敷地）の使われ方 58
 - (a) 作業場化 58
 - (b) 農園化 59
 - (c) 庭園化 59
- 4-7 (3) 宅地と街路の境界状態 59
 - 生け垣・塀 60
 - 花壇 60
 - 側溝 61
 - 車庫 61
 - 道の引き込みによる境界の曖昧化 61
- 4-8 街路景観構成要素の相互関係 62
- 4-9 街路景観の収束 64
 - 奥配置型による街路景観（建物間与） 64
 - 奥配置型による街路景観（植木間与） 65
 - 近接配置型による街路景観 65
 - 直交配置型による街路景観 66
- 4-10 面影とスカイライン 66
 - 住戸残存（目視） 67
 - スカイラインの傾向 67
- 4-11 まとめ 68
 - 大塚村特有の景観の醸成 68
 - デザインコードなきデザインコントロールの可能性 68
 - 幾何形態がつくる景観の可能性 70

5章：地域レベルの居住環境の変遷（特徴のある場所の誕生）..... 71

- 5-1 地域の初期計画 71
 - 総合中心地の計画 71
 - ベリーの近隣居住区との比較 74
 - 一般的な居住者の村内所有地 75
 - 計画の現状とその要因 76
- 5-2 調査方法 77
- 5-3 記入マップからみた活動領域 78
 - 広範な活動領域（村外の活動領域） 78
 - 車社会化による村内施設の変質（自立型からネットワーク型へ） 78
 - 徒歩圏（村内の活動領域） 80
- 5-4 村内の交流活動 84
 - 72の村内サークル 84
 - サークル参加態度の二極化 85
 - サークルに参加するきっかけ 85
 - サークルの拠点は公民館 85
 - 情報流通の場としてのサークル 86
 - 「組織なかな人間」におけるサークル活動 86
 - 選択的な行事の参加 87
- 5-5 個人の場所展開（ケーススタディ） 88
 - サークル拠点型 88
 - 村外重視型 90
 - 二代目 92
- 5-6 場所の特徴付け 94
- 5-7 地域に蓄積される知識 100
 - 「地域の知恵」としての情報の共有 100
 - 地域に蓄積された情報から生まれるあたらしいつながりや場所 101
- 5-8 まとめ 102
 - 核を持った広域化 102
 - 行動圏と軸性 102
 - 全員参加から同好の士へ 102
 - アイデンティティのある場所へ 103
 - 記憶装置としての地域、地域の知恵の蓄積と活用 103

6章：まとめ..... 105

- 住宅レベルの居住環境の変遷（3章） 105
- 住区レベルの環境の変遷（4章） 106
- 地域レベルの居住環境の変遷（5章） 107
- 計画的居住環境の醸成モデル 108
- つくられたものから、つくったものへ 109
- 現在の住宅地計画への示唆 109
- 現状から見た初期計画の位置付け 112

参考文献..... 113

付録

岩佐明彦

■1章■序■

■背景■

本論は1960年代に干拓事業で建造された秋田県大潟村のケーススタディを通し、日本における高度成長期以降の大量供給型の住宅地（ニュータウン）の計画的居住環境に関して研究するものである。

1961年に着工された千里ニュータウンを端緒として、1960年代から1970年代の初頭は日本中がニュータウン開発に沸き返った時代であった。これらのニュータウンは、高度成長、都市人口の増大を背景とした大量供給時代の計画と位置づけられるもので、機能的側面や適用された計画理論に数値的な裏付けが重視され、極めて「計画された」居住環境となっており、これらの住宅地は建造された時代的な背景を含め、以下のような特徴を挙げることができる。

- ・機能的合理性の追求 ・数値的な目標の設定と充足 ・一括、一掃型の計画
- ・近代建築様式の採用 ・工業的生産手法の一般化

■研究の狙い■

- (1) 計画的居住環境の醸成モデルを明らかにすること
- (2) 初期の住宅地計画を現状での検討すること。
- (3) 現在の住宅地計画に対する示唆を明らかにすること。

■研究の特色■

- (1) 計画された居住環境を対象としている点
- (2) 住居から地域まで包括的に扱っている点。
- (3) 個人の構築している環境に立脚している点。

■本論の構成■

本論は大潟村の計画された居住環境に関して、以下の3つのスケールに分けて考察している。

- ・住宅レベル（住宅の増改築）（3章）
- ・住区レベル（街路景観の形成）（4章）
- ・地域レベル（特徴のある場所の誕生）（5章）

■2章■調査対象および調査方法の概要■

■調査対象地の概要■

—「究極のニュータウン秋田県大潟村」—

秋田県八郎潟の干拓・新農村事業（1954～1977）によって誕生し、1967年に入植が始まった。秋田県大潟村の住宅地計画は、規模こそ小規模（589戸）であるが、ニュータウン建造ブームの真っただ中で計画された住宅地であり、当時のニュータウン建造理論の影響を根強く受けたものとなっている。特に大潟村はもとが湖底で全く何もなかったところであり、地形は極めて平坦であり、地権の影響を受けることもなく、これらの建造理論が極めて純粋な形で実現しており、「究極のニュータウン」とでもいうべき極めて人工的に計画された居住環境となっており、計画的居住環境を考察する上で興味深い事例となっている。

大潟村の面積は山手線の内側の約3倍にあたる約17,000haで、そのほとんどが田畑であり、居住地は総合中心地といわれ、村の西側一ヶ所に位置している。

総合中心地の特徴は、機能による明瞭なゾーニングである。総合中心地の中央にはセンターベルトが設置され、公共施設が配されており、そのベルトを挟むように居住区が配されている。居住区は400m×500mの5つの住区からなっており、それぞれの住区には約150世帯の住戸が40～50戸毎の小ブロックに分割されて建造されている。農業に関する施設は、住居とは全く分離する計画が行われており、総合中心地の東側にまとめて格納庫が集められた地域と、家庭菜園用の敷地がある。

■調査方法■

- (1) アンケート調査（対象：全住戸796戸（返却24%））
- (2) 実測・インタビュー調査（15軒21名、住居の事例収集は11例）
- (3) 街路の実踏調査（村内全街路）
- (4) 計画初期、経年的な変化に関する調査（航空写真、村報、研究報告集）

■3章■住宅レベルの居住環境の変遷（住宅の増改築）■

■アンケート調査による量的把握■

現在入植開始から30年が経過した現在、各住戸は平均2.5回の増改築を経ているが、86%の住居で初期住戸が何らかの形で現存していることが分かった。初期住宅が最小限の規模であったことと、宅地に十分に余裕があったことから、増改築は新たに必要となった空間を初期住宅に追加する形で進んでいる。増改築の経年的な頻度の分析より、各住戸はほぼ10年に1度増改築を行っており

- (1) 入植直後の車庫等生活に必要な機能の増築。
 - (2) 量的な拡充を主眼とした増築。
 - (3) 機能の充実など質の向上に目を向けた増改築。
- と、いうシフトが読み取れる。

■実測調査による詳細の把握■

実測調査をおこなった11事例を初期計画からの派生で現在の住宅を分類すると

- (1) 初期計画が踏襲され、その延長線上的に拡張されているものが8例。
- (2) 初期計画に対して何らかの抜本的な変更が加えられているものが2例。
- (3) 全く刷新され新規に作られているものが1例。であった。

■増改築の動機と決定要因■

増改築を通して住居を改組していく際の動機と決定要因として以下の項目が指摘された。
家族数の変化・メンテナンス・職関係の導入・生活の向上、充実、趣味化・防風・住居以外の所有空間との関連・近隣の影響
またこうした増改築のノウハウや技術が近隣で共有されており、知識の共有・蓄積が、居住環境の持続に貢献している可能性も指摘した。

■4章■住区レベルの居住環境の変遷（街路景観の形成）■

■街路景観の決定要素■

<1.宅地における住宅の位置>

各宅地での住宅の位置は「南に開く」、「西に閉じる」の2傾向がみられ、それぞれ日照、防風が原因であると推測される。

街路境界付近建物の配置傾向を4つのパターン（奥配置、直交配置、二棟配置、近接配置）に分けて検討したが、宅地の入り方毎でパターンの分布に偏りが見られ、街路境界付近の住戸の配置構成が、街路毎（＝宅地の入り方が同じ）で収束する傾向が見られた。

<2.外構の使われ方>

外構の使われ方は、作業場化、農園化、庭園化、の3つに大別され、庭園化として独立しているのではなく、住宅や街路との相互影響で、その使われ方や街路との境界が決定づけられている。

<3.宅地と街路の境界状態>

宅地と街路の境界近傍の「生け垣・塀」、「花壇」、「側溝」、「車庫」、「引き込み」の5要素に関して考察。

■街路景観の決定要素の相互関係と街路景観の収束■

街路景観の構成要素の中には、関連があり同時に存在することが多いものや、同じ宅地では一緒に存在することが考えられないものがある。ここでは、相互関係をポジティブなものやネガティブなものに分けて分析した。方角（宅地と街路の関係）で建物の配置が決定されることが、それ以外の要素にも関連しており、増改築によって類似化した住戸配置が、景観構造の緩やかな枠組みとして働き、景観醸成の方向付けが行われていると考えられる。

また本論では、上で述べた相互関係を踏まえ、街路景観の典型的な収束例4つを実例に即して検討した。

以上より、

- ・大湯村独特の街路景観が醸造、郊外型の街路景観の醸成
 - ・デザインコードに縛られない街路景観の収束
 - ・幾何形態がつくる景観の可能性
- を示した。

■5章■地域レベルの居住環境の変遷（特徴ある場所の誕生）■

■記入マップによる活動領域の検討■

・行動圏の核を持った広域化

大湯村は計画の段階で車の利用を前提とした地域計画（通農式、ラドバーンなど）が行われていたが、周辺の幹線道路にロードサイドショップ、郊外型大型店舗がつくられ、大湯村が周辺地域も含めた車社会圏に組み込まれることで、広域な活動領域の中から商店、施設を選択的に利用することが可能になっている。

また、大湯村村内の施設はもともとは、商業施設も含め村内の利用を想定し、そこで一定の生活が完結する衛生都市のような地域計画がなされていたが、村内からの利用を想定した施設がつくられるなど、広域な周辺地域との関係性を配慮し、村内施設の機能に変化している。

ただし、徒歩圏である村内には、生活を充足するための機能は最低限確保されており、車の利用によって実現しているのは選択肢の拡張であり、ここでの広域化（郊外化）は、車なしでは生活が成立し得ないエッジシティ的な広域化とは異なる、核を持った広域化と言える。

・行動圏と軸性

居住者の行動圏は、住居とセンターベルトの中心部分をつなぐ形で展開されており、センターベルトが持つ軸性によって規定される傾向が指摘できる。

また、センターベルト上の施設の内容も行動圏に影響を与えるなど、センターベルトの軸性が村内の空間の性格付けに関与している。

■村内の交流活動■

・全員参加から同好の士へ

村内の交流活動は、サークルに関しては、活動に対する参加不参加が二極化しており、行事の参加に関しても以前ほどの参加率でなく、選択的な参加となっている。同時期に入植し結束が固かったこともあり、何事も村民総決起状態だったのが、自分の興味のあるサークルや行事に選択的に参加し、そこで自分と趣味、志を同じくする少数の仲間と濃密に付き合うかたちにシフトしつつある。また、村内にとどまらず村外も含めた広域を志向する例も見られた。

■場所の特徴付け■

大湯村は、元々は何もない湖底であり、入植直後は計画されたものしかないという極めて空白された環境であったと言えるが、居住30年が経過し、そこで様々なことが行われたことや、これらが居住者に記憶・共有されることにより、居住者に特徴を持って認識される場所となっている。これらは、具体的な機能を持つ訳ではないが、場所に対する愛着や住民の共有感情の拠り所になるなど、場所にアイデンティティを与えるきっかけになっているものもある。

本論ではこうした場所の例として、視覚的な象徴、特別な体験の提供、出来事・事件、個人的な出来事・体験、運営への関与、人のつながり、収穫、他者の仲介、予定を越える機能、定期的な利用を挙げた。

■地域に蓄積される知識■

・地域の知恵

大湯村の居住者が長年の付き合いの中で、お互いの特徴や持っている能力、知識といったものを少しずつ認識し、そうした断片的な知識、情報が村内の組織やサークル活動など、様々なネットワークを通して共有されることで、地域に蓄積され活用される「地域の知恵」というべきものの存在が指摘できる。この他にも、共通の場所の記憶や、増改築のノウハウなど、様々な形式や方法で知識や情報が地域にストックされている。

・地域に蓄積された情報から生まれるあたらしいつながりや場所

こうした知識の蓄積が生かされることで、それぞれに異なった領域に詳しい有志が集い、個人では出来ないような大きな働きかけを地域に対して行うことになった例もある。本論では、お互いのノウハウを持ち寄ることで、クルミを防風林として植え、クルミの収穫を障害者や高齢者が担当し、それを加工して、地域の畜産品として販売している例などを挙げている。こうして地域に蓄積された知識が、居住者の生活を支えたり新しい展開を生むことは、地域の知恵の還元作用作用ということでもでき、居住者が一方的に環境に働きかけ、加工していくのではなく、情報環境として居住者と場所は分かちがたい関係を構築しており、環境とのトランザクショナルな関係を見ることが出来る。

■6章■まとめ■

■計画的居住環境の醸成モデル■

以上より、計画的居住環境の醸成を次の4要件に分類した。

(1) 初期計画（現状）の矛盾点との対立、克服

計画され、与えられた環境と実際の生活との擦り合わせ。相剋する要因を統合するプロセスは、より居住環境を自分に親近なものとして引き寄せる過程であると考えられる。例としては、住宅の入植時数年内に行われた増改築、初期計画では予定されていなかった機能の追加、近隣地域の車社会化や、営農方法の変化による地域の使われ方や施設の変化などが挙げられる。

また、こうした矛盾点の発生、克服は居住の初期だけでなく、経年的なライフスタイル、住欲求の変化によっても起こり得る。特に現在は、世代交代による2世帯化の波が押し寄せており、現状住居に対する見直し期となっている。

(2) アイデンティティの確保

同じように均質だった空間に意味付けし、差異化すること。例としては、初期住宅が個人に合わせて差別化されたこと、街路毎の特徴を獲得した街路空間、場所の特徴付け。

(3) ストック（知識の環境への埋め込み）

アイデンティティ以上の付加的な情報を、地域やコミュニティが蓄積すること。先の章で説明した「地域の智慧」や住居の増改築のノウハウや技術が工務店や近隣の増築手法の相互参照といったかたちで村内に蓄積されることなど。

(4) 還元（トランザクショナルな環境の構築）

居住者の一方的な環境への働きかけ・加工だけではなく、逆に環境側から居住者に地域に蓄積された知識や情報が提供されることで、生活が支えられること。人のつながりによって居住環境に新しい展開を生んだクルミ園の例など。

これら(1)から(4)の要件は環境の様々なレベルに関わることであり、単純に双六のように(1)から(4)へとステップアップしていくものではない。入植初期においては(1)から(2)そして(3)、(4)という傾向も指摘できるが、世代交代による再度の見直しなどより戻しもあり、単純なプロセスではなく、(1)、(2)、(3)が混然と行われる中で、やや上位な事象である(4)の事象が生み出されていくと考えられる。

■つくられたものから、つくったものへ■

大湯村の居住者にとって、初期の居住者環境は計画者に準備され、与えられたもの（「つくられたもの」）であったと言える。しかし、こうした環境の移行を経ることで、居住環境は居住者と一体化した「つくったもの」に進化している。

■現在の住宅地計画への示唆■

現在サステイナブルコミュニティで目標とされている「帰属意識を与えるデザイン」は、ポストモダニズム以降のデザイン手法を色濃くするもので、アイデンティティの確保のために、デザインコードの重視、あるテーマに沿った住環境の整備など、多くの物理的制約を伴うものである。

本研究では郊外型の規則的な街路の街路景観が、特徴ある景観に収束する事例を明らかにし、デザインコードで縛っていくとは違う、街路のアイデンティティの持ち方を指摘した。また、住区毎にテーマを設定し、居住開始以前に入念なつくり込みを行うデザインに対しては、先述した計画的居住環境の醸成モデルのような、経年変化を踏まえたアプローチが考えられる。

■現況から見た初期計画の位置付け■

初期計画の主たる決定原理であった「機能の割り当て」、「規模の設定」はともに30年後の現在から振り返ると、現況とは大きく異なるものとなっている。

しかし、居住の変化を追っていった時、こうした初期計画は、居住環境が醸成していく際には、先の醸成モデルにあるように、対立・克服すべき対象ともなり得るが、環境の発展を疎外せず、ある一定の方向付けを行う「枠組み」のようなものとして作用している。

居住環境としての醸成を、単純に居住者の住みこなしの成果として捉えるだけでなく、その醸成の枠組みとしての初期計画の介在を指摘することができる。

1章：序

1-1 目的と背景 1

初めに 1

「究極のニュータウン」秋田県大湯村 2

研究の狙い 3

研究の特色と位置付け 3

用語に関して（ニュータウンと郊外） 5

1-2 ニュータウンを巡る言説（計画的居住環境に関する言説） 5

空間的違和感（均質性、画一性、地形） 5

生活環境としての疑念 6

ほろびゆく農村集落へのノスタルジー、既存とのコンフリクト 7

ニュータウンを原風景とする世代 7

近年の郊外批判 8

1-3 サバール（アメリカの計画的居住環境） 9

アメリカの郊外開発の背景 9

アメリカの典型的郊外：レヴィットタウン 9

サバールバニズムに対する議論（同調性の強要） 10

日本の郊外とアメリカの郊外が決定的に異なる点 10

1-4 ニュータウンの現在（住宅地計画の動向） 11

サステイナブルコミュニティ 11

アウニー原則 12

住宅地計画の動向 13

1-5 本論の構成 14

1章：序

1-1 目的と背景

初めに

本論は1960年代に干拓事業で建造された秋田県大湯村のケーススタディを通し、日本における高度成長期以降の大量供給型の住宅地（ニュータウン）の計画的居住環境に関して研究するものである。

1961年に着工された千里ニュータウン（註）を端緒として、1960年代から1970年代の初頭は日本中がニュータウン開発に沸き返った時代であった（図表1-1）。これらのニュータウンは、高度成長、都市人口の増大を背景とした大量供給時代の計画と位置づけられるもので、機能的側面や適用された計画理論に数値的な裏付けが重視され、極めて「計画された」居住環境となっている。これらの住宅地は建造された時代的な背景を含め、以下のような特徴を挙げることができる。

機能的合理性の追求

住戸に関しては、LDKといった空間の機能割り当てが行われ、地域計画に関しては近隣住区ユニット、道路と商業施設と公園の階層的配置などのゾーニングが行われ、室内から地域まで、各スケールで機能的な合理性の検討が行われている。

数値的な目標の設定と充足

行政の管理の下で進められた事業も多く、明確で説明可能な数値的な根拠が決定原理に反映されている。上述の機能的合理性の追求も含め、科学的な決定原理が支配的である。

一括、一掃型の計画

何もなかった丘陵地や農地だったところに建造される場合が多く、既存との関係が希薄または皆無で、住居とそれに関連する施設がすべて一括で計画される。

近代様式の採用

特に公共施設群はモダニズム建築が多用されている。

工業的生産手法の一般化

住宅の大量供給のために、規格化、標準化などが行われ、工業的生産手法が取り入れられている。

このように、質の問題よりも量の問題の解決が急がれ、1970年の万国博覧会を初めとした技術至上主義が謳歌された時代の、こうした住宅地は、以降様々な批判を浴びることになる。

（註）日本における最初の大規模住宅地開発は、千里ニュータウン（大阪府吹田市）であり、昭和33年（1958年）5月に開発が決定され、昭和36年（1961年）に着工、大阪万国博覧会が開催された昭和45年（1970年）にプロジェクトが完了した。

こうした大規模な住宅地開発の背景にあるのは、1955年の朝鮮戦争勃発を期に本格化した敗戦後の日本の産業復興と、それに伴う都市労働者人口の急増、その人口を収容するための住宅地建造が急務とされたことである。1963年には土地の強制買収を可能とする条項を含んだ「新住宅市街地開発法」が施行されるなど、政策的な後押しもあり、千里ニュータウンの開発を皮切りに1961年から1975年の15年の間に全国各地で公共、民間合わせて、188ヶ所、約50,000ヘクタールの大規模住宅地開発（通称ニュータウン開発）が事業化された。

（片寄「実験都市」P.3より）

これらのニュータウン開発は、日本の戦前からの住宅地開発の技術的ストック、戦後になって伝えられたバリーの近隣住区論を初めとする海外の技術理論を応用することで計画、建造が進められた。

「究極のニュータウン」秋田県大潟村

1957年に干拓事業が開始され、1964年に干陸（湖が干上がって陸地化する）こと、1967年に入植が始まった秋田県大潟村の住宅地計画は、規模こそ小規模（589戸）であるが、ニュータウン建造ブームの真っただ中で計画された住宅地であり、当時のニュータウン建造理論の影響を根強く受けたものとなっている。特に大潟村はもともとが湖底で全く何もなかったところであり、地形は極めて平坦であり、地権の影響を受けることもなく、これらの建造理論が極めて純粋な形で実現しており、「究極のニュータウン」とでもいうべき極めて計画された居住環境であった。



図表 1-2 大潟村総合中心地俯瞰写真
（「新農村の歩み」より）

名称	面積(ha)	人口(人)	戸数(戸)	人口密度(人/ha)	建設期間	開発主体
1 下野橋団地(第1～3)	341	52,900	14,400	155	62～72	札幌市
2 大泉団地	215	27,000	7,200	126	64～69	北海道
3 北沢団地	430	33,000	8,800	77	68～74	北海道
4 白鳥団地NT	182	20,000	5,250	110	65～71	宮城県
5 鶴ヶ島団地	177	23,000	6,335	130	66～71	仙台市
6 研究学園都市	2,700	160,000		59	66～76	住宅公団
7 成田NT	487	60,000		125	68～73	千葉県
8 千代田NT	2,913	340,000		117	67～76	千葉県
9 北宮野NT	148	27,000		182	64～67	住宅公団
10 津光台	207	31,000	8,500	159		住宅公団
11 津南台	300	47,000	12,000	157	69～72	住宅公団
12 多摩NT	3,011	400,000	110,000	133	65～77	東京都、住宅公団、東京都住宅供給公社
13 大塚NT	156	25,000		160	66～69	住宅公団
14 高蔵寺NT	850	87,000	22,000	102		住宅公団
15 四日市	165	18,000	4,600	109		三菱房
16 岡南	291	13,000	4,600	45		住宅公団
17 金岡	216	31,000	7,880	144	59～69	住宅公団
18 金岡東	234	40,000	10,500	171	68～74	住宅公団
19 高井ヶ丘	298	50,000	12,500	168	65～73	住宅公団
20 平塚I	349	43,000	11,000	123	65～75	住宅公団
21 平塚II	260	32,000	8,000	123	65～75	住宅公団
22 清瀬NT	285	43,500	11,850	153	69～74	京都市
23 八幡	186	32,000	8,500	172	65～72	住宅公団
24 香見	155	26,000	6,100	168	55～65	住宅公団
25 藤井	287	40,000	10,000	139	67～78	住宅公団
26 北神戸(第1～5)	502	75,000	19,000	149	68～77	住宅公団
27 武蔵野(第1～5)	340	118,000	31,000	126	61～74	神戸市、西川土地開発整理組合、兵庫県庁建設局
28 所沢・西子団地	161	34,000	8,500	211	64～69	兵庫県
29 西子東	199	35,000	9,000	181	67～73	住宅公団
30 西子西	240	35,000	9,000	146	67～73	住宅公団
31 西子南	225	25,000	6,420	111		横浜市
32 大宮山NT	238	43,500	11,850	186		富山県
33 大宮山NT	217	20,800	5,050	129		新潟県住宅供給公社
34 大宮山NT	94	10,000	2,330	106		新潟市
A 千代田NT	1,160	150,000	37,330	129	61～69	大潟村
B 大潟NT	1,520	168,000	47,000	124	66～74	大潟村

図表 1-1 日本の大規模ニュータウン計画（片寄俊秀「実験都市」より作成）

研究の狙い

本研究は大潟村の計画された居住環境のケーススタディを通して、以下を狙いとしている。

(1) 計画的居住環境の醸成モデルを明らかにすること

東京の谷中のような居住環境には、永年の居住で蓄積された有形無形の歴史的、伝統的なストックがあり、それが居住環境を支えている。一方、大潟村のような更地から生まれた居住環境は、スタートの段階は何の蓄積もなかったが、居住30年で特有の居住環境が構築されている。

ニュータウンは、従来の都市や農村とは成り立ちが異なるものであり、こうした環境独特の熟成の仕方があるのではないだろうか。全く更地であった所で居住をスタートさせ、現在に至るまでの変遷を追うことにより、計画された居住環境の熟成プロセスを明らかにする。

(2) 初期の計画の現状での検討

大潟村の建造時の計画は30年が経過した現在、当時の予測や見込にあった使用形態を保っているものもあれば、修正を余儀なくされたものもある。当時の初期計画を決定原理から振り返るとともに、現況との比較検討を行う。

(3) 現在の住宅地計画に対する示唆

現在、持続型社会に対応したサステナブル・コミュニティなど、新しい視点からの住宅地計画の提案が行われるつつある。こうしたデザインが環境の質、帰属意識の高揚などに結びつくのかという問題意識を踏まえ、30年前の住宅地計画の検討を通して現在の住宅地計画への示唆を見出す。

研究の特色と位置付け

この研究の特色として挙げられる点は以下の通りである。

●計画された居住環境を対象としている点

ニュータウンを初めとする計画された居住環境に関しては、建築以外のジャンルでも、その居住環境に関して様々な言説がなされている一方、建築においては居住後の生活環境の変遷に関しては十分に研究が進められていない。

●住居から地域まで包括的に扱っている点

居住環境に関しては、住居、住区、地域のそれぞれの視点から研究したものは多くあるが、一つの地域に関して包括的に分析したものとしては、根津・谷中地域を中心に行われた高橋麗志らの研究（註）を挙げることができるが、関連研究はあまり見られない。

（註）東京大学建築学科高橋麗志研究室：平成6～9年度文部省科学研究費補助金基盤研究（A）「地域空間の環境行動的研究」

本研究は、住居に関しては増改築、住区に関しては街路景観、地域に関しては場所との関わり方を中心に考察を進めている。以降、それぞれについて関連する既往研究について概説する。

(住宅)

住宅の増改築、住みこなしに関する研究にはたくさんの蓄積があるが、これらの研究には同済会集合住宅など、生活環境として一定の評価を受けている良好な住宅を対象とし、そこから知見を得るという推奨先駆例の研究が多くみられる。一方、都市におけるストックとして戦後以降の大量供給住宅を評価し、その維持運営手法を研究するという立場から、近年はマスプロダクト型の住宅を対象とした研究(註)が行われるようになっていく。

(街路)

都市の構造や成り立ちと街路景観の関わりに関しては、様々な観点から研究が進められているが、研究のフィールドとしては、(1)渋谷など不特定多数が利用する都心の盛り場空間を対象にしたもの、(2)下町など伝統的な空間を対象にしたものなどが多く、日常生活空間、特に本研究が対象としているような計画された住宅地の街路景観を対象とした研究は少ない。

(地域)

地域環境を居住者の視点から明らかにしようとしたものには、橋(註)による根津・赤羽台を対象とした研究がある。また、篠崎(註)は「生活資源」という今までの数量的な地域の評価(人口密度、1人当たりの延べ住戸面積、施設の分布状況、1人当たりの延べ住戸面積など)とは異なった視点から、地域の質を明らかにしようとした。また、西田(註)は居住者が地域に構築している様々な場所や人付き合いを如何にいかにより良好な状態に保っていくかという観点に立ち、「カスタマイズ」「メンテナンス」という用語を用いて、個人の環境への関わり方を明らかにしている。

●個人の構築している環境に立脚している点。

人口密度、地域内施設数、延べ床面積、世帯数、などといった社会調査的、マクロ的な視点から、居住環境にアプローチするのではなく、個々人が構築している環境を起点としている点。

(註) 森田芳朗「接地区域連続住宅の共同性の変化とその要因に関する研究—長住分譲セミデタッチドハウス地区の事例を通して—」(九州大学修士論文) など

(註) 橋弘志「高齢者にとっての地域環境に関する考察—根津・赤羽台におけるケーススタディ」(1992年東京大学修士論文)

(註) 篠崎正彦「生活資源」から見た地域における居住者の環境行動に関する研究」(1996年東京大学学位論文)

(註) 西田徹「地域環境の質の持続的支援における個人の役割」(1998年、文部省科学研究費補助金基盤研究「地域空間の環境行動的研究」報告書)

(註) レルフは、郊外とニュータウンの違いを以下のように定義している。

「ニュータウンは、郊外開発とは全く異なったものととらえるのが普通である。ヨーロッパではニュータウンは国による事業であるが、郊外開発は民間が行なう。しかしながら実際は、戦後の郊外地域とニュータウンとは多くの景観上の類似性を示している。それは両者が同時代のもので、その時代の建築の流行様式が採用されてきたからであり、ひとつの計画理念を採用したからであり、また同じ建築基準に従っていたからである。このことは、ニュータウンが郊外開発に携わった企業と同種の企業によって建設されてきた北アメリカにおいて特に当てはまる。厳格な見方をする人は、北アメリカのこうしたケースは本当のニュータウンではないと主張することもある(例えば Clawson and Hall, 1973, pp.198. を参照)。別の意見では、ニュータウンとは就業の場も含めて一体的に計画された自律的集落であるとされる(例えば Osborn and Whittick, 1977, pp.98-99)。雇用機会の有無にかかわらず大規模な開発ならばみなニュータウンと呼ぶ開発業者にとっては、後者のような定義でも快する定義である。私は、定義に勝手な限定を押しつけるよりも、私営事業のニュータウンと企業によるニュータウンとの区別だけをして、これらをすべて含んでおきたい。」(『20世紀の景観』P.172より)

用語に関して(ニュータウンと郊外)

ニュータウンとは、本来の意味では、就業の場も含めて一体的に計画された自律的集落であるとされ、20世紀初頭の田園都市運動の延長線上にあるものである。イギリスでは1946年にニュータウン法が施行され、大都市から溢れる人口を収容するために、14の自律的な都市が建設されている。(註)

一方、日本のニュータウンは千里ニュータウンを始め、都市部の勤労者の住居を建造するもので、自律的な都市の建造を指したのではない。また、郊外は都市の周辺を指す言葉である。ニュータウンの定義が本来の自律的集落であれば、郊外とニュータウンは明解に区別できるものであるが、日本においてはニュータウンは自律的なものではなく、ニュータウンの多くが大都市の近傍(=郊外)に位置していることから、ニュータウンは郊外の一部と見なすこともできる。

1-2 ニュータウンを巡る言説(計画的居住環境に関する言説)

ニュータウンが1960年代の末に誕生して以来、計画された居住環境に関しては、様々な言説がなされている。これらには新しい環境に対する違和感も含め、否定的なものも多いが、計画的居住環境の居住イメージを探るためにも、どのような論点、視点で語られてきたかを考察する。

空間的違和感(均質性、画一性、地形)

計画された居住環境を舞台にして書かれた小説のきわめて初期の作品としてあげられるのが、安部公房の「燃え尽きた地図」(1967)である。主人公は興信所に勤める探偵で、失踪した夫の調査を依頼された主人公が、依頼者の住む住宅地を訪問するシーンに計画された居住環境が象徴的に描かれている(図表1-3)。舞台である団地は幾何学的で均質な空間

するとたちまち、風景が一変した。白く濁った空に、そのままつづいているような、白い直線の道。幅は目測で約十メートル。その両脇の歩道との間に、ちょうど膝くらいの高さの欄干がこまれた。枯芝の帯がつづいていて、その枯れ方が一様でないせいだろうか。妙に遠近法が誇張され、じっさいには各階六戸、四階建ての棟が、左右にそれぞれ六棟ずつ並んでいるだけに、まるで模型にした無限大を見ているような錯覚におそわれる。建物の、直に面した部分だけが白く塗られ、わきをくすんだ緑で殺した、その色分けが、さらに風景の幾何学的な特徴をきわだたせているのかもしれない。この通りを軸に、団地は大きく両翼をひろげ、奥行きよりもむしろ幅のほうが広いらしいのだが、採光のためだろう、ながい道にすらすらと建ててあるもので、左右の見透しは、ただ乳色の天蓋を支える、白い壁面があるだけだ。誰も付添い人のいない、寒い乳母車の中で、頭からシーツをかぶった赤ん坊が、金切り声をあげて泣いている。銀色に光る変速機つきの軽合金自転車に乗った少年が、わざとらしい高笑いを投げつけながら、寒さに顔を染めてその橋を駆けぬける。見れば、けっして、人通りもあるのだが、あまりにも焦点のはるかなこの風景の中では、人間のほうがかえって、架空の映像のようだ。もっとも、住み馴れてしまえば、立場は逆転してしまうのかもしれない。風景は、ますますはるかに、ほとんど存在しないほど透明になり、ネガから焼きつけられた画像のように、自分の家だけが呼びよる。自分で自分の見分けがつけば、それで訳山なのだ。すっかり同じ人生の整理棚が、何百世帯並んでいようと、いずれ自分の家族たちの肖像画をとりまく、ガラスの額縁にすぎないのだから……

図表1-3 安部公房「燃え尽きた地図」(1967)より

として描かれ、主人公が依頼者の家を他の家と区別する手がかりは、部屋にかけられたレモン色のカーテンだけである。主人公は失踪した男を捜しているうちに自分自身の存在を見失ってしまう。

ここでテーマになっているのはアイデンティティの不安であり、その舞台装置として、「そっくり同じ人生の整理棚が、何百世帯」と並んでいる均質な空間である団地が選ばれている。

計画された環境の形態的な特徴を小説の舞台装置として取り入れた作品には、他には富岡多恵子の「波打つ土地」(1983)がある。タイトルにもなっている波打つ土地とは、丘陵を開発することが多いニュータウンの象徴的な空間形態である。

生活環境としての疑問

先述した安部公房の「燃え尽きた地図」は、計画された環境の外見のイメージを作品に用いていると考えられるが、そこで繰り広げられる生活の内実注目した作品としては、山田太一の「岸辺のアルバム」(1977)がある。多摩川沿いの郊外住宅地の一見平凡な核家族が崩壊していく様を描いたもので、これはテレビドラマ化され一世を風靡した。

このドラマが放映された1977年は、高度成長以降の価値観や生活の目標がある程度実現し始めた時期で、ずっと需要過剰だった団地にも空き部屋が見られるようになり、家庭内暴力(註)が問題になるなど、いままでの生活目標自体が問い直される時期であった。作者は作品の中で家族の父親に「この家は、まざれもなく自分の二十数年の成果だ。四十五歳で、すでにローンを終えている。しかし、それがなにになる。家の中身が、このありさまでなにになる」と言わせており、物語の中では郊外の一戸建ては戦後日本社会の生活目標(イメージ)の象徴であり、その夢が実現してしまった後の現状を描いたのがこのドラマであるといえる。このドラマ以前のホームドラマは「明るい」、「楽しい」、「温かい」家庭の物語であり、マスに流布していた郊外の幸福な生活を全否定することで、大きなインパクトを獲得している。

これとは対照的に、計画された居住地の一見殺風景に感じられる景観のなかに、生き生きとした生活の断面を見せようとしたものとしては、荒木経惟の写真集「都市の幸福」(1993)がある。これはマガジハウス社の「ダカーボ」誌に連載されていたもので、23区内のニュータウンの外部空間とそこで遊んでいる子供や往来する人々を撮影したものである(図表1-4)。後に荒木は「荒木経惟の写真術」(河出出版)でのホンマタカシ氏との対談のなかで、撮影に際しては、幸福感を出すために被

(註) 金属バットで両頬を殴るという事件が起きたのもこの年である。



図表1-4 荒木経惟「都市の幸福」より



図表1-5 小林のりお「Landscape」より
建造中の住宅や、既存集落との対比的な視線が多い。

(註) 小田光雄「＜郊外＞の誕生と死」より

ダンプカーが土を運んでいく光景は今でも目を閉じると再現される。彼は小学生の頃、よく近くの宅地造成地へ行った。丘を切り崩し、マンション建設の土台ができる過程を彼は観察したのだった。工事関係者以外立入禁止の区域で彼はブルドーザーの音を聞きながら砂遊びをしたのだった。彼が中学生になる頃、建設は収容を現した。それを見た彼は熱い感動にうちふるえた。キト一家はその建設の中の3DKの船室を買い、住みついた。そこが彼の新しい故郷となった。というわけで彼にとって工事現場やコンクリートの塊は郷愁をそそるものであり、森や野原と巨大なコンクリートの立方体の関係は調和の美なのであった。美しい故郷、新興住宅地。彼は自分の故郷によく似たこの場所ではのほのとした気分になった。

島田雅彦「亡命旅行者は叫び泣く」より

写体となった居住者にはいくつか恣意的な演出を加えた場合があったと述べているが、計画された環境の中に人の生活を見つめるという撮影の意図には違いはないと考えられる。

ほろびゆく農村集落へのノスタルジー、既存とのコンフリクト

ニュータウンの登場により、変質するニュータウンの周縁を舞台にしたものもある。

立松和子の「遠雷」(1980)の主人公は団地の隣の畑のビニールハウスでトマトを栽培しており、急速な郊外化によって、消滅していく農村集落が舞台である。周辺環境の郊外化と共に、主人公の生活は急変していく。「遠雷」は以降、「春雷」(83)、「性的黙示録」(85)の3部作となるが、主人公は土地を手放し、自分自身も都市社会に組み込まれることになる。

同じく郊外化の過程を捉えたものに小林のりおの写真集「Landscape」(図表1-5)がある。この作品は、東京や横浜近郊の郊外の風景が住宅地開発で変容していく様を追ったものである。「遠雷」同様、ほろびゆく農村集落へのノスタルジーに満ちた視点と言える。

ニュータウンを原風景とする世代

ニュータウンが誕生して40年が経過しようとしている現在、郊外で育った世代の中には、郊外の景観を現風景とし、作風の中に取り入れているものもある。小田光雄(註)によると、島田雅彦は郊外や団地を故郷とする最初の郊外文学の作家であるとされる。島田は「亡命旅行者は叫び泣く」のなかで郊外を図表1-6のように記述する。

また、重松清の「定年ゴジラ」(1998)は、郊外住宅で定年退職を迎えた人物が主人公である。舞台は開発から30年を迎えた郊外住宅地であり、新しい環境としてではなく、30年の居住を経た環境として捉えている(図表1-7)。

ホンマタカシの郊外写真集「TOKYO SUBURBIA」(1998)は、先述した荒木の「都市の幸福」のように計画された環境の中に生活感を見つめようとしたものや、小林の「Landscape」の開発前の農村集落へのノ

タルジーなどのように、郊外という環境に対して何らかの意味を見出そうとしない。淡々とした郊外の風景写真集である(図表1-8)。

必要以上の意味やドラマを求めない、まさに既存の環境としての郊外、またはそういう環境を受け入れる感受性を感じさせる。

近年の郊外批判

郊外の代表的な批判の1つに階層の偏りがある。これらの住居の価格や立地条件、大きさなどで購入者層が絞られ、所得や家族構成、年齢層などが、似通った「歪んだ」構成のため、

年齢層の偏り：学校の教室不足、統廃合

社会的階層の偏り：同調性の強調、横並び主義

などが問題視されている。

特に1997年に神戸のニュータウンで起きた幼児殺人事件以来、こうした社会環境の均質さや単調さが、義務教育の学校環境と近似した逃げ場のない環境をつくっているという指摘もされている(註)。



図表1-8 ホンマタカシ「TOKYO SUBURBIA」より

(註) 宮台真治「まほろじの郊外」(1997)

この街の名前は、くぬぎ台という。宅地造成が始まる以前は付近一帯が雑木林だったことに由来する。いまも住宅地を少し離れたところには自然が残っている。二十数年かけても、街の規模はほとんど広がらなかった。パズル景気の頃にはくぬぎ台の地価もそれなりに上がり、ということは都心に近い住宅地の地価はもっと上がり、もう少し好況が続いていれば周辺にマンションが建ち並ぶ風景を目にすることもできたのかもしれないが、残念ながら都心の住宅をあきらめた人々は急いで六軒手前にできたニュータウンの公園マンションに吸いこまれてしまい、くぬぎ台までおこはれは回ってこなかった。雑木林はおそらく二十一世紀になっても雑木林のままだろう。

くぬぎ台は大手私鉄の沿線開発の一環として造成されたニュータウンである。足掛け二十年近い分譲時期に従って一丁目から五丁目までに分かれていく。それぞれ四百戸ずつの分譲で、合計二千戸。山崎さんは第二期分譲、すなわち二丁目の住民である。

綿密なマーケティングリサーチによる坪単価設定ゆえか、くぬぎ台の住民の暮らしぶりはいまひとつなほ似通っている。

まず、一家の主な勤務先は、「大」付きかどうかはともかくとしても、それなりに名の通った企業。郊外とはいえ一区画が最低でも六十坪ある土地や建売住宅を買うのだ、やはりある程度の収入は必要である。当然、勤務先は都心になるだろうし、平社員というわけにもいくまい。

家族持ちであることも共通している。同じ金額を出せばもっと便利な場所にマンションが買えるのに、あくまでも一戸建にこだわるあたり、子供を緑豊かな街で伸び伸びと育てたいという信念が感じられるし、仕事も大事だが家庭も忘れないマイホーム・ライフの姿も想像できるはずだ。さらに「育てたい」と願うぐらいだから、子供は小学生以下、せいぜい上の子が中学生といったところだろう。

かくして、くぬぎ台ニュータウンは分譲のたびに、三十代後半から四十代初期のサラリーマンの一家を迎えることになった。いわば小市民の街である。優しいパパの街である。ローンを背負い、終電の時刻にせき立てられながらがんばる夫の街である。

そしていま、くぬぎ台は世代交代の時期にさしかかっている。

数年前から一丁目、いま、二丁目、これから先も三丁目、四丁目、五丁目と順に。

かつて一家の主としてこの街に移り住んできた中堅サラリーマンたちが、一人また一人と定年を迎えていく。レミングの行進しながら、あるいは朝六時五十七分発の新宿行き急行電車に乗り込むときのように、一人ずつ、切れ目なく、「老人」になっていくのだ。

図表1-7 重松清「定年ゴジラ」より

1-3 サバール (アメリカの計画的居住環境)

アメリカの郊外開発の背景

郊外という日本以上に劇的なのがアメリカ合衆国の場合である。

アメリカの郊外(サバール)の劇的な拡大は第二次世界大戦後に始まるが、その背景にあるのは、

1) 退役軍人のための住居が必要になったこと

2) ベビーブームによる家族数の増加と子供の養育に相応しい居住環境としての郊外への期待

3) ニューディール政策による大幅な金利引き下げ

であるとされる。1955年までに一日に平均4000戸の家族が都市を離れ郊外へと転居し、全人口の25%が郊外で生活しており、1950年代の末には国民全体の三分の一にあたる人口が郊外居住者となり、郊外居住者層が、アメリカの主流居住者層となった(註)。

(注) 数字は大場正明「サバールの憂鬱」による



図表1-9 ペンシルバニア州レヴィットタウン (1950年代初期) (『20世紀の都市景観』より)

アメリカの典型的郊外：レヴィットタウン

アメリカの郊外住宅地の典型例として引き合いに出されることが多いのが、レヴィットタウンである(図表1-9)。レヴィットタウンは、William Levittの経営するLevitt & Sons社によって建造された住宅地で、1947年にロングアイランドで建造が始まったのを皮切りに、ペンシルバニア、ニュージャージーで、それぞれ1万7千戸規模で建造された。レヴィットタウンに関しては、多くの文献で様々な角度から論じられているが、レヴィットタウンの特徴として指摘されているのは

- ・組み立てライン建設システムを採用した安価な住宅建造システム
- ・ケープコッド(切妻小屋風)、ランチャー(牧場風)、コロニアル(植民地時代風)という極めて記号的、典型的な3つの住宅様式のからの住居選択。

・近隣住区的な住区を一つづつ付け加えていく無限拡張的な建造方法。

(まとめて大型ショッピングセンターを併設)

の3点が上げられる。また、この住宅に対する議論は大きく2点に分類できる。

(1) その後の郊外像を決定づけた住宅地としての功罪(註)

レヴィットタウンが決定付けたとされる以降の郊外環境に対して議論するために、レヴィットタウンで採用されたシステムに関して議論したもの。

(註) ジョージ・リッファ「マテドナルド化する社会」(1999)など

(2) 居住環境として成熟した点を評価するもの(註)

上述の議論が建造当時の居住環境に関して議論したものであるのに対して、その後の環境の醸成に関して一定の評価をしていこうという態度。

サバーバニズムに対する議論(同調性の強要)

こうした急激な社会の郊外化を背景として、郊外(サバーバニズム)に対する議論が熱心に行われた。初期の郊外研究の代表的なものと考えられるのが、ホワイトが1959年に著した「THE ORGANIZATION MAN(邦題「組織の中の人間」)」に描かれた郊外像(註1)である。この書は「オーガニゼーションマン＝組織に拘る人」の存在を多くの事例を通して明らかにしたもので、個人社会であり、自由の獲得を近代化の第一義としていた西洋社会に少なからず衝撃を与えた。ホワイトは郊外をOrganization manの巣窟とし、パークフォレスト、レヴィットタウンをフィールドにして、多くの言及を行っている。

吉原(註2)によると、ホワイトを含めサバーバニズムに対する議論は相互に対抗命題を包蔵している場合も多く、バリエーションに富んでいるが、これらの議論から引き出されるサバーバニズムの性格に関しては、共通に以下の3つの特徴が挙げられるという。

- 1) 社会構成面における強い近隣関係
- 2) 階級の衰弱(→「中間層化」)
- 3) 拡大された家族機能

そしてこれらの3つの特徴が幅射して「階級なき郊外社会」というイメージが増幅されてきたこと、そしてそうしたイメージの増幅過程で郊外の「同質性」が強調され、こうした強調の時に、「垣根のない個人の芝、公共の大公園、並木の続く街路、低密度、そして随意に建ち並ぶ個人住宅」という郊外像がますます神話化されるとともに、同質性が画一性を生み、ひいてはコンフォーミティ(同調性)を強制することになるという。こうした同質性の神話が実は同調性の悪夢を呼び起こすという点に、サバーバニズム論の一つの基本的特性を見ることができるとしている。

日本の郊外とアメリカの郊外が決定的に異なる点

アメリカの郊外と日本のニュータウンの成立の背景で、大きく異なる点としては、以下が考えられる。

(註1) 松村秀一「住宅」という考え方(1999)など

(註2) ホワイトは「組織の中の人間」のなかで、郊外居住者の生活を象徴するものとして、当時の住宅広告を紹介している。

「一杯のコーヒーそれはパーク・フォレストのシンボルです。パーク・フォレストでは、コーヒーポットが一日中湯気を立てています。この友情のシンボルは、お隣り何士が互いの交わりをどんなに楽しんでいるかを物語るものです。」

「その人たちはお互いに年日の楽しみをわかち合うこと。そうです、憎しみもまたわかち合うことができます。私たちが感じているのです。小さな町の友情に花咲くパーク・フォレストにおいでなさい。しかもなお、あなたは太都会にこんなにも近く住んでいるのです。(パーク・フォレスト住宅会社の広告。1952年11月19日)」

「組織の中の人間」W.H. ホワイト 下巻135

「パーク・フォレストでは、あなたは解離感をもつことができます。私たちの町に足を踏み入れると、あなたは気づくでしょう。あなたは温かく迎えられ、

大きなグループに仲間入りでき、孤独な大都会にかわって、友情に溢れた小さな町で生活することができ、あなたなしではつまらない友達をもつことができ、

その人々との交際を楽しむことができることを。」

「さあ、おいでなさい。パーク・フォレストの精神がどんなものであるかをみつけて下さい。(パーク・フォレスト住宅会社の広告。1952年11月8日)」

「組織の中の人間」W.H. ホワイト 下巻135

(註2) 吉原直樹「都市の思想」(1993)



図表1-10 アメリカ軍居留地と日本の郊外住宅(西武新聞社「空から東京・多摩」より)



図表1-11 幹線道路を中心に広がる典型的なエッジシティ(川村健一「サステイナブルコミュニティ」より)

(註) 川村健一は、サステイナブル・コミュニティの構成要素として以下の7つを挙げている(サステイナブル・コミュニティ p.101)

- ・アイデンティティ
- ・自然との共生
- ・自動車の利用削減のための交通計画
- ・職住近接を実現するミックスユース
- ・広場、道などのオープンスペースの確保
- ・画一的でなく、いろいろな意味で工夫された個性的なハウジング
- ・省エネ・省資源

人口の流動性

日本の郊外住宅はいわゆる住宅双六のあがりにあたる環境であり、一生暮らす環境として捉えられることが多いのに対し、アメリカの郊外居住者層は極めて流動的で3年に一度の割合で移動するというデータもある程だという。(註) 大場正明「サバービアの憂鬱」による)

これは、アメリカの郊外が極めて細かい所得階層で階層化が図られていることと、アメリカ人の国民性的な移動願望が背景として考えられる。

このことが居住者が伝統的な履のつながりよりも、今日の前にあるつながりを重要視し、コミュニティ精神の発展につながっていくと考えられる。

規模

図表1-10は、日本の郊外の航空写真である。上図の中央、下図の左はアメリカ軍の駐留居住地で、それぞれその右側が日本の郊外の住宅地である。このスケールの違う2枚の写真をコラージュしたような図からも分かるように、アメリカと日本では、同じ郊外でもその規模は圧倒的に違う。

ノスタルジー願望

アメリカ人の住居に対する願望としてノスタルジー(懐古趣味)の存在が指摘される。レヴィットタウンの3つの住宅様式、ケープコッド(切妻小屋風)、ランチャー(牧場風)、コロニアル(植民地時代風)という様式にもその傾向は見えて取れるし、後述する現在の住宅地計画の中でもこの願望は根強く見られる。

1-4 ニュータウンの現在(住宅地計画の動向)

サステイナブルコミュニティ

最近の住宅地計画を語る上で、重要なキーワードとして浮かび上がってくるのは、「持続可能性(Sustainability)」という言葉である。地球環境や資源の有限性を考え、いかに生活を無理せず持続させていけるか、という考えである。これは建築以外のジャンルでも広く使われている言葉であるが、建築のジャンルでもCO2削減、省エネルギーといった技術的側面のみならず、物理的、社会的環境を含めた環境の持続的な持続を目指すサステイナブル・コミュニティへの関心が高まっている(註)。特にアメリカの場合、自動車交通に依存した大規模で無限にスプロールしていく郊外都市(エッジシティ(図表1-11))に対するアンチテーゼとして、コンパクトで、アイデンティティの持てる居住環境としてサステイナブル・コミュニティへの興味が高まっている。

アワニー原則

アワニー原則はサステイナブル・コミュニティを目指した街づくりにおいて遵守すべき諸原則を、コミュニティ、地域、適用のための原則、の3つに分けて記したもので、1991年秋にカリフォルニア州ロサンゼルス市立公園のアワニーホテルで発表された。

この原則は大まかに、

- ・自動車への依存の低減
- ・生態系への配慮
- ・居住者が居住環境へのアイデンティティを持つこと

の3点を骨子としている。

アワニー原則

■1 序言 (Preamble)

現在の都市および郊外の開発パターンは、人びとの生活の質に対して重大な障害をもたらしている。

従来の開発パターンは、以下のような現象をもたらしている。

- ・自動車への過度の依存によってもたらされる交通混雑と大気汚染
- ・誰もが利用できるような貴重なオープンスペースの喪失
- ・延びきった道路網に対する多額の補修費の投入
- ・経済資源の不公平な配分
- ・コミュニティに対する一体感の喪失

過去および現在の事例に依拠することによって、そのコミュニティのなかで生活し、働く人びとのニーズに、よりの確に対応するようなコミュニティをつくりだすことが可能である。そのようなコミュニティをつくりだすためには、計画書策定の段階で以下のような原則を遵守することが必要である。

■2 コミュニティの原則 (Community Principles)

- ①すべてのコミュニティは、住宅、商店、勤務先、学校、公園、公共施設など、住民の生活に不可欠なさまざまな施設・活動拠点をあわせ持つような、多機能で、統一感のあるものとして設計されなければならない。
- ②できるだけ多くの施設が、相互に気軽に歩いて行ける範囲内に位置するように設計されなければならない。
- ③できるだけ多くの施設や活動拠点が、公共交通機関の駅・停留所に簡単に歩いて行ける距離内に整備されるべきである。
- ④さまざまな経済レベルの人びとや、さまざまな年齢の人びとが、同じ一つのコミュニティ内に住むことができるように、コミュニティ内ではさまざまなタイプの住宅が供給されるべきである。
- ⑤コミュニティ内に住んでいる人びとが喜んで働けるような仕事の場が、コミュニティ内で産み出されるべきである。
- ⑥新たに作りだされるコミュニティの場所や性格は、そのコミュニティを包含する、より大きな交通ネットワークと調和のとれたものでなければならない。
- ⑦コミュニティは、商業活動、市民サービス、文化活動、レクリエーション活動などが集約的になされる中心地を保持しなければならない。
- ⑧コミュニティは、広場、緑地帯、公園など用途の特定化された、誰もが利用できる、かなりの面積のオープンスペースを保持しなければならない。場所とデザインに工夫を凝らすことによって、オープンスペースの利用は促進される。
- ⑨パブリックなスペースは、日中いつでも人びとが興味を持って行きたがるような場所となるように設計されるべきである。
- ⑩それぞれのコミュニティや、いくつかのコミュニティがまとまったより大きな地域は、商業のグリーンベルト、野生生物の生息境界などによって明確な境界を保持しなければならない。またこの境界は、開発行為の対象とならないようにしなければならない。
- ⑪通り、歩行者用通路、自転車用道路などのコミュニティ内のさまざまな道路は、全体として、相互に緊密なネットワークを保持し、かつ、興味をそられるようなルートを提供するような道路システムを形成するものでなければならない。それらの道は、建物、木々、街灯など周囲の環境に工夫を凝らし、また、自動車利用を減退させるような小さく細いものであることによって、徒歩や、自転車の利用が促進されるようなものでなければならない。
- ⑫コミュニティの建設前から敷地に存在していた、天然の地形、排水、植生などは、コミュニティ内の公園やグリーンベルトのなかをはじめとして、可能なかぎり元の状態のままの形でコミュニティ内に保存されるべきである。

起草した建築家は以下の6名

Peter Calthorpe
Michel Corbett
Andres Duany
Elizabeth Plater-Zyberk
Stefanos Polyzoides
Elizabeth Moule

⑬すべてのコミュニティは、資源を節約し、廃棄物が最小になるように設計されるべきである。

⑭自然の排水の利用、干ばつに強い地盤の造形、水のリサイクリングの実施などをとおして、すべてのコミュニティは水の効果的な利用を追求しなければならない。

⑮エネルギー節約型のコミュニティをつくりだすために、通りの方向性、建物の配置、日陰の活用などに充分な工夫を凝らすべきである。

■3 コミュニティを包含するリージョン (地域) の原則 (Regional Principles)

①地域の土地利用計画は、従来の、自動車専用的高速道路との整合性が第一に考えられてきたが、これからは、公共交通路線を中心とする大規模な交通輸送ネットワークとの整合性がまず第一に考えられなければならない。

②地域は、自然条件によって決定されるグリーンベルトや野生生物の生息境界などの形で、他の地域との境界線を保持し、かつ、この境界線を常に維持していかなければならない。

③市庁舎やスタジアム、博物館などのような、地域の中心的な施設は、都市の中心部に位置していなければならない。

④その地域の歴史、文化、気候に対応し、その地域の独自性が表現され、またそれが強化されるような建設の方法および資料を採用するべきである。

■4 実現のための戦略 (Implementation Strategy)

①全体計画は、前述の諸原則に従い、状況の変化に対応して常に柔軟に改訂されるものであるべきである。

②特定の開発業者が主導権を握ったり、地域のそれぞれの部分部分が地域全体との整合性もないままに乱開発されることを防ぐために、地元の地方公共団体は、開発の全体計画が策定される際の適正な計画策定プロセスの保持に責任を負うべきである。全体計画では、新規の開発、人口の流入、土地再開発などが許可される場所が明確に示されなければならない。

③開発事業が実施される前に、上記諸原則に基づいた詳細な計画が策定されていなければならない。詳細な計画を策定することによって、事業が順調に進捗していくことが可能となる。

④計画の策定プロセスには誰でも参加できるようにするとともに、計画策定への参加者に対しては、プロジェクトに対するさまざまな提案が視覚的に理解できるような資料が提供されるべきである。

アワニー宣言

エドワード・レルフが「景観の20世紀」の中で定義しているポストモダン以降の景観の特徴もアワニー原則に近似した部分が認められる。レルフによると、モダニズムの景観が、

- (1) メガ構造物の巨大さ
 - (2) 直線空間とプレーリー空間
 - (3) 合理的秩序と融通性の欠如
 - (4) 経路性と不透明性
 - (5) 不連続な連続風景
- (モダニズムの市街地景観の質 (P.268))
であるのに対し、ポストモダニズムの景観を、
- (1) 「古趣味空間」
 - (2) きめ細かなファサード
 - (3) かつこよさ
 - (4) 地域の環境との再結合
 - (5) 歩行者と自動車の分離
- (ポストモダンの町並みの特質 (P.279))
と定義している。

住宅地計画の動向

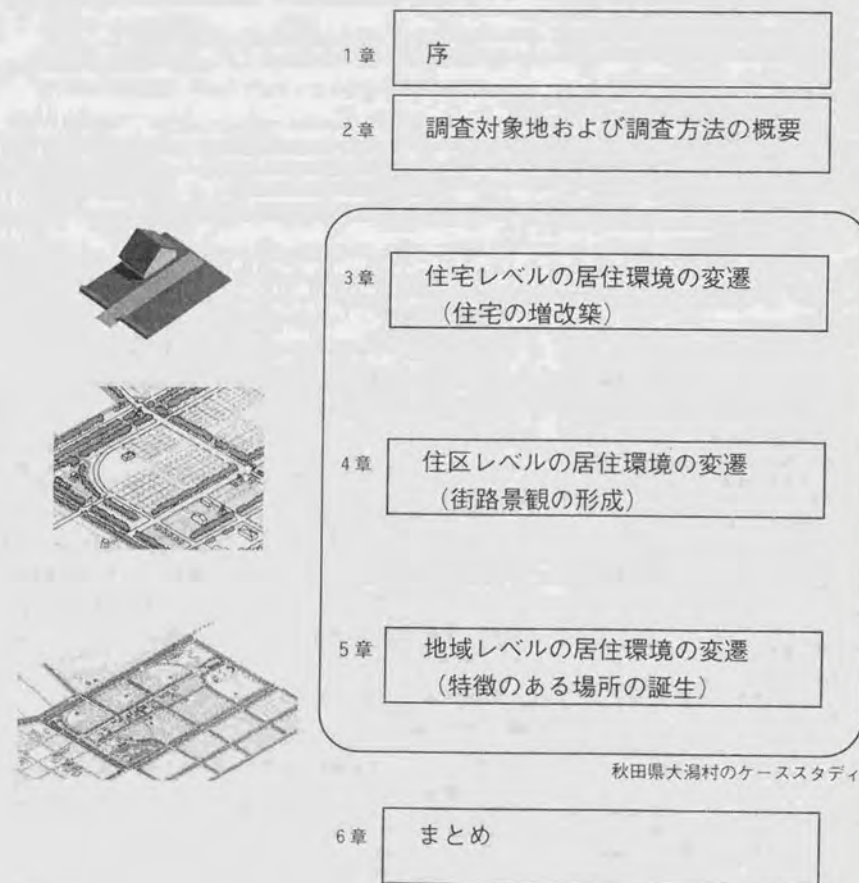
以上のサステイナブル・コミュニティという問題意識を受けて、近年のアメリカの住宅地計画で注目されているのは、「帰属意識」を持たせるデザインである。具体的には、歴史・伝統の感じられるものを他から引用するなどして建設の当初から十分に環境をつくりこんでおき、詳細なデザインコードを設け、統一感のある町並みを開発初期から持続させる制度を明文化などしている。

セレブレーション (註) はアメリカのフロリダ州に建造されている住宅地であるが、各住区毎にある特定の時代が設定しており、その時代の様式に基づいた住宅建設が要求されている。また、ダウントウン (中心部の商業・業務空間) は、最初に居住することになった人々にも、町が熟成してから住むようになった人々に提供されるのと同じアメニティを供給することを意図してつくられ、入居が始まる以前から、すでに醸成された、賑わいを持った環境につくりこまれている。この住宅はウォルト・ディズニー社が開発を進めていることもあり、ほとんどテーマパークの建造に近い住宅計画手法となっている。

〔註〕セレブレーションに関しては、戸谷英世「アメリカの住宅地開発」に詳しく述べられている。

1-5 本論の構成

本論は秋田県大湯村を対象とし、計画された居住環境に関して、住戸（3章）、住区（4章）、地域（5章）の3つのスケールから考察をすすめるものであり、図表1-13のような構成になっている。



図表1-13 本論の構成

2章：調査対象地および調査方法の概要

2-1 調査対象地の概要	15
歴史的背景（大湯村開発の経緯）	15
地理的概要	15
営農方法、集荷方法	16
人口、世代構成の変化	17
当時の住宅地計画論	17
集落計画の変遷とその背景	19
大湯村開発を巡る前後の調査研究	22
大湯村の特徴（調査地選定の理由）	23
2-2 調査の概要	26
(1) アンケート調査	26
(2) 実測・インタビュー調査	27
(3) 街路の実踏調査	27
(4) 計画初期、経年的な変化に関する調査	27
2-3 アンケートの回答者像	28

2章：調査対象地および調査方法の概要

2-1 調査対象地の概要

歴史的背景（大潟村開発の経緯）

秋田県大潟村は東経140° 北緯40° に位置し、琵琶湖に次ぐ日本第2位の湖であった八郎潟の干拓・新農村事業（1954～1977）によって誕生した。

八郎潟は水深が1～5mと浅いため干拓向きで、干拓は江戸時代後期から何度も検討されてきたが、その規模の大きさ故なかなか実現には至らずにいた。しかし、戦後の食糧難による食物増産計画を背景に、1954年に農林省八郎潟干拓調査事業所の設置され、1956年にNEDECO（オランダ対外技術援助機関）の協力により農林省の干拓事業計画が完成し、1957年に八郎潟干拓事務所が設置され、いよいよ干拓事業が開始される。

そして、山手線の内側の約3倍にあたる約17,000haの湖底は1964年に、干陸し、大潟村が誕生した。

入植は1967年に始まり1968年に耕作を開始し、以降第5次まで7年間で、589戸の農家が入植した。当時、入植にあたっては、希望者が殺到し、労働力・資金力などの審査と農業に関する筆記試験により選抜された。入植者の出身地は北海道から沖縄まで全国に及んでいる。

地理的概要

大潟村の居住地は総合中心地といわれ、村の西側に位置している。ここに総合中心地が建造されたのは、干拓した湖底内では一番高度が高



図表 2-1 秋田県大潟村の位置



図表 2-2 大潟村の大きさ（山手線と比較）



図表 2-3 大潟村の位置と周辺



図表 2-4 八郎潟の干拓前と干拓後（『新農村の歩み』より）

かったこと、秋田市に遠い湖西地域の振興を図るため、の2点を根拠としている。

総合中心地の特徴は、機能による明解なゾーニングである。総合中心地の中央にはセンターベルトが設置され、公共施設が配されており、そのベルトを挟むように居住区が配されている。居住区は400m×500mの5つ住区からなっており、それぞれの住区には約150世帯の住戸が40～50戸毎の小ブロックに分割されて建造されている。

農業に関する施設は、住居とは全く分離する計画が行われており、総合中心地の東側にまとめて格納庫が集められた地域と、家庭菜園用の敷地がある（図表2-5）。



図表2-5 総合中心地

営農方法、集荷方法

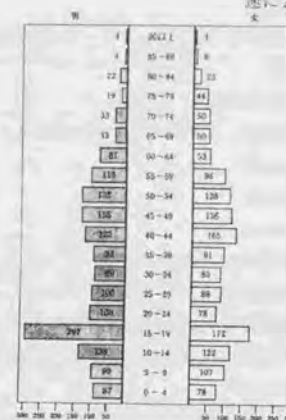
大湯村の各農家はそれぞれ15haの農地で米作を中心とした農業を行っている。入植当時は育苗を省いた直播き農法を試みていたが定着せず、現在は従来通りの米作農法を行っている。また、初期は営農グループを組織し、大型農耕機を共同で所有していたが、現在は個人経営となっている。また、収穫した米は一括してカントリーエレベーター（図表2-6）に納めていたが、現在は米の流通が自由化されたこともあり、格納庫で精米から出荷まで一括して行う農家など、様々な流通形態が混在している。



図表2-6 カントリーエレベーター

人口、世代構成の変化

大湯村の人口、世代構成、就業者内訳は図表2-7、2-8、2-9の様になっている。就業者のほとんどが農業で、世代の偏りが小さいこと、近年急速に2世代化が進んでいることが傾向として指摘できる。



図表2-8 世代構成（大湯村村勢要覧より）

年度	世帯数	人口	1世帯当たりの人口
1970	380	1,640	4.32
1975	686	3,237	4.72
1980	706	3,334	4.72
1985	704	3,254	4.62
1990	711	3,268	4.60
1995	762	3,311	4.35
1999	1,005	3,411	3.40

図表2-7 大湯村の人口変化
（大湯村村勢要覧より）

	就業者数	比率
農業	1533	84.7%
建設業	10	0.55%
製造業	9	0.50%
卸・小売業	52	2.87%
通信・運輸	2	0.11%
電気・ガス	1	0.06%
サービス	151	8.34%
公務	52	2.87%

図表2-6 就業者内訳（大湯村村勢要覧より）

当時の住宅地計画論

大湯の集落計画が計画された当時は、千里ニュータウンを初め大規模な住宅地計画が目白押しの時代であった。片寄によると当時の住宅地計画に対する技術的な蓄積は以下のようなものがあったという。

千里までの技術蓄積

第二次世界大戦までの国内での実践と蓄積

- ・炭坑住宅など、僻地に急速に拡大した鉱工業生産従業者のための「収容施設」の大量建設。その他兵舎、寄宿舎等の建設
- ・大都市における量的住宅難に対処するための公的施策の実施。公益住宅、住宅組合住宅、同調会住宅、住宅営団住宅等の建設。
- ・「都市計画」（飯沼一省（1934））による「住居地域」の設定。「高燥風致、静温快適、山手周辺部たるべきこと」の定義による郊外開発の奨励。
- ・計画的都市域拡大の手法としての「土地区画整理事業」の実施。（1933年内務省が実施）
- ・資本による「新たな投資対象」としての郊外住宅地区開発事業の実施。1909年箕面有馬電軌による郊外住宅地経営など。
- ・植民地都市建設。とくに「満州国」における南満州鉄道沿線開発を目的とした新都市群開発計画。

戦後に伝わった海外の住宅地計画理論

- ・ハワードの「明日の田園都市」の提案に始まり、ウェルウィング・デンシティ、などのニュータウン建設を踏まえ、ニュータウン群計画へと展開したイギリスの蓄積。
- ・それを受け継ぎ1930年代に世界各地で一斉開花した一連の動き、
- ・アメリカのグリーンベルトタウンズ（1930年代）とそれを理論的に支えたC.A.ペリーの「近隣住区論」（1929）
- ・ソビエトの工業都市建設（1930年代）
- ・ナチス・ドイツの新都市計画、特にG.フィーダーの「二万人の新都市」（1933）

これらの新都市建造の動きは軍事、国防上の機密と関わる点も多く、国際的な情報交流が行われるのは第二次世界大戦後になってからであった。

戦後住宅政策

- ・第二次世界大戦後の復興住宅の大量供給
- ・「戦災復興土地整理事業」による土地整理手法と基準の全国規模の波及
- ・「土地整理」とセットにした「一団地住宅経営」手法の普及の試み。「コミュニティへの道」-都市計画一団地住宅経営（建設省大臣官房広報課（1949））では小学校を中心とする人口約8千～1万人を収容する区域単位に「近隣住区」の名を冠するなど千里ニュータウン計画における近隣住区単位の考え方の原形が見られる。

住宅公団における住宅団地大量建設における技術的蓄積

1955年以降の日本住宅公団による大規模集団住宅地建設事業は「最低限度の文化的生活の保障」という命題を「大規模建設の効率の推進」という絶対的課題の中で実現していくための組織的技術的蓄積を進めた点に特徴があり、量的住宅難の中で「居住者」側の発言は決して強化されておらず、「企業者」の絶対的優位の体制の中で理論的展開が進められた結果、これらの住宅地計画論の方向は以下の様に整理できるものとなっている。

- ・「居住者」の「不満が爆発しない限度」の追求が精緻に進められ、そのなかで「必要最小限施設」の設定が実際に試みられた。
- ・「必要最小限施設」と生活圏の段階構成論との結合により、何段階かの「建設単位」の設定が実際に試みられた。
- ・上の「建設単位」について、企画、計画、設計、施工、管理の業務ラインとの関係における効率性の追求が行われた。
- ・各「建設単位」についての細部設計が行われ、標準化、規格化が進められて、量産体制が整備された。また居住者側の多様な要求に対して一応の対応が可能なように、多様な対応手法が用意された。

すなわち、日本住宅公団による住宅団地の大量建設の過程における計画論の展開は、基本的には戦前段階の蓄積の延長線上から一歩も外れることなく、それをより精緻に発展させるとともに、量産体制との結合にをはかることに大きな焦点が置かれて展開したということができよう。

片寄氏は大府市の職員として千里ニュータウンの建設に関わった人物である。日本住宅公団の方法を「居住者」の「不満が爆発しない限度」の追求」と表現するなど、終戦直後以降の量の充足を目的とした計画への批判的な態度が見える。

片寄俊秀「千里ニュータウンの研究
計画的都市建設の軌跡・その技術と思想」p.152

住宅に対する量的な不足は依然として根深くある一方で、戦災復興的な住宅供給は終わり、経済が向上し、欧米の住宅地計画の先進事例も伝わり始め、すくなくともある計画はできないが、生活の質の向上や将来性を考えた住宅地計画への模索が始まった時期だったことが分かる。

集落計画の変遷とその背景

干拓事業が始まってからも、大潟村の集落地計画は農林省が推奨した列状集落地計画に始まり、最終案の一集落案に落ち着くまで、多くの紆余曲折があった（次ページ）。これらの紆余曲折の背景にあるのが、農業を取り巻く状況の変化であり、1戸あたりの耕作面積設定の変更とそれに伴う入植戸数の変化である。干拓事業が進行していく過程で、干拓計画は以下のような変遷を辿っている。

□1954年：農林省干拓調査事業所設置

干拓計画のきっかけとなったのは、戦後の食糧難対策。計画の最初期は1戸当たりの水田面積は2.5haで、これは当時の上層の農家に合わせたものであり、4700戸入植する計画だった。

□1956年：農林省事業計画完成

NEDECO（オランダ対外技術援助機関）の協力により農林省の干拓事業計画完成。

□1957年：八郎潟干拓事務所設置、事業開始

昭和30年代になると、もはや戦後ではないと言われ、食糧問題も解決し、トラクターの可能性が出てくるなど、農業にも機械化の流れが出てきた。営農改定の研究が始まり、以後、大潟村は、食糧難対策から、構造改善のモデルとして捉えられるようになる。

高度成長期になると池田首相に倣い、農業でも所得倍増と言われ、2.5haから5ha案が浮上してきた。以降、倍々ゲーム的に5haから10haという案も出されるようになる。しかし、当時の秋田県知事の小林氏は、10haはあまりに従来のとかけ離れるとして5haを唱えていた。そこで間を取って7.5haという選択肢を加え、5haか7.5haか10haの3つの選択肢から入植希望者が選ぶことになった。そして、総合中心地と8つの集落を設定した。以降、人口、集落数、施設数等の規模計画を巡って様々な議論がされることとなる。

□1967年：第1次入植者が入植

第1次入植者が入植。入植者のほとんどは10haの農地を希望し、これが一般的となる。以降毎年入植が行われ、第4次入植まで完了する。

集落計画の推移

1957年「農林原案」

集落形態…道路沿い列状集落

(総合中心地・5中心地・5副中心地列状部属)

入植農家戸数…4,700戸

配分農地…2.5ha

農業形態…個別営農・徒歩通作・水稲移植

干拓事業着工前の事業計画として策定されたが、その後全面的に再検討される。道路に沿って住宅を配置し、住宅から徒歩圏内に農地を持つ。



農林原案(列状集落)

1960年「1960年度案」

集落形態…8集落案

(総合中心地・2中心地・6集落)

入植農家戸数…2,400～4,700戸

配分農地…2.5～5.0ha

農業形態…協業経営・自動車通作

中央干拓地を8個の耕地集団にわけ、その各々に単位集落を設定する。その内の3個を地区中心集落とし、小中学校、診療所等を設ける。うち一つの地区中心集落は総合中心地として全集落を支配する。

総合中心地が西偏しているのは、干拓地なので地盤を考慮したためである。



1960年8集落案

1961年「1961年度案」

集落形態…8集落案

入植農家戸数…2,400戸

配分農地…5.0ha

農業形態…協業経営・自動車通作

1960年案を踏襲しながら、若干の修正を加えた。総合中心地は行財政・商工業の中心として非農家とサービス機能が主体となり、地区中心集落以下は、農業施設・農家住宅を主に構成される。

1962年「1962年度第1次案」

集落形態…8集落案

入植農家戸数…2,400戸

配分農地…5.0ha

農業形態…協業経営・自動車通作

1961年度案の発展形であるが、大差ないものである。



1962年度中心集落案

1962年「1962年度第2次案」

集落形態…総合中心地集中案

入植農家戸数…800～1,200戸

配分農地…10ha

農業形態…協業経営・自動車通作

農業経営規模の計画変更により、農家戸数が大幅に減少した。このため、全人口を総合中心地に集中させた方がよいとする案が提唱された。しかし、通勤型農業への不安等から検討を余儀なくされた。

計画は、住居を全て総合中心地に集中させるが、営業上の未確定要素に対する配慮から、農家住宅が集落へ分散する可能性を残す。とするものである。



4集落案

1965年「1965年度案」

集落形態…4集落案

(総合中心地・3集落)

入植農家戸数…1,300戸

配分農地…平均7.5ha

農業形態…協業経営・自動車通作

1集落案を極端なものとし、4集落による構成が提唱された。これは、営業計画が10ha程度的大型機械化体系を前提とするものに移ってきた事による影響も大きい。

地盤の良い地域に、営業上の便宜より生活の利便を考慮して高いレベルの生活施設を予定する方がよいのでは、との考えからである。

この年から総合中心地のセンターベルト計画が始まる。



1966年度センターベルト計画案

1968年「1968年度案」

集落形態…総合中心地1集落案

地盤・財政・生活・その他の理由から、総合中心地1集落からなる計画が、本格的に浮上してくる。

1973年「1973年度案」

集落形態…1集落案

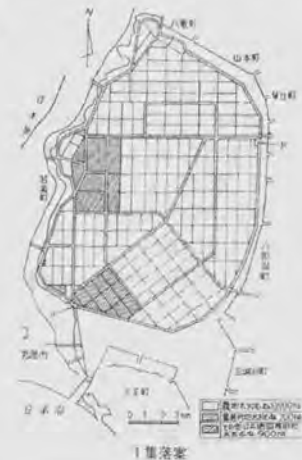
入植農家戸数…580戸

配分農地…平均15ha

農業形態…大型機械の共同利用による田畑複合経営

自動車通作

1968年度の計画は実行されてはいたものの、本採用ではなかった。しかし、1973年に改めて1集落案が本採用となった。



1集落案

□1968年：第2次入植者が入植

□1969年：第3次入植者が入植

□1970年：第4次入植者が入植。政府の減反政策が始まる。

昭和45年に政府の減反政策が始まる。入植は第4次入植で一旦打ち切れ、9000hの農地（註）のうち半分の4500hの配分が終わったところで、入植計画が暗礁に乗り上げる。

□1971年～1973年：入植中断、入植計画の見直し

未分配の4500hの農地に関しては、牧場化、飛行場化など様々な可能性が検討されたが、あと120戸の入植をすすめ、更に各耕地を5hずつ増反し、15hにするということになる。各農家は7.5hで米作を行い、残りの7.5hで畑作（但し、減反奨励金が出ない）を行うこととなった。

□1974年：第5次入植者が入植、入植計画完了

最終となる第5次入植が行われる。

このように、1戸あたりの耕作面積設定が変更され、それに伴う入植住戸数の変化により、規模算定の観点から集落数は8つから1つへと減少していき、集落以下の計画案も規模の変更に戻り回されることになった。

片寄氏は「実験都市」のなかで、千里ニュータウンの開発に関して「何を、何のために」という議論が十分になされないまま、プロジェクトに突入して行ったことを、後々の首尾一貫した計画が進められなかった一因としている。大湯村の開発においても似たような状況が垣間見える。

大湯村開発を巡る前後の調査研究

大湯村の建造に関しては、事業の開始時から委託研究として、様々な角度から検討が研究がなされている。主な研究内容は

- ・ 周辺集落の調査
- ・ 適正な規模、機能の算定研究
- ・ 建造後の使われ方調査

の3点で、開始決定後の1960年から事業完了の1974年まで研究と提案が行われている。24ページの表は計画の進行と研究内容を年表化したものである。計画を支える様々な研究が進められているのが分かる。

また、以降の研究としては、1993年の福井大学の玉置伸吾らによる住宅の平面計画の変容に関する研究がある。

（註）八郎岡はもともと22,000haの広さがあるが、残存湖が5000ha、干拓で陸地になるのが、17,000haで、そのうち農地が11,000haであった。干拓に際しては半農半漁だった周辺農民の反対もあったので、2000hは周辺に提供されることになり、9000hが入植者に割り当てられることになった。

（註）千里ニュータウンの場合は、中心部に未買収地が残るなど土壌買収の段階で相当な計画変更を余儀無くされている。

大湯村の特徴（調査地選定の理由）

調査対象地として大湯村を選定した理由は以下の通りである。

●既存のコンテキストが全くないこと

元は湖底であったこともあり、計画前の地形的、歴史的な文脈が全くない。地形や地権（註）による制約がなく、理論的な決定原理に基づいた形態が明解に実現している。

●すべてが計画された場所であること

地形などの要因がなく、決定原理を合理的な数字や機能に求めるしかなかったため、全ての線に根拠がある場所である。また、パイロット的な意味合いが強いプロジェクトだったため、計画のプロセスが報告書の形で残されており、計画の原理を辿ることができる。

●初期住宅地が同じ

入植時の初期住戸は全てほぼ同じ平面計画で、比較検討しやすい。

●唯一の田園都市、自立型都市

先述した通り、日本のニュータウンは都心に職場を勤労者に住居を提供するものであり、イギリスのニュータウンのように自立的なものではない。しかし、大湯村の場合は、居住者は村内で農業に従事する計画になっており、職住が一体で計画された日本で唯一の住宅地と言える。

総合中心地は干拓で出来た農地の中に存在しており、近郊のどの集落とも隣接しておらず、総合中心地の内外の境界が明確である。

●歴史の変遷が読み易い

計画された単位がそのまま一つの行政単位（大湯村）であり、開村以来の歴史を村報で辿ることが可能であるなど、歴史の変遷が読みやすい。

●サステナブルコミュニティとの比較検討が可能

大湯村の計画は、機能的合理性の追求の結果で作られた部分が多いが、規模を含め、アワニー原則のサステナブルコミュニティの規範と合致する部分が多々としてある。

（註）安實真映、玉置伸吾、柴田和彦、長谷川洋「八郎岡干拓地における計画住宅平面の変容過程」1993年7月日本建築学会北陸支部研究報告集（pp.351-354）

	1960年前	1960年	1961年	1962年1次	1962年2次	1963年	1964年	1965年	1966年	1967年	1968年	1969-70年	1971年	1972年	1973年
■地域計画	大渇村計画(1957年)	大渇村計画(1960年)	大渇村計画(1961年)	大渇村計画(1962年1次)	大渇村計画(1962年2次)	大渇村計画(1963年)	大渇村計画(1964年)	大渇村計画(1965年)	大渇村計画(1966年)	大渇村計画(1967年)	大渇村計画(1968年)	大渇村計画(1969-70年)	大渇村計画(1971年)	大渇村計画(1972年)	大渇村計画(1973年)
■地区計画	大渇村地区計画(1957年)	大渇村地区計画(1960年)	大渇村地区計画(1961年)	大渇村地区計画(1962年1次)	大渇村地区計画(1962年2次)	大渇村地区計画(1963年)	大渇村地区計画(1964年)	大渇村地区計画(1965年)	大渇村地区計画(1966年)	大渇村地区計画(1967年)	大渇村地区計画(1968年)	大渇村地区計画(1969-70年)	大渇村地区計画(1971年)	大渇村地区計画(1972年)	大渇村地区計画(1973年)
■土地利用計画	大渇村土地利用計画(1957年)	大渇村土地利用計画(1960年)	大渇村土地利用計画(1961年)	大渇村土地利用計画(1962年1次)	大渇村土地利用計画(1962年2次)	大渇村土地利用計画(1963年)	大渇村土地利用計画(1964年)	大渇村土地利用計画(1965年)	大渇村土地利用計画(1966年)	大渇村土地利用計画(1967年)	大渇村土地利用計画(1968年)	大渇村土地利用計画(1969-70年)	大渇村土地利用計画(1971年)	大渇村土地利用計画(1972年)	大渇村土地利用計画(1973年)
■研究事項	大渇村研究事項(1957年)	大渇村研究事項(1960年)	大渇村研究事項(1961年)	大渇村研究事項(1962年1次)	大渇村研究事項(1962年2次)	大渇村研究事項(1963年)	大渇村研究事項(1964年)	大渇村研究事項(1965年)	大渇村研究事項(1966年)	大渇村研究事項(1967年)	大渇村研究事項(1968年)	大渇村研究事項(1969-70年)	大渇村研究事項(1971年)	大渇村研究事項(1972年)	大渇村研究事項(1973年)
■研究報告	大渇村研究報告(1957年)	大渇村研究報告(1960年)	大渇村研究報告(1961年)	大渇村研究報告(1962年1次)	大渇村研究報告(1962年2次)	大渇村研究報告(1963年)	大渇村研究報告(1964年)	大渇村研究報告(1965年)	大渇村研究報告(1966年)	大渇村研究報告(1967年)	大渇村研究報告(1968年)	大渇村研究報告(1969-70年)	大渇村研究報告(1971年)	大渇村研究報告(1972年)	大渇村研究報告(1973年)
■その他	大渇村その他(1957年)	大渇村その他(1960年)	大渇村その他(1961年)	大渇村その他(1962年1次)	大渇村その他(1962年2次)	大渇村その他(1963年)	大渇村その他(1964年)	大渇村その他(1965年)	大渇村その他(1966年)	大渇村その他(1967年)	大渇村その他(1968年)	大渇村その他(1969-70年)	大渇村その他(1971年)	大渇村その他(1972年)	大渇村その他(1973年)

大渇村計画の変遷と委託研究(「集落建設の調査資料」を基に作成)

2-2 調査の概要

本研究で行った調査は以下の通りである。

(1) アンケート調査

アンケート調査は大湯村の全戸（796通）を対象とし、1998年10月22・23日に配布し、同年10月30日までに郵送にて回収した。有効回答数は181通（回収率24%）。

アンケートの用紙は、(a) 記号か数字で回答するタイプ（各世帯1枚）と、(b) 地図に自由に記入するタイプ（各世帯1枚）があり、それぞれ以下の項目について質問した。

(a) 記号・数字で回答するタイプ（図表2-10）

基本属性：家族構成、年齢など

生活：村内の出来事の認識、行事への参加、サークル活動、農作業の時間など

住居の増改築：初期住宅の残存、増改築の時期と箇所、考慮したこと、参考にしたこと

(b) 地図に自由に記入するタイプ（図表2-11）

大湯村の総合中心地の俯瞰地図に、徒歩での行動圏と、地域の使い方に関して記号とコメントを自由に記入。



図表2-11 アンケート回答例（地図に自由に記入するタイプ）

図表2-10 アンケート回答例
（数字・記号で回答するタイプ）

図表2-13 実路調査調査シート



図表2-14 航空写真
（上：1971年 下：1994）

(2) 実測・インタビュー調査

アンケートの回答者の協力を得て、1998年11月14～18日に、15軒の住居の実測調査を行った。対象は図表2-12の通り。

インタビューでは、住居内に案内していただきながら、増改築や大湯村での生活についてフリーディスカッションの形式でインタビューを行った。

(3) 街路の実路調査

大湯村の居住区内の街路全69本に関して実路調査を行った（図表2-13）。

(4) 計画初期、経年的な変化に関する調査

以下の資料を用いて、大湯村の計画初期から現在までの経年的な変化に関して調査。

航空写真による住居模様の変遷調査

国土地理院が定期的に撮影している航空写真を用い、入植以来の住戸のボリュームの変遷を調査（図表2-14）。

村報

開村時から現在までの村報（月刊）による村内の出来事を調査（図表2-15）。

研究報告集

1960年から1972年までの日本建築学会、日本都市計画学会などに委託された研究の報告書、事業報告書より計画初期に検討された事項や計画の根拠を調査。

実測	インタビュー	世帯	性別	職業	出生地	入植年次	住居の種類
KWT	01	74歳	男	農業（人形）	愛媛	1次	農家住宅（旧）
TKH	02	23歳	女	主婦	岡山	2次	農家住宅（旧）
—	03	28歳	女	学生	岡山	—	農家住宅（旧）
SKM	04	27歳	男	農業（人形）	愛媛	1次	農家住宅（旧）
KMT	05	21歳	男	農業（人形）	岡山	1次	農家住宅（旧）
SAM	06	67歳	男	農業（人形）	岡山	1次	農家住宅（旧）
YML	07	29歳	男	農業（人形）	岡山	1次	農家住宅（旧）
TZW	08	23歳	女	主婦	岡山	1次	農家住宅（旧）
—	09	44歳	男	農業（人形）	岡山	1次	農家住宅（旧）
UKT	10	23歳	男	農業（人形）	岡山	1次	農家住宅（旧）
TCD	11	23歳	男	農業（人形）	岡山	1次	農家住宅（旧）
MSM	12	27歳	男	農業（人形）	岡山	1次	農家住宅（旧）
TBR	13	23歳	男	農業（人形）	岡山	1次	農家住宅（旧）
—	14	23歳	男	農業（人形）	岡山	1次	農家住宅（旧）
—	15	27歳	男	農業（人形）	岡山	1次	農家住宅（旧）

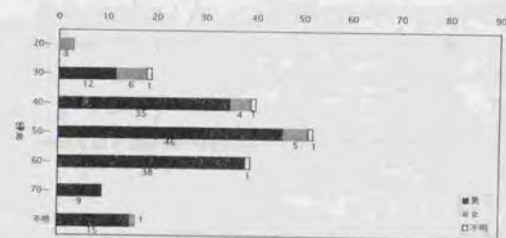
図表2-12 インタビュー実測調査協力者



図表 2-15 村報

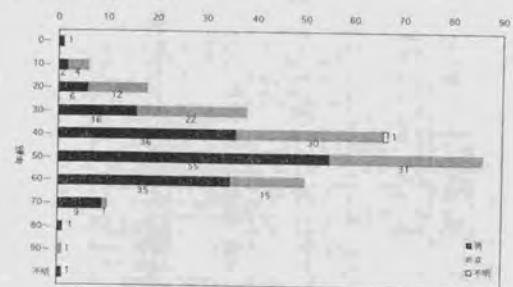
2-3 アンケートの回答者像

アンケートの回答者像は図表 2-16 の通りである。回答者を世帯主とした人が多かったため、回答者層にやや偏りが見られる。



図表 2-16 アンケート回答者の年齢分布

地図記入形式のアンケートの回答者像は図表 2-17 の通りである。各世帯に 3 枚ずつ配ったため、記入アンケートに比べて回答者像にバリエーションが見られる。



図表 2-17 地図記入アンケート回答者の年齢分布

3 章：住宅レベルの居住環境の変遷（住宅の増改築）

3-1 住宅の初期計画 29

3-2 調査方法 34

3-3 アンケート統計からみた住居改変の概要 34

初期住宅の残存と増改築の回数 34

増改築の内容 35

増改築時期毎の分析 35

3-4 実測事例からみた住居改変の詳細 40

面積の拡大とその要因 40

用途の変遷 41

縁側による接続 44

増改築の順序 44

3-5 増改築の動機と決定要因 44

増改築の計画性 44

動機と決定要因 45

3-6 まとめ 48

3章：住宅レベルの居住環境の変遷（住宅の増改築）

本章では大潟村の初期住宅の増改築を中心に、住宅レベルでの居住環境の変遷とその要因について考察する。

3-1 住宅の初期計画

大潟村の初期入植住宅は、5回の入植に合わせて計580戸建造された。住宅はAタイプからFタイプまで6タイプあり、それぞれに玄関の方向が3方向（北、東、西）想定されていたので、計18タイプ存在するが、実際に建てられたのは16タイプである。それぞれの特徴と平面図を図表3-1、3-2（次ページ）、建てられた戸数の内訳を図表3-3に示す。

図表3-4は入植時期毎の住宅タイプの分類である。1次入植と2次入植がAからDの4タイプ、3次入植以降はE、Fの2タイプから住宅を選択している。

		面積（増築可能面積）				2階（増築）
		単位：平米	1階	2階	その他	
A	4床型	68.68	LK（1室）	6室×2	納戸	—
B	4床型	71.55	LK（1室）	6室×2	納戸	—
C	2階に増築可能部分	56.79（34.07）	LK（1室）	6室×2	納戸	6室×2
D	2階に増築可能部分	45.61（36.45）	LK（1室）	6室×2	納戸	6室×2
E	2階に増築可能部分	58.32（39.15）	LK（1室）	6室×4.5室	納戸	6室×4.5室
F	2階に増築可能部分	58.32（39.15）	LK（1室）	6室×2	納戸	6室×2

図表 3-1 住居タイプの分類図



初期住宅と増改築による変遷

タイプ	玄関方向	戸数
A	W	9
A	N	2
A	E	1
B	W	3
B	N	3
B	E	0
C	W	47
C	N	57
C	E	6
D	W	9
D	N	6
D	E	0
E	W	99
E	N	109
E	E	18
F	W	131
F	N	63
F	E	17
計		580

図表 3-3 建てられた住居の内訳

年度	型式	入り方	戸数	戸数
42（1次）	A	W	9	10
		N	1	
	B	W	3	6
		N	3	
	C	W	15	26
		N	11	
43（2次）	D	W	9	15
		N	6	
	A	E	1	2
		N	1	
	C	W	32	84
		E	6	
44（3次）	E	W	44	98
		E	6	
	F	N	48	78
		W	44	
	E	E	11	99
		N	23	
45（4次）	F	W	38	42
		E	12	
	E	N	49	29
		W	24	
	F	E	6	91
		N	12	
49（5次）	E	W	17	29
		N	12	
	F	W	63	91
		N	28	
計			580	580

図表 3-4 入植時期毎の住宅タイプ



■ type A-東入り



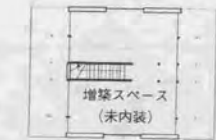
■ type A-北入り



■ type B-北入り



■ type C-東入り



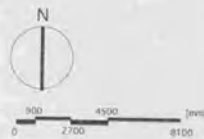
■ type C-北入り



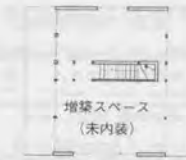
■ type C-西入り



■ type B-西入り



図表 3-2 初期住宅平面図



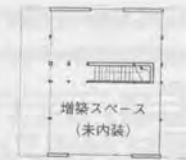
■ type E-東入り



■ type E-北入り



■ type E-西入り



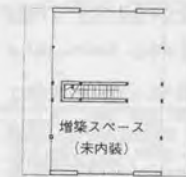
■ type F-東入り



■ type F-北入り



■ type F-西入り



■ type D-北入り



■ type D-西入り

3-2 調査方法

住宅レベルの調査で用いたのは、アンケート調査（図表3-9）と実測調査である。

3-3 アンケート統計からみた住居改変の概要

ここではアンケートの分析を中心に大洞村の住宅の変遷を数量的な側面から概観する。

初期住宅の残存と増改築の回数

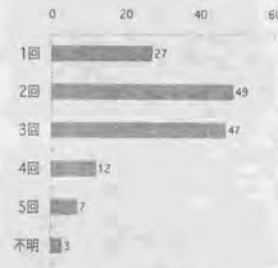
初期住宅の一部は現在でも86%の住戸に現存している（図表3-11）。一見、建替えを行った様に見える住居もそのほとんどが初期住宅の増改築であり、大多数の住宅が30数年前の入植以来、新築等で刷新されることがなく、増改築により、居住環境を徐々に更新してきたことが分かる。

また、初期住宅の1階部分は積み上げられたコンクリートブロックを、上からコンクリート製の臥梁で押さえ、その上に木造で三角屋根の2階部分が造られており、多くの場合、現存しているのはコンクリートブロックの1階部分であると考えられる。

増改築を行った回数を見ると、8割の住戸で複数回の増改築を行っており、半数が3回以上の増改築を行っており（図表3-12）、増改築の平均回数は2.5回である。また、増改築を行った時期の分布を見ると、入植以降偏りなく増改築が行われている（図表3-13）。大洞村の住宅はその時期毎の要請に合わせて手を加えられ、徐々に現在の住居の形になっていったことがわかる。



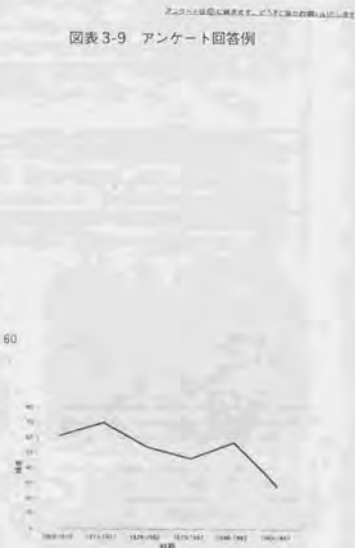
図表3-11 初期住宅の残存率



図表3-12 増改築の回数



図表3-9 アンケート回答例



図表3-13 増改築時期の分布

増改築時に対象になった空間	件数	比率
接客	202	12.6%
玄関	153	9.5%
車庫	150	9.4%
寝室	124	7.7%
トイレ	124	7.7%
子供部屋	116	7.2%
居間	112	7.0%
風呂	103	6.4%
台所	93	5.8%
倉庫	88	5.5%
縁側	79	4.9%
屋根	62	3.9%
外壁	56	3.5%
納戸	46	2.9%
倉庫	45	2.8%
書斎	36	2.2%
作業部屋	14	0.9%
計	1603	100.0%

図表3-14 増改築の内訳

増改築の内容

アンケートで得られた増改築の事例は303件で、それらの増改築で手を加えられた空間（追加、改修両方を含む）は全部で1603箇所にはなる。図表3-14は1603箇所の内訳である。上位には接客空間と車庫があるが、いずれも初期の計画では想定されていなかったものである。また、同じく上位の玄関は、風除室を加えた場合が多かったのと、増改築による規模の拡大により玄関の位置が移動した場合が多かったためであると考えられる。以降では増改築内容を時期毎に分析していく。

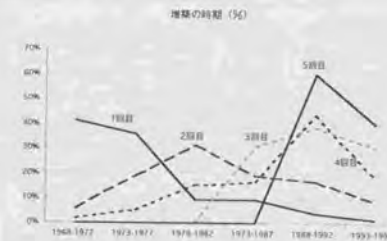
増改築時期毎の分析

図表3-15は1回～5回までの増改築の実施年の5年毎の頻度である。1回から3回まで10年毎にピークを迎えており、定期的に増改築が行われている様子が見て取れる。ここでは、入植から現在までの30年を10年毎に、Ⅰ期（1968～1977）、Ⅱ期（1978～1987）、Ⅲ期（1988～）に分けて増改築の傾向を検討していく。

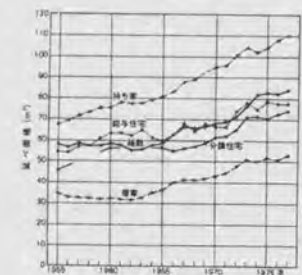
入植初期の増改（Ⅰ期）（初期の増改築ブーム）

先の図表3-15で、1回目の増改築に注目すると、最初の10年で8割の住居が増改築を行っており、初期の増改築ブームが起きていることが分かる。

図表3-16は、当時の着工新設住宅の規模の推移を追ったものである。大洞村で建造された住宅の多数を占めるE、F型の住宅は増改築用に準備してあった2階部分の面積も含めると、97.47㎡であり、当時の一般的な水準であることが分かる。ただし、グラフを見れば分かるように、1960年代の中期からは、住宅の面積は急激に増加している。急激に住宅面積を押し上げている背景には当時の日本の生活水準の向上がある。



図表3-15 増改築の時期（5年毎）

図表3-16 着工新設住宅の規模の推移
（日本建築学会「建築設計資料集」より）

が、こうした住欲求の変化が、初期の大湯村の増改築ブームの一因であると考えられる。

図表3-17は増改築の事例数とその際に対象となった箇所数を5年毎にまとめたものである。1968年～1972年の最初の5年は増改築の事例は59事例で、手を加えられた空間は172箇所と、1事例あたり2.92箇所であり、以降は年を追って増加している。このことから、初期の増改築は小規模にピンポイントに行われ、年を追って増改築の規模が拡大していくのがわかる。

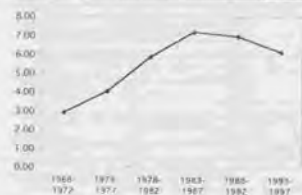
図表3-18は増改築の5年毎の内訳と、その1事例あたりの頻度（＝対象数/増改築事例数）である。特に初期に増改築が集中しているものとして、車庫、倉庫、作業部屋の職関係の空間が挙げられる。図表3-19はこれら3空間の1事例あたりの頻度の5年毎の推移である。初期の増改築の7割以上の事例で車庫の建造が行われているなど、職関係の機能の追加が初期に集中しているのがわかる。車庫はもともとの住宅には計画されていないものであるが、車は大湯村で生活していく上で不可欠であり、冬期を考慮すると、路上に置いておく訳にもいかないことから、車庫が真っ先に追加されたと思われる。作業部屋と倉庫も、もともとは計画されていなかった要因である。大湯村は計画時に完全な職（＝農）と住の分離を目指しており、農業に關係するものは居住区とは離れた格納庫群に集められていた。しかし実際は身の回りの農具や作業着などを収納する場所が必要で、こうした生活上必要な機能が真っ先に居住に追加されたと考えられる。特に2次入植（1968年）以降では家庭菜園が住居内に計画されることとなり、農作業の一部を住居敷地内でも行うようにライフスタイルが変化したことが、こうした職機能の住戸への追加を助長したと考えられる。

時期（5年毎）	増改築事例数	増改築時に対象となった空間																	計
		玄関	廊下	居室	浴室	台所	子供部屋	書斎	納戸	風呂	トイレ	車庫	倉庫	作業部屋	外壁				
1968-1972	59	19	6	9	26	2	4	13	3	17	1	4	2	5	44	10	4	172	
1973-1977	65	35	18	19	48	7	8	21	7	16	1	3	8	12	37	15	4	261	
1978-1982	54	32	24	17	50	19	18	24	9	24	11	6	20	26	19	3	2	315	
1983-1987	44	27	14	26	34	21	24	21	13	26	8	13	24	30	17	5	2	316	
1988-1992	53	26	14	28	34	24	25	29	20	29	7	16	31	34	24	8	0	368	
1993-1997	28	14	3	19	10	15	13	8	10	12	8	4	18	17	9	4	2	171	
総計	303	153	79	112	202	88	93	116	62	124	36	46	103	124	150	45	14	1601	

時期（5年毎）	増改築時に対象となった空間/増改築事例数																	
	玄関	廊下	居室	浴室	台所	子供部屋	書斎	作業部屋	倉庫	納戸	風呂	トイレ	車庫	倉庫	作業部屋	外壁		
1968-1972	32%	10%	15%	44%	3%	7%	22%	5%	29%	2%	7%	3%	6%	75%	17%	7%	5%	
1973-1977	54%	28%	29%	74%	11%	12%	32%	11%	25%	2%	5%	12%	18%	57%	23%	6%	3%	
1978-1982	59%	44%	31%	93%	35%	35%	44%	17%	44%	20%	11%	37%	48%	35%	6%	4%	20%	
1983-1987	61%	32%	59%	77%	48%	55%	48%	30%	59%	16%	30%	55%	62%	39%	11%	5%	25%	
1988-1992	49%	26%	53%	64%	45%	49%	55%	38%	55%	13%	30%	58%	64%	45%	15%	0%	34%	
1993-1997	50%	11%	68%	36%	54%	46%	29%	36%	43%	29%	14%	64%	61%	32%	14%	2%	39%	
総計	50%	26%	37%	67%	29%	31%	38%	20%	41%	12%	15%	34%	41%	50%	15%	5%	18%	

図表3-18 対象空間の5年毎の頻度（内訳）と増改築における占有率

時期（5年毎）	増改築事例数	増改築時に対象となった空間数	1事例あたりの頻度
1968-1972	59	172	2.92
1973-1977	65	261	4.02
1978-1982	54	315	5.83
1983-1987	44	316	7.18
1988-1992	53	368	6.94
1993-1997	28	171	6.11
総計	303	1601	5.29

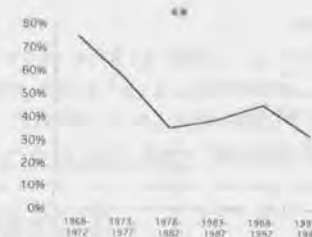


図表3-17 増改築の規模（増改築1事例あたりの対象数）

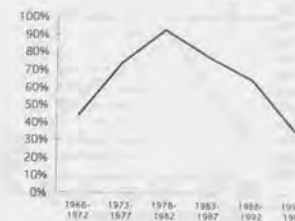
（註）この時期の増改築に関しては、事業団の報告書にも以下のような記述がある。
「新設された農家住宅は家族構成が変わった、台所が狭い、客間・物置・冬の洗濯干し場がない、仏間・応接間が欲しい、親戚が集まるも泊まる場所がない、2間続きの部屋が欲しい、車庫がないなどのさまざまな理由で必要に応じて、各人各様に増築拡張された。
この増築は、入居の翌年に約8.5%、2～3年後にほとんどの家が行っている。中には2度にわたり増築を行っている農家もある」

3章：住宅レベルの居住環境の変遷（住宅の増改築）

時期（5年毎）	車庫	倉庫	作業部屋
1968-1972	44	10	4
1973-1977	37	15	4
1978-1982	19	3	2
1983-1987	17	5	2
1988-1992	24	8	0
1993-1997	9	4	2
総計	150	45	14



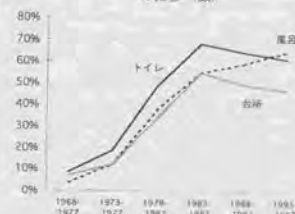
図表3-19 職関係の増改築における占有率の変遷（右は「車庫」の推移）



図表3-20 接客空間の頻度

時期（5年毎）	書斎
1968-1972	1
1973-1977	1
1978-1982	11
1983-1987	8
1988-1992	7
1993-1997	8
総計	36

図表3-21 書斎の増改築の対象となる頻度の推移（数）



図表3-22 水廻り空間の頻度

時期（5年毎）	書斎	台所
1968-1972	2	4
1973-1977	7	8
1978-1982	19	18
1983-1987	21	24
1988-1992	24	26
1993-1997	15	13
総計	88	93

図表3-23 書斎と台所の増改築の対象となる頻度の比較（数）

II期 量の充足から質の向上へ

図表3-20は接客空間が増改築時に対象となる割合の推移である。接客空間は増改築で手を加えられた空間の1割以上を占める要素であり、30年を通じて常に高率で増改築の対象となっているが、特に1978年から1987年の中間の10年がピークである。接客空間も初期住宅には想定されておらず、追加された機能であるが、上述した職に関する機能に比べて緊急度が低く、他の空間でも代用がきくものであることから、ピークがやや遅くなったものと考えられる。

このようにある程度余裕が出てから追加されるものには、趣味的な要素が強い書斎が挙げられる（図表3-21）。事例数が全部で38と数が少ないので、経年的な傾向をつかむには十分ではないが、38事例のうち、36事例が1978年以降の居住10年目以降であり、こうした趣味的な空間はこの時期になって、やや余裕ができてから追加されると考えられる。

以上のもともとなかった機能を追加していく増改築はI期より引き続いている傾向である。II期以降に新しく見られる増改築の傾向は、(a) 機能の充実、(b) メンテナンス、(c) 全体の調整の3点が指摘できる。

(a) 機能の充実

居住10年目以降で増加の傾向にあるものは他に、台所、風呂、トイレの水廻り空間と居間。食堂が挙げられる。これらは入植開始10年目以降に急増し、以後増改築で高い割合を占める。これらは当然初期住宅にも設定されていた空間であるが、不足空間の追加など量的な増改築が一段落し、質に視点がシフトしてくるこの時期になると規模の拡大するなど充実が図られるようになる（図表3-22）。

図表3-23は食堂と台所の増改築の頻度を比較したものである。2空間はほぼ同じ頻度で行われていることが分かる。食堂と台所は近接した関係であり、合わせて増改築が行われている可能性が指摘できる。

(b) メンテナンス

この時期になってくると、初期住宅の屋根のペンキなど、部材によってはメンテナンスの時期を迎えるようになる。屋根・外壁が増改築時に対象となる頻度もⅡ期以降に急増している（図表3-24）。また、こうした維持作業が、住居全体に何らかの加工を施すきっかけになる可能性も考えられる。

(c) 全体の調整

Ⅱ期で頻度がピークを迎えているものに、縁側がある（図表3-25）。多くの事例で縁側が見られる理由としては以下の3点が考えられる。

- (1) 寒冷地であるため、断熱対策のために設けられた。
- (2) 庭で作業する家庭も多く、居室と庭の間に中間領域的な空間が求められた。
- (3) 初期住宅はコンクリート造であり、増築を行った空間を既存部分とをつなげるために壁体を破るのは工法的に困難であり、開口部と増築部分を接続する動線として作られた。

特に(2)、(3)の理由に関しては、ある程度敷地の利用や増改築が進行していることが前提であり、縁側を追加する増改築が入植10年とといった時期に増加することを裏付けているといえる。

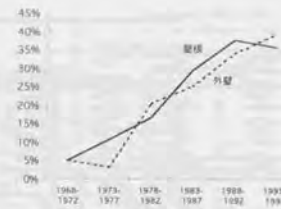
今までは小刻みに増築が進められ、住居の各部分に目が向けられていたが、この時期になると初期部分のメンテナンスも必要となることから、縁側の様に増築部を含めた住居全体としての調整や統合が図る増改築が見られるようになる。

Ⅲ期、今後の傾向

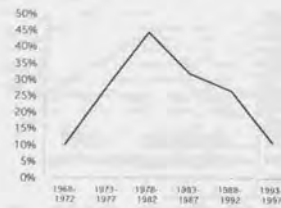
Ⅱ期で増加の傾向にあったものは、Ⅲ期の増改築においても高い割合を占めるものが多く、Ⅲ期も引き続き、住居の質の向上に着目した増改築が進行している。また、Ⅲ期の新傾向として指摘できるのは、新築の増加である。図表3-26は住宅を新築した時期の分布である。居住20年を経過するこの時期になると、住居を新築する事例が増加しているのがわかる（註）。また、今後の傾向として考えられるのは、

- (1) 引き続き、室空間を追加していく形での増改築
- (2) 新築（既存の一新）

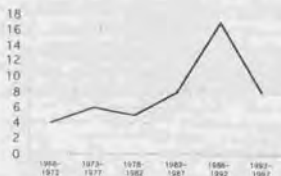
である。図表3-27は大潟村の人口と世帯数の推移であるが、人口がほぼ横ばいなのに対し、世帯数はここ5年で急増しており、村内に新規の住宅地がないことから、住戸の2世帯化が急速に進んでいるのが分かる。こうした住戸プログラムの抜本的な見直しに対し、従来通りの空間の追加で乗り切るか、新築により一旦リセットしてしまうか、岐路に立っているといえる。



図表3-24 屋根・外壁の頻度



図表3-25 縁側の頻度



図表3-26 住宅の新築（件数）

（註）ただし、ここで「新築」と回答した住居の多くで、初期住宅が現存しており、やや新築の定義が厳密でないものが含まれている恐れがある。ただし、新築が増加しているという傾向はおおよそ間違いではない。

年度	世帯数	人口	1世帯当たりの人口
1970	380	1,640	4.32
1975	686	3,237	4.72
1980	706	3,334	4.72
1985	704	3,254	4.62
1990	711	3,268	4.60
1995	762	3,311	4.35
1999	1,003	3,411	3.40

図表3-27 大潟村の人口と世帯数
世帯数の増加

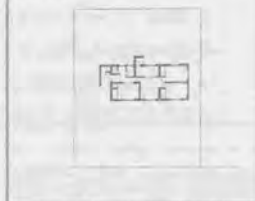
実測調査分析図

	初期住宅の残存	入植年次	住宅の種類
KWT	有	1次	農家住宅（BW）
TKH	有	2次	農家住宅（CN）
SKM	有	4次	農家住宅（EW）
KMT	有	1次	農家住宅（CW）
SMM	有	1次	農家住宅（CW）
YMU	有	4次	農家住宅（EW）
TZW	有	（5次）	農家住宅（EW）
UKT	有	3次	農家住宅（EW）
TCD	有	4次	農家住宅（FW）
MRM	有	（3次）	農家住宅（FW）
TBR	無	（3次）	農家住宅（EW）

■KWT

1次入植
M(74) 愛媛県出身（入植者）
F(69) 愛媛県出身
M(42) 愛媛県出身
F(39) 東京都出身
F(16) 大潟村生まれ
M(12) 大潟村生まれ

1967 平家を選択。中央に配置
初期住宅BW

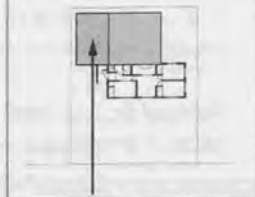


将来の増築を配慮

「初期には隣り合わせの5軒で協同体でやっていた。農地も格納庫も隣り合わせだった。住居や農地の配置は5人で抽選して決まった。」

「初期は3間×7間の平屋（低い屋根）だった。平家にしたのはどうせ増築するのに三角屋根では増築しにくいと思ったから。」

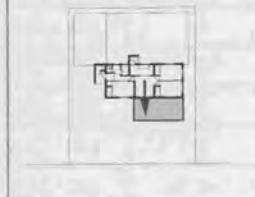
1970 北側に伸びる。南は庭のまま
客間・車庫・作業部屋



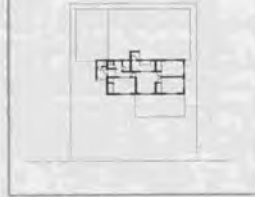
両親と同居

「4回から父母を迎えるために車庫や物置も欲しくて裏に2階住宅を、下には車庫物置など。」

1974 南に住居空間が突き出す
玄関・応接間・風呂



1985 北側増築部分を更新
居間・客間・食堂・台所・寝室・風呂・トイレ



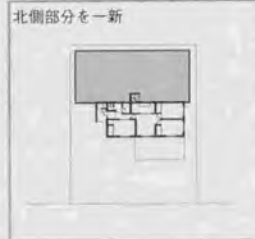
後継者の結婚
既存を壊すのにはコストがかかる

「子供たち結婚の頃に改装した。」
「コンクリートの既存部分は壊すのにお金がかかる。」
「設計・施工は天然素材で省エネルギー住宅をうたっている業者に頼んだ。前回の増築の時は近所の施工をきっかけに工務店を頼んだが、路線と趣味が一致して、以降得意にしている。」

「工事期間中は道路側にプレハブを出し、そこで二世帯が生活していた。親世帯は屋根をはずしているあいだも初期部分で生活していた。」

「既存の増築は今回増築が竣工した場所にあった。これを壊して今回新たに建てた。」

1998 北側部分を一新
玄関・居間・応接間・食堂・台所・子供部屋・屋根・寝室・納戸・風呂・トイレ・車庫・外壁



趣味空間の確保
2世帯化

考慮事項：日照、防風、防虫、母屋との繋がり、近隣とのデザインの調和、人・車の入り方、自分達の住みやすいように
参考事項：本・雑誌・TV、後継者本人の趣味も入れて工務店：毎回違う
家での農業：トラクタかけ、田草田植補助、産地直送の発送（月3回）
登食場所：自宅（田植時は田んぼ作業場で）
緑道使用：あり（通路、近道、
公的な場なので私的なことには使っていない



「家庭菜園は使っている。とれた野菜を特産品センターへ出している。」

「裏の緑道の木は村で管理されている。」

「家の裏・左右とも境界ぎりぎりまで建物を建てている。」

「家の前には花壇を作っている。工事中の仮設プレハブがなくなったらまた植える。」

「跡継ぎが音響に凝っていて、1階増築部分に音楽施設（スタジオ、工房、ボーカル室、ミキシング室、音楽教室）を作った。」

「2世帯住宅で、2階が息子世帯。1階が親世帯になる。初期建物の屋根をとりはらってルーフバルコニーとし、2階（息子世帯）の庭的存在とした。」

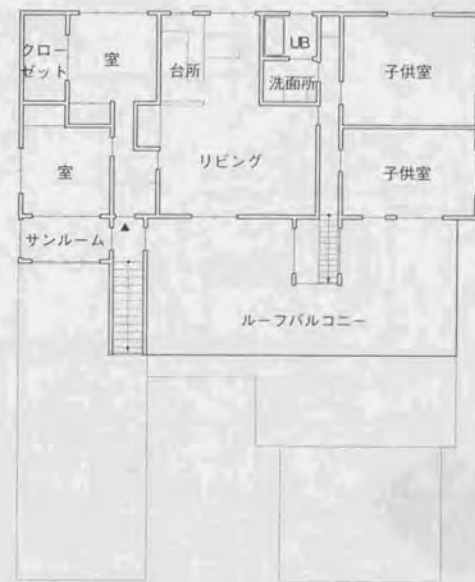
「家に農業自体は持ち込んでいない。袋詰め等は格納庫で、精米は精米所でやっている。産地直送を営んでいるが、FAX・コンピュータは住居で使っている。東京へ低農薬米を送っている。」

「45坪の2階・2階は住居。1階は息子の趣味の部分。録音室、演奏室、ピアノ教室など」

「ピアノ教室を営んでいる。先生は他所から来ていて、家族ではない。」



黄色部分は
初期住宅の残存部



TKH

2次入植
M(58) 岡山県出身（入植者）
F(53) 岡山県出身

1968

初期住宅CN

中央に配置



「子供は向いのお婆さん宅に預かってもらっていた。そのお宅は近所の託児所のようだった。子供の遊び場は整備されておらず、保育所の機能を持っていた児童館が終わると、子供はそのお宅に向かっていた。」

「初期はこちら3軒と向こう3軒の6人グループで共同経営していた。当時から受け持ち仕事によってバラバラに通っていた。」

1970

客間・車庫

西側に車庫が付き、南には住居空間が伸びる

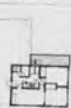


「子供は高校時代は秋田に下宿しており、日曜毎に帰宅していた。」

1994

玄関・客間・屋根・トイレ・外壁

外装と玄関まわりの増築



「大工さんはお隣を見て決めた。」

考慮事項：値段、面積、人・車の入り方
参考事項：近隣
工務店：毎回違う（近所の増改築をみて、知人の紹介）
家での農業：家事一般
昼食場所：農舎の中の休憩所
緑道使用：あり（樹木）

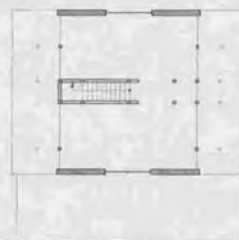


「裏の緑道は草ぼうぼうになってしまっている。下水管を通すためにわざわざあけてあるとのこと。うちは南が広くあいているので良かった。」
「子供の部屋には昔の荷物、下宿時代に買った荷物がいまでもたくさん置かれており、物置状態。現在は3人とも東京在住。」
「家庭菜園は使っている。自分で食べるものを40〜50種類栽培。野菜は人から買う必要がない。」
「車は2人で4台持っている。農業とその他で使い分けは多少ある。」
「農舎の中に4畳半ほどの部屋を作って休憩している。食事はここでつくったり、持って行ったり。風呂を除けば生活できる環境。」
「家の前には花壇は作らない。手入れが面倒なため。」
「普段は家から直接農場へ行っている。機械は農場に置いてある。」
「格納庫は古い機械の置き場になっている。家の物も多少置いてある。」
「裏庭には果を植えている。」
「住居では農作業はしない。」
「道路との境は周囲を見て同調しがち。」

TKH



着色部分は
初期住宅の残存部



4次入植
M(?) 宮城県出身 (入植者)
F(?)

1970
初期住宅EW

中央北寄りに配置



庭を広くとりたい



「最初の家は物置も車庫もなかった。統計から割り出された数字だけで作られた家だった。車は路上駐車なら冬は寒くてエンジンがかからない。」

「入居当時に壁かドアか選択できる場所があって、自分は風通しを考えて、ドアにした。」

「住宅は安かった。280万円で半額補助だった。25年払いだったが、繰り上げ償還した。」

「自分の常食グループは5人グループ。グループ決めの居住地決めの研修期間中に同時進行的に進められたので、住んでいる場所はバラバラである。」

「家は建てる場所と間取りを決めることが出来た。他の人は前の方に建てていたが、自分は後ろギリギリに建てた。」

「最近防風林が発達して改善されたが、当初は風がものすごかった。」

「昔はまわりもみんな同じ屋根の色なので、ドアで自分の家を見分けた。酔っぱらって入ったところが隣の家だったという笑い話も昔はよく聞いた。」

1973
倉庫

西側に車庫が付く



車庫の必要



「最初に増築したのはオイルショックの後。建築費が上がったので覚えている。車庫と2階を作った。」

1978
書斎

東に沿って住居空間が伸びる



「この頃に建築費が上がり、廊下を作っただけで120万円かかった。」

考慮事項：隣家距離
参考事項：不明
工務店：毎回違う
家での農業：道具整備、商談
登食場所：自宅
緑道使用：不明



裏側、初期住宅部分



「当初ドアを選択したところは、今は荷物が一杯で差がってしまっている。」

「家と格納庫とたんはがバラバラなのは不便。工具を忘れると一苦労である。」

「今考えると、農地と家と牧畜がまとまっているヨーロッパ式の農業形態もあったのではないかと気がしてくる。格納庫とハウスと家がまとまれば合計3反ぐらいあるわけで、もっとゆったりつくっていた。ここでは隣が近くて鶏も飼えない。以前飼っていたがうるさくて近所迷惑となり、うまくいかなかった。まあ、実家が庭が小さくても家が大きくなっただけの話かも知れないが。」

「今は産直をやっているんで、格納庫の横に作業場をつけ、切り機を置いていた。格納庫自体はほとんど物置である。」

「家と田は近いので食事は戻る。本当に忙しいときに農家で仮眠を取ることはある。」

「庭にも少し作物を植えているが、これは単に土地が余っているから。」

「三角屋根は入植者の初心だと思っている。」



KMT

1次入組
M(74) 秋田県出身 (入組者)
F(72) 秋田県出身
M(51) 秋田県出身 (後継者)
F(46) 秋田県出身
M(21) 東京在住 (大学生)
M(20) 高専に通学
F(6) 大潟幼稚園に通園



1967
初期住宅CW

北いっぱい配置

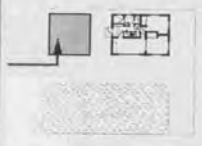


「第1次入組で営農集団と住居、格納庫とグループ化されている。56人と少人数だったのでもとまりもあった。昔は同時間入組の人達で年一回集まってどんちゃん騒ぎしていたが、そういうこともなくなって気の合うグループで集まる程度。訓練所生活のなかで気の合う仲間がグループ化された。入組する前から既にグループ化されていた人もいた。いずれにしても、そうしたグループに敷地が与えられてその中で抽選して住居敷地を決めた。」

1969
客間・車庫・倉庫



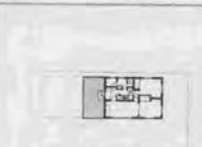
西道路に向かって車庫が伸びる



1975
玄関・客間・子供部屋



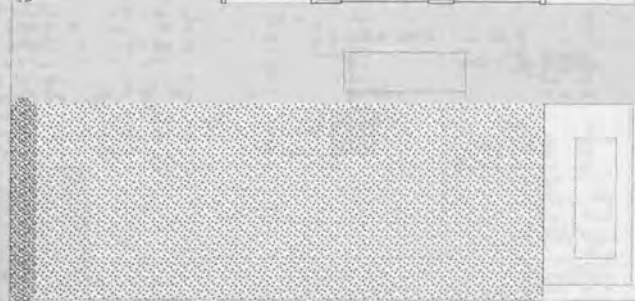
家族構成の変化



考慮事項：値段、面積、母屋との繋がり
参考事項：なし
工務店：毎回違う (知人の紹介)
家での農業：道具整備、商談
昼食場所：自宅
緑道使用：あり (用途不明)



着色部分は
初期住宅の残存部



「うちは農場が近いので、延滞休憩は自宅ですが、農場が遠い家は弁当を格納庫に持って行っている。」

「農場には農舎小屋があり、臨時にちょっとしたものを置いておくという様に利用する。」

「格納庫は必要なものがあれば取りに行くという程度。格納庫は加工したり、機械を置いたりする場所として利用している。」

「家庭菜園では家で食べる程度のものを作っている。特別に物産センターに持って行くということはない。」

「ソーラーカーレースに家族で参加している。息子2人に図面と電気関係を担当してもらっている。メカドックは格納庫を利用している。」

「農は普段からかけていない。昔は帰ってきたら友達が勝手に家に上がっていることもあった。」

「西うことが嫌いなので、ブロック塀などは用いない。せめて植木を植える程度。見られて悪いことしていない。」

「ソーラーパネルを自宅にもつけて発電に利用している。発電量は思ったよりも良かった。15年で償還できれば良いか。」

「息子は高専の5年生で家から通っている。『ちび』は大潟幼稚園に通っている。近所の友達3人と子供だけで歩いて通っている。車交通が少ないから大丈夫。」

「普段車で移動しているので緑道は利用しない。」

「農作業は殆ど格納庫で行っているため、家ではやらない。ここらの辺りはみんな仕事と住むのを分けている感じ。」

1次入植
M(67) 福井県出身(入植者)
F(?) 福井県出身

1967
初期住宅CW



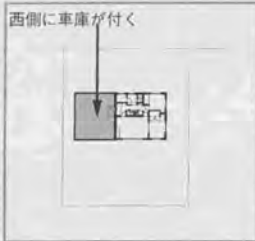
増築・風を考慮

「隣がまだ建っていないときに、隣の土地を借りて、苗を育てる50mぐらいのハウスを作っていた。隣家は3年ぐらいで建ったので、ハウスはつぶし、残っているのは暖房器具があった1坪くらいである。」
「新築時は車庫もなかった。松林がまだ30cmぐらいだったので、風がきつくて、玄関の掛け障りが大変だった。開けるのは大変な力がいるし、閉めるときはボタンボタンとすごい音を立ててしまった。冷風の吹き込みもすごく、暖房の暖気などと言っう間に吹き飛んだ。」
「ならび4軒は当初は竹を植えた垣根があった。あとは予算の都合で、垣根がないところもある。」
「農業は南の4軒と共同である。場所は抽選で決まった。集団内での配置は農場と住宅では異なる。」

「家は300坪ぐらいの宅地が欲しいと思ったが、当時は宅地不足が懸念されていたため、500坪の宅地となった。今の家は間口が20m、奥行きが25mである。家を建ててみて分かったことであるが、同じ面積なら、間口が25m、奥行きが20mで事業用と交渉するべきだった。宅地がやや狭いのが不満だが、狭いおかげで家が大きくなりすぎるのを制限されて良かったとも言えるかも知れない。」

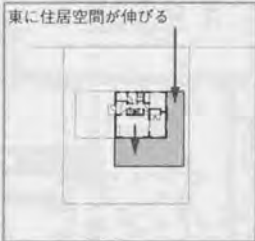
「最初は三角屋根で、西側に屋根を付けた。入植当時は三角屋根の建築本体を確保けないように言われたので、くつつける形で増築した。幅一杯で増築したのは正解だった。他の家は小さく増築したので、結局壊してもう一度作るようになってしまったところが多かった。」
「農業が忙しいときは子どもは寝る。」

1968
車庫・物置・作業所



将来性を考慮
防風

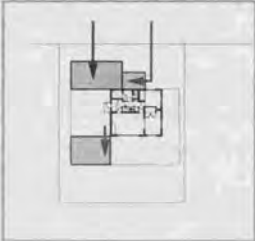
1978
玄関・居間・応接間・子供部屋



家族の変化
隣家への雪を考慮

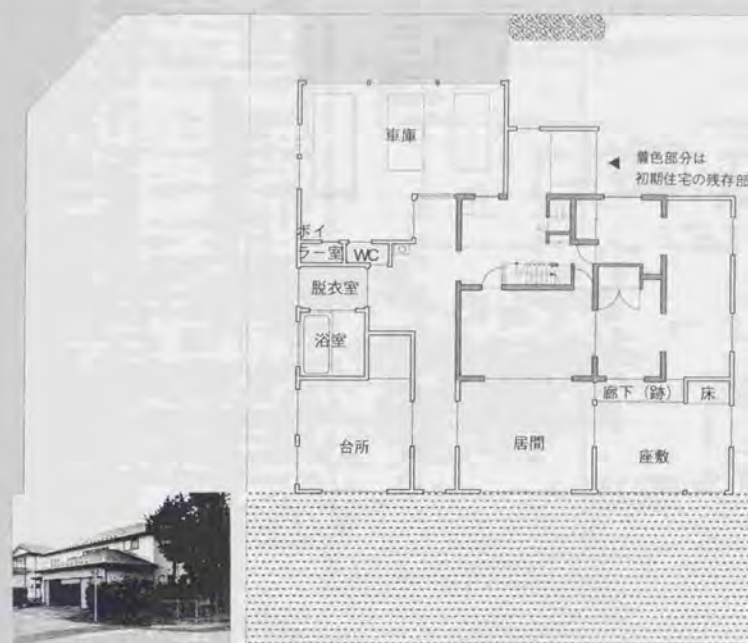
考慮事項：隣家距離、雪(隣家とのトラブルを警戒)
参考事項：近隣、本・雑誌・TV
工務店：いつも同じ(近所の増改築をみて)
家での農業：道具整備、商談
昼食場所：農場
緑道使用：あり(通路、物干)

1990
玄関・客間・食堂・屋根・風呂・トイレ



近隣の家を参考に
車が増える

「南は昔は2階にベランダがあったが、今は東側である。息子達は布団が干せなくなったと言って文句を言っていた。」
「今は寄せ棟だが、雪は東側と南側によく落ちる。年によって違いがあるが、風の影響ではないか。」
「増築するときに2階の屋根ももう少し、高くしておけば良かった。そうすれば3階も物入れに使えるのに。」
「軽トラを2台買ったのは、1台では追いつかなくなったから。大きい1台より便利。」
「家を建てるときは裏の家の家を見せられて行った。座敷は1階に限ると思った。」



「自宅でもやる農業は、豆の選別や修繕で、これは車庫などでやる。帳簿付けも大変だが、居間や自分の部屋でやり、特に決まった場所はない。」
「本当に忙しいときだけ、弁当を小屋や自動車で食べる。」
「農舎も快くなったので、大きくした。40坪ある。特に部屋などは作っていない。」
「菜園地で野菜を作っているが自家用程度。足を運ぶのは、様子を見に行くときと、秋の収穫。離れているので、ついでに行くとかは出来ない。」
「格納庫はグループで使っていたが、狭くなったので、自分用もつくった。今はものだらけ。」
「一番心配なのは火事。西風で自分の家が西端で、延焼して他に迷惑をかけるのが心配。」
「車庫は4台目を置くのはちょっと無理かな。拡張しなくては行かないかな。」
「車庫の西側にあった木は生長して幹回り2mにもなっていたが、平成5年の台風ときに、向かいの家に倒れからんばかりだったので切っても良かった。それがいま横たわっている丸太である。間にあった松だけ大きくなった。今はサルビアはやめて草林にして、イチジクが大きくなっている程度である。」

「自分は塙とかで囲わない主義。悪いことはしていないので、見られて困ることはない。」
「息子は1人部屋、娘は2人部屋。娘の部屋はやや広めにしている。子ども達の部屋はそのままだけであり、帰省したときはそこに泊まっている。」
「南側には庭が6mが7mぐらいある。果の木は枯れたが、柿の木が2本、葡萄もあるし、10年前にはキウイも植えた。」



「1次は菜園が別にある。一緒にあった方が良かった。家、ハウス用地、菜園、格納庫、農場2カ所と全てバラバラなので、移動が面倒。」
「門柱は間を空けて、少しかけたが、今も残っている。垣根はうちも周囲も車庫を作るのに欠けたところが多い。」

4次入籍
M(59) 秋田県出身（入籍前）
F(55) 秋田県出身
M(25) 大潟村生まれ

1970

初期住宅BW

隣を考慮して
庭を広くとりたい



1972

居間・食堂・台所・子供
部屋・屋根・寝室・トイレ
・外廊

人・車の入り方
車庫の必要



1984

客間・応接間・食堂・
台所・子供部屋

村内の流行
明るさ
村内の住宅を参考に
子供の成長



考慮事項：日照、通風、将来的変更
参考事項：近隣の住宅
工務店：毎田造
家での農業：道具整備、収穫物の加工、商談
昼食場所：農場
線道使用：なし

1993

玄関・風呂・トイレ
水廻り



「自分の家は持っていなかった。家を持つことはあこがれだった。」
「道はうがやや高い。昔は道が砂利で、家との落差があった。」
「家は入植して朝とすぐ建てた。」
「家の位置は後々の関係もあるので、隣とも相談した。隣も同じくらいの角に建てた。」
「最初の家は窓が小さかった。トイレも窓が小さく監視みたいだった。」
「最初から木の垣根があったが、ここはコンクリート基礎だったらしく、木も庭も育ちが悪かった。庭には新しく土を入れた。」
「グループで協同生活をする人もいたが、仕事も家も一緒というのは嫌だったから。自分は住宅はどこでも良いことにした。隣が同じ農業グループだったのは偶然。」
「最初に家の場所を決めるときは裏に場所があっても無駄だと思ったので、家は北東の隅に寄せた。」

「増築部分の屋根の色は三角屋根に合わせて決めた。うちだけ黄色にするわけにもいかないし。」
「門柱の幅は上げた。」
「この5人は4次でまとまっているので、前は定期的に持ち回り集まっていた。」
「昔は家の横の作業場で稲の箱詰め作業をした。」
「三角屋根は寝るだけの場所として考えられていて、狭すぎた。最初に作業場と車を置くところが必要になった。」

「家を建てる時は、色々参考にした。工務店は村内だけで40軒くらいやっていたので、それを見に行ったり。内覧会というのもある。新築する家がある度に内覧会のチラシが入ってくる。」
「家のセールスマンはよく来る。10年くらい前は建築ブームだった。大工不足で、機上げ式をやったあと職人が全然来ないというところもあった。」
「当時、車庫の2階に部屋を作ると言うのが流行っていた。」
「改装で元の家の柱を残して壁をはずした部分がある。地震の時は心配で一目散で帰ってきて家の無事を確認した。どうやら地盤が良いらしい。」
「最初は三角屋根でも充分だったが、子どもが大きくなって子ども部屋が必要になった。家の中で子どもが相撲やラダーや野球だと駆け回るので家を大きくした。」
「家を造るときは明るさにこだわった。当初の事業団住宅は薄暗く、「広いところに来て暗いところに住むこともあるまい」と思った。薄暗いのはきらい。」

「子どもは高校に上れば、下宿する。娘は通ったがほか2人は下宿で、上の子はほとんど帰ってこなかったが、末っ子はよく帰ってきていた。」
「入植した当時と変わったことは家の大きさだろう。今では三角屋根を探すのに苦労する。でかい家を作る人が多い。工務店もここから一軒辺りの数が7000万円くらいと大きいので、年に5〜6軒作るだけでよく、ここから動かない工務店もある。いくつか有名な家系もあり、瓦屋根ですごく目立っていたが、最近では周囲に埋もれてきたかもしれない。」
「次の改装では水廻りが気になった。」

「角地だからといって良いことばかりでもない。向こう側の角地なら、公園が広がって良かったかも知れない。」
「農舎は小さい。増築程度。自分で作った。」
「格納庫を休めるようにしている人はあんまりいない。格納庫を寝るのには工具や道具が必要ときだけ。」
「農地は遠いので弁当持参。農舎で作りはせず全て持っていく。」



着色部分は
初期住宅の残存部



「子どもは3人。2階は子どもの部屋だった。息子は月に1〜2回は帰ってくるが、あとは物置。娘夫婦がたまに帰ってきて、子ども部屋は使っている。」
「風呂場はそのまま残っている。現在は物置だ。風呂桶もある。いい貯蔵庫だ。」
「花壇はすぐそこ。窓から見えて。花壇の花は住区で決まっている。」
「窓が大きいので、明るくていいが西日が大変。冬は確かに暖かいが、夏は死ぬほど暑い。広いので、クーラーは業務用ぐらいじゃないと効かないのではないかな。夏は息子の部屋にクーラーがあるので、そこに避難したりする。」
「車は2トンのダンプを2台と軽トラ一台と乗用車2台。ダンプ2台が格納庫で後は家に置いてある。」
「営農グループでは最近では集まらない。最近では家よりルーラルとかボルダーで集まる。」
「銀婚式とかのデスクワークは寒いので居間とかでやる。昔は書類用の部屋が2階にあったが、今は子供もいないし、居間の方が温かい。」
「住居については大潟村では一般に大きく（一見無駄、私も含む）建てられている。農村。農家は隣が仇になる。ただ金がある。豪華な建物は個人の自由だが、農家は一般的に大きな家を欲しがっている。反省の点あり。」



TZW

5次入籍

M(61) 秋田県出身(入籍者)

F(58) 秋田県出身

M(38) 秋田県出身

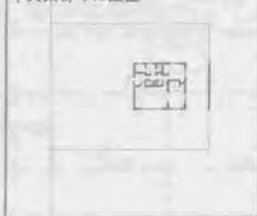
F(38) 東京都出身

F(10) 大湯小学校に通学

M(7) 大湯小学校に通学

1974
初期住宅EW

中央東寄りに配置



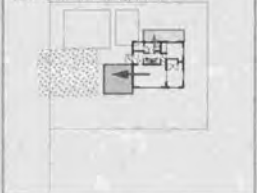
1975
玄関・応接間・子供
部屋×2・車庫

北に沿って、西道路に向かって
車庫が伸びる



1986
玄関・食堂・台所・
寝室×2・風呂・トイレ

台所が正面に出る
北に水廻りが拡張する



考慮事項：人・車の入り方
参考事項：本・雑誌・TV
工務店：毎回違う(近所の親戚)
家での農業：不明
昼食場所：自宅
緑道使用：なし



「農場も場所が分りにくく、通り過ぎることもあつたし、人の田の草を間違えてとっていたこともあつたと聞く。最近では人の家の農舎の屋根の色を見て目印にしている。」
「宅配の仕事は自分で精米せねばならないが、精米設備が未だないため既に宅配をしている人の設備を貸してもらってその場で行っている。それ以外の農作業は格納庫で行っている。」
「今年から宅配を始めた。作業は自宅で行っている。」
「村の中はやはり住区に入ってしまうとどこも同じようにみえるので非常に自分の家の場所を説明しにくい。」
「裏は道じゃなくて誰かの敷地なんですね？暗黙の了解であえて罫を建てずにあいているけど...。大人は通らないが、子供は通る。」
「三角屋根の一部は義理の弟が使っていたが現在では静岡に住んでおり、その荷物が残っている。三角屋根部分は現在は祖母が使用。」
「税金の仕事に使うパソコンは2階の奥、寝室に置いてある。」



UKT

3次入植
M(62) 鳥取県出身 (入植者)
F(60) 鳥取県出身
M(36) 鳥取県出身

1969
初期住宅EW

中央北寄りに配置

住区内での位置
先を考えて



「住区の北なので住宅の位置は考慮した。北西の風が強いので、西入のタイプを選び、車庫を増築して風を防ぐのを考えて配置した。」
「片はよく通った。特に夜は今でも聞える。住間は住区入口の家で確認する。当初の住宅は屋根の色が違ってドアの色は同じだった。」
「敷地の北に寄せて建ててあり、1m程間いているだけ。」
「当初の住宅は良かった。」
「宅地は東入りだし、公園は近いし、基本畑や倉庫も近く、ハウスもいいところだった。いじり過ぎないかと思っていな。」

1971

玄関・食堂・台所・車庫

西側に車庫が付く

防風
車庫の必要

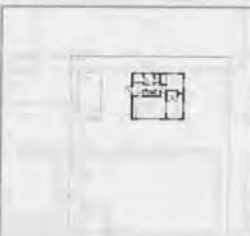


「初めは三角屋根の部分を壊して全部を建て直すという気はなかったけど、確かに2階は天井のせいで狭くて使いづらかった。」
「入植の年のうちに車庫をつけ、玄関を移し、玄関からの廊下を増設した。」
「北側のブロック塀は入植2年目に作った。」
「1回目の車庫増築は必要だったからやった。」

1981

玄関

ブーム

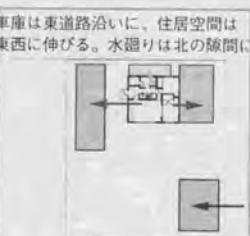
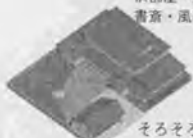


「10畳の居間と18畳のダイニングキッチンを増築。台所は大きいので一階出っ張るような様子だった。このときに玄関から居間へ食すぐの一階廊下を付けた。」
「2回目の増築は増築ブームで家がやうやうというのであまりやる気はなかったが増築した。」

1981

玄関・縁側・客間・応接間・食堂・台所・子供部屋・屋根・寝室・書斎・風呂・トイレ・車庫・外壁

そろそろかと思って
周囲の家を参考に

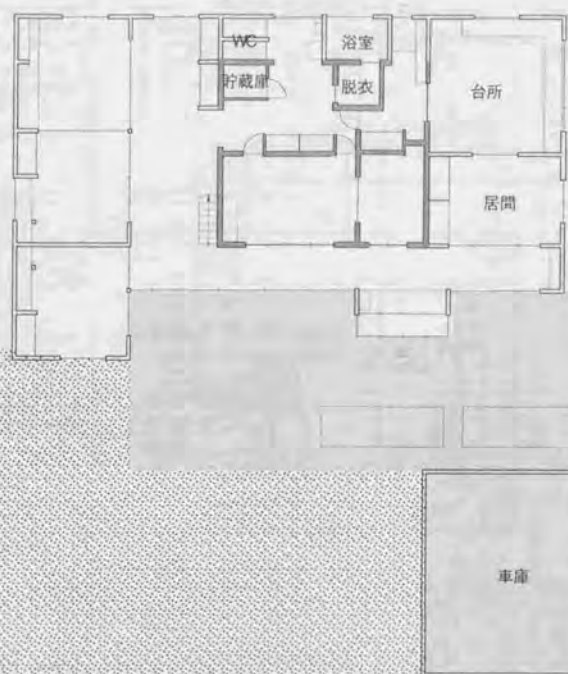


「89年に現在のかたちになる。これまでの車庫をつぶして三角屋根をはずし、コンクリートブロックだけ残して2階を付けた。現在は2階。風呂所は広く一坪、風呂は一坪半。『ふだん使うところは広くゆとり』と考えて、和室の前にも広い廊下をとった。階段のつくりも広々とした感じを出したいという事でリクエストしたが、ちょっと広すぎたかな、とも思う。」
「増築を頼むのはいつも同じ大工さん。坪30万円程でやってもらう。東京なんかと比べると大分安い。いつも同じ大工さんとリクエストし易い。自分で間取り程度の設計をして設計士に見てもらった。一応、周囲の家を参考にした。」
「屋根は平成1年までは赤かった。いまは青い。」
「3回目の増築は『そろそろかな』と思ったから。」

「家が大きいと維持費が掛かる。こんな大きな家要らなかった。税金もかかるし、屋根も5年に一度は塗り替えないといけない。」
「野菜の出荷は車庫で行う。」
「米関連の作業は、倉庫で行う。」
「最初は風が気になるかと思ったが、防風林が伸びたので今はそんなに気にならない。」
「階段を上るのに抵抗があるので、2階はいらなない、1階が広いのいい、と思っている。」
「ならびに『メロン御殿』といわれる家があるが、設計がダメ。センスがない。でかいだけ。」
「倉庫も、屋根の塗り替えに金がかかった。」
「続き間の和室は両方とも趣味に使用している。ものを置いたらそのままにして、人が動けばいいように出来て便利。材料はこんないい材はないと大工にいわれた。趣味の写真は大体ここで、将棋はここか知人宅が多い。税金等の事務作業もここでやる。」
「和室の窓から公園と児童館が見える。公園のツツジは今が見ごろで窓からの眺めは気に入っている。」
「緑道にはフキ・ミョウガなど、手間のかからないものを植えておく。他の家でも垣根してないところは、何かしら植えている。」

「庭は石なんか買って置きっぱなしだったのを、整理しなくちゃということで96年に庭師・植木屋に頼んだ。芝の世話が大変で手間が掛かる。」
「元の風呂場は物置にしている。浴槽は取ってあるけれど、タイルはそのまま、下がコンクリートなので米・味噌・漬物の貯蔵にはちょうどいい。」
「風呂の隣に勝手口をつくった。仕事の際はこちらから出入り。仕事の際は着替えてここから出かけ、帰ってくると真すぐ風呂に行くことができる。壁には仕事に必要なものが並んでいる。とにかく隙間があれば物を置いた。物置はとても必要。」
「夏はいいけど冬は寒いので、昔はほとんど床暖房のある部屋にいた。この部屋は冬の間、奥さんの仕事場になっていて、奥さんはストーブの前でドライフラワーづくりを行う。」
「2階は後で用途に応じたものしようとして、内装はしてない。」

着色部分は
初期住宅の残存部



UKT

TCD

4次入植 委託農業
M(63) 秋田県出身 (入植者)
F(55) 秋田県出身
F(33) 東京在住 (後継者)
F(27) 東京在住

1970
初期住宅FW



先のことを考えて
庭を広くとりたい

「里山のどうだんツツジは割り箸ぐらいのを入植したときに植えた。木は先のことを考えて植えたので、あとから切るということとはなかった。」

「家の位置は庭が広く取れるようにした。主人が先のことを考えて配置したが、今ではピッタリで良いなと思う。」

「昔は庭は芝生だった。」

1971
玄関・客間

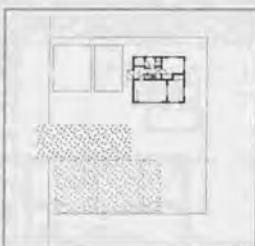


両親と同居
(人・車の入り方)

「荷物は三角屋根の二階の両脇に入れていた。天井が低くなるので取るときは大変だった。」

「最初は三角屋根で暮らしていたけど、二人暮らしを想定した家だったので、最初に一緒に両親の部屋を隣に作った。」

1980
子供部屋



子供の成長
屋根裏の増築
スペースの利用

「(両親の部屋のあと) 1回目の増築は2階の子どもの部屋。」

考慮事項：防寒、母屋との繋がり、将来的変更
参考事項：不明
工務店：いつも同じ (ハウジングセンターがきっかけ)
家での農業：不明
昼食場所：不明
緑道使用：あり (用途不明)

1989
89:客間・倉庫

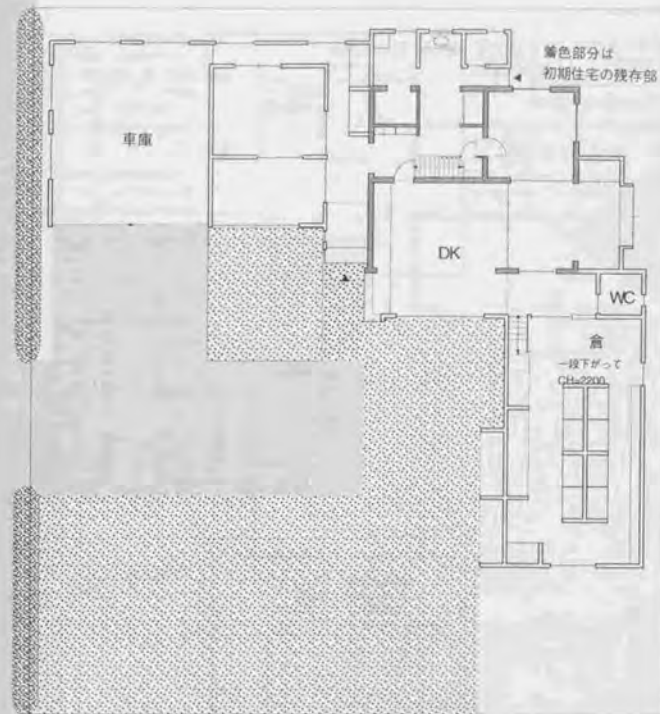


趣味の家づくり
周囲と調和させた
外観デザイン

「秋田に行ったときに主人とふっとハウジングセンターに寄ったのが、そもそもの始まり。アンケートに答えたら、セールスマンが家に来た。彼はこれくらいに、これは×とか、色々注文を付けた。結果としてそのメーカーの型を全て壊してしまっただけ。完成してから『非常にやりづらかったが、思い出に残る建物になった』と言われた。私自身も楽しい6ヶ月間だった。」

「地域性に関しては、まわりとの違和感がないようにすることを考えた。あまり目立ちすぎるを良くない。結果、外は洋風で中は和風になっている。」

「紅葉が見える意は主人の考え。主人の住んでいた家は中二階があり、こんな感じで、木の真ん中ぐらいが見える。下に収蔵がある。中二階のある家を建てたかった。」



着色部分は
初期住宅の残存部

倉
一段下がり
CH=2200



「農業は今委託。夫はソーラーズポーツラインの管理室に勤めている。3年前に新食法が出来て、身内に米を配っても良くなったので、そう言った人から電話を受けて米を送る作業を家でやっている。」

「車は4台まで入る。」

「家の中あちこちに生けてある柿は、夫の勤務先の周りの木から。」

「裏は官有地で通り抜け出来るようになっている。しかし、歩く人はいない。きれいなのが好きなので手入れをしている。窓から見える紅葉の葉が落ちると、隣の家の壁が借景みたいになる。一度お隣が切ろうとしたので、切らないようお願いした。」

「今までホームコンサートは5回開いた。毎回30人ぐらい来る。コンサートが終われば、旦那方はいろいろを囲み、婦人方は食堂のテーブルと役場から借りてきたテーブルに座ってわいわいやる。」

MRM

3次入植 入植者は岡山に帰っている
M(47) 岡山県出身（入植2世） 69-初期住宅FW
F(47) 岡山県出身
F(23) 東京在住（大学院生）
F(21) 奈良在住（大学生）
F(17) 下宿中（高校生）



（先のことを考えて）
（庭を広くとりたい）

北東に寄せて配置



「他の街区のように東西南北軸に造成されていないため、方角の説明や、増築時の設計が大変。家を建てる際南向き難しく、東西軸からずれているため、西日が入るといふ日照の問題もある。」

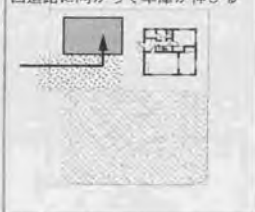
「車庫（軽量鉄骨）は手前に、住居は奥に配置した。」

「事業団の家はどの家もたいてい間取りが似ているので、トイレの場所を説明する手前がわからず便利だった。」

1971

71:車庫

西道路に向かって車庫が伸びる



（人・車の入り方）
（自動車の必要）

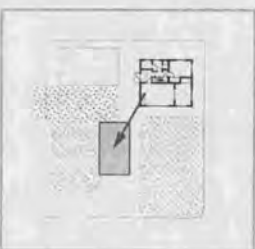


「最初の増築は粗み立て式のガレージを玄関だったところの左側につけた。」

考慮事項：値段、日照、母屋との繋がり
参考事項：知人宅
工務店：いつも同じ（知人の紹介）
家での農業：収穫物加工
昼食場所：自宅、農場、農場近くの格納庫
緑道使用：あり（通路）

1973

73:玄関・縁側・客間・倉庫
南を分割するように住居空間が伸びる
→オモテ庭・ウラ庭ができる
（2つの庭をつくる）



「屋根の色はもともと黄色で、青いカラートタンだったのを塗り替える際、業者が手を抜かないように黄色に塗り替えた。」

「この辺りはちょっとした低気圧でも台風並みの風速になるので、すさまじい風が入りそうな瓦よりもトタン屋根の方が合理的だと思う。」

「もともと玄関だったところはドアが低かったので増築で床を張った時に上のブロックを2段ほどはした。」



着色部分は
初期住宅の残存部

パソコンを置いている
部屋

フラットスラブ
→増築できるように

物置状態

子供3人
（現在は不在）



「昔は、会合の場所はガーデンやバンダぐらいしかなかったが今はホテルや湯などの場所が多くなって、家に集まる人が少なくなった。住居の集まりも人がだんだん集まらなくなってきている。」

「花壇の花植えは、私達の街区はやっている。北海道出身の入植者の方が住居にいて、その人から根を分けてもらって増やして伝承になっている。世話は面倒くさいが、せっかくなのでやってきたのだからということで続けている。ライバル街区は曲線道路の向こう側だが、勝てる自信はある。児童館の花壇も管理が住民ではないが、会を作って綺麗にしている。そういう意味ではこの街区は園芸好きが多いのかも。」

「増築に関しては2階の三角屋根をそのままにしている。大淵村にはもはや珍しく、無形文化財になるのでは？」

「部屋の使い方は台所、トイレ、風呂など事業団の時代からあるのままで続けている。トイレや洗面所の陶器も当時のまま。」

「子供は二人が東京と奈良の大学に行っており、残り1人は高校生で下宿している。2階の子供部屋は娘3人で使っていたが使われていた時のままで残っている。押入の裏が低くなっていて使いにくい。」

「パソコンは居間の奥の和室に置いてある。」
「老後に備えて、今年2級建築士の免許を取得。試験の練習は家の裏にいい場所があり、そこでやっているが、本番前には、大淵神社の裏の官有地で先輩が使った石を使ってこっそり練習する。」

3次入植
M(71) 秋田県出身（入植者）
F(70) 秋田県出身
M(48) 秋田県出身（後継者）
F(44) 秋田県出身

1969
初期住宅EW



庭を広くとりたい
周囲と同じように

「増改築のきっかけは必要に迫られて。夫婦2人と子どもだけの人の中には三角屋根と車庫で生活している人もいたが、2世帯には狭かった。お祖母さんが登壇をする場所もなかった。」
「事業団が設計した住居は余りに窮屈な設計で着替える部屋もないし、農作業から帰ってきて汚れていても、玄関からすぐに風呂に行けないなど非常に不便。当時居間とキッチンが一緒になったダイニングが無駄のない設計とされていたが農家においては疑問。」
「庭に植えてある松は入植してすぐ、大きい木を買って植えたもの。」
「最初の配置は南をむくとして畑ができるように南側中央あたりに作った。周りもだいたいそうしていた。」

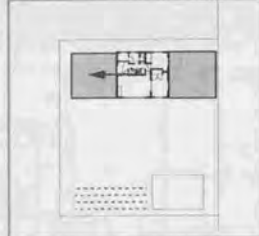
1972
客間・寝室・車庫



流行
2世帯化

「父親は入植者のなかでも年上の方だったため、宮城のリーダーになったりして、当時あまり集まる場所が村内になかったということも含めて、自宅をよくグループの集まりをした。」
「三角屋根の2階は両親が使っていた。車庫の2階部分は2部屋あったが自分達が住むために使っていた。」
「最初事業団の家を敷地内に配置する際には、両親は車庫ぐらいい増築出来ればという考えで配置したが、2世帯になると手狭になり、当時流行っていた車庫の2階の増築という形で、寝室と客間を作った。」

1974
車庫・倉庫



「当時近隣の家も大きい家を作っていて、それを見ていた家族が『あそこは敷下が何間だったか』とが、大きくしるというのでつい大きくしてしまいました。元の家があまりにこじんまりとしていたので反動で大きい家を作ってしまった。」
「事業団にもった家は天井が低く、床下の通気が不十分で、どうにもこうにも使い勝手が悪かったし、最初の配置も半端だったので、思い切って完全に取り壊し新築した。事業団住宅は丈夫なつくりだったのでもったいなかったけれど...」

考慮事項：値段、日照、防寒、人・車の入り方
参考事項：村内の知人の家
工務店：毎田造（知人の紹介）
家での農業：道具整備、商談
昼食場所：農場
緑道使用：なし

1995

新築（玄関・居間・客間・食堂・台所・子供部屋・寝室・書斎・納戸・風呂・トイレ・車庫）



周囲の家が大きい
近隣の家を参考に
使い勝手が悪い

「新築の際に参考にしたのは近所の知り合いの家で、そこは家の大工さんを知り合いだったので、依頼した。」
「新築している間は4月から10月位まで村内の空き家を借りて住んでいた。その空き家は個人的に知り合いだったことや、隣で管理している方と田舎が近いということで顔を見るため、話しかけやすく、1年前から予約して、空き家になる時期を待って新築に踏み切った。」
「狭い中で子供を育てようやく子どもが育ったら大きな家を作ってしまっただけ。笑いが話みたいだが。」



「自分でコンピューターをやる部屋を作った利用している。」
「新築は多くはない。この辺りでは西のとなりと火事があったり壊して作った家が隣にある。他は増築。」
「まわりに合わせて大きい家を作りましたが、使っていないところが多いです。」
「田舎の時期は忙しいので弁当を持っていく。」
「新築の家の2階は子供達3人の部屋をそのまま残しており、たまに帰ってきた時に休めるようにしている。いずれは孫の部屋になる予定。」
「（古い方の）車庫には車とみそ、野菜漬物物を置いているくらい。」

「垣根は近所で特別どうしようと話し合っていない。手入れしないと上にはばかり伸びたり、虫がついたりするから何年かに一回ハサミを入れる程度。」
「新築の家の2階は子供達3人の部屋をそのまま残しており、たまに帰ってきた時に休めるようにしている。いずれは孫の部屋になる予定。」

3-4 実測事例からみた住居改築の詳細

ここまでは、主にアンケート調査の事例を数量的に分析してきたが、ここからは実測調査を行った11戸について詳細な分析を行う。

面積の拡大とその要因

図表3-27は各住戸の現在の面積である。初期の計画で70㎡だった初期住宅（入植住宅の多数は増築可能部分を含めて100㎡弱）は、30年の増改築で、極めて大型の住戸に発展していることが分かる。住宅が大型化している理由として以下の3点が考えられる。

(a) 建て増し

敷地面積が十分で、建て替えより、建て増しが主流だったこと。

(b) 2世帯化

世代交代などにより世帯が増え、二世帯化したため。

(c) 趣味空間の追加

生活に余裕ができ趣味的な空間が追加されたから。

(a) 建て増し

(a) は住戸に対する要求を、室を転用するのではなく、新たに室を追加していくことで解決していった住居に見られる。こうした増築を可能にする背景としては、敷地の面積が十分にあることが考えられる。

しかし、住戸が拡大していく一方で、住戸内には用済みになり、以降他の目的のために転用されることが物置化している空間が増加していくことになる。

図表3-28は住戸で現在は使われていない、もしくは物置化している部分を黒く塗りつぶしたものである。住戸の相当面積が実際は使われていないことが分かる。住戸の変遷から辿っていくと、この様な物置化した空間ができる経緯には、子供部屋や高齢者の部屋など、その部屋を利用していた人物が居なくなってからも、そのままその空間が保持されて結果的に物置化する場合（SKMの2階）と、荷物が増えた、手狭になったなどの理由で同じ機能を持つ部屋を隣接して増築し、結果的に旧部分が使われなくなり、物置化する場合（SMMの2階）が考えられる。特に後者では増改築の結果、既存部分が外部に面さない行灯（あんどん）部屋になってしまったために、使われなくなっている。

事例名	住戸の面積 (㎡)		計
	1F	2F 半館 (注内訳)	
KWC	239.40	155.20	394.60
TKH	92.34	34.02	126.36
SKM	134.46	81.81	216.27
KMT	90.72	113.22	203.94
SMT	201.69	106.92	308.61
YMU	137.50	118.87	256.37
TZW	136.11	85.05	223.16
UKT	248.67	97.20	345.87
TCD	200.07	105.30	305.37
MGM	149.04	38.88	187.92
TBR	300.51	169.60	470.11 (新築)
平均	175.68	100.55	276.23

図表3-27 各住戸の面積



図表3-28 物置化している空間



(写真) スタジオはフラッターエコーを防ぐために、壁や天井は微妙に角度をつけてある。また、低音スピーカーは質量が重要なので、据え置きとしてコンクリートで直接打ち込んで製作されている。床も振動を防ぐ構造になっている。

図表3-29 趣味空間(KWT)

初期計画図類型	低価格型	TVH	YMU	TZW	TCD
(a) 初期計画図類型	付加型	KWT	SKM	KMT	MGM
(b) 初期計画図本格的な変換型		SMM	UKT		
(c) 新築型		TBR			

図表3-30 初期住宅からの派生のパターン内訳表

(b) 2世帯化

大湯村は農業の条件としては恵まれていることもあり、後継者に関してはあまり問題になっておらず、すでに多くの後継者が世帯を構え、入植者と共同で農作業を行っている。大湯村には新規の住宅地がないこともあり、後継者のための住空間は2世帯住宅として既存住戸に組み込まれることになる。調査した11戸のうち、2世帯が居住しているのは、KWT, KMT, TZW, TBRの4軒で、2世帯化に備えて空間を準備しているのがSMM, UKTの2軒である。これらは家族数も多いことから、住戸が大型化している。また、TBRは現在2世帯であるが、3世帯をも考慮した平面計画になっている。事例にはなかったが、同じ敷地内にもう一軒住宅を建設して2世帯化する例も村内では散見された。

住居が2世帯化する際の傾向として、住居の2世帯化には次の3つの傾向が指摘できる。

・従来通り部屋数を増やし、台所、浴室などは共有する。(KMT, TZW)

・既存に接続する形で、1世帯分の住居を増築する(台所、浴室は別)。

(KWT)

・既存も含め刷新し、新築する。(TBR)

(c) 趣味空間の追加

KWTは住戸に本格的な音楽スタジオを併設した例である(図表3-29)。職業が農業で季節によっては十分に時間がとれることもあり、趣味が本格化している人も多く、こうした趣味のための空間が住戸内に組み込まれることで、住戸の面積が増大している。TCDの場合は、収蔵庫を作り家族にとって思い出の物をいつでも手に取れる状態で保管しているほか、ホームコンサートを開くための部屋を作っている。

用途の変遷

実測調査をおこなった11例を初期計画からの派生で分類すると、

(a) 路襲型

初期計画が踏襲され、その延長線上的に拡張されているもの

(b) 抜本的変換型

初期計画に対して何らかの抜本的な変更が加えられているもの

(c) 刷新型

初期計画が全く刷新され、新規に作られているもの

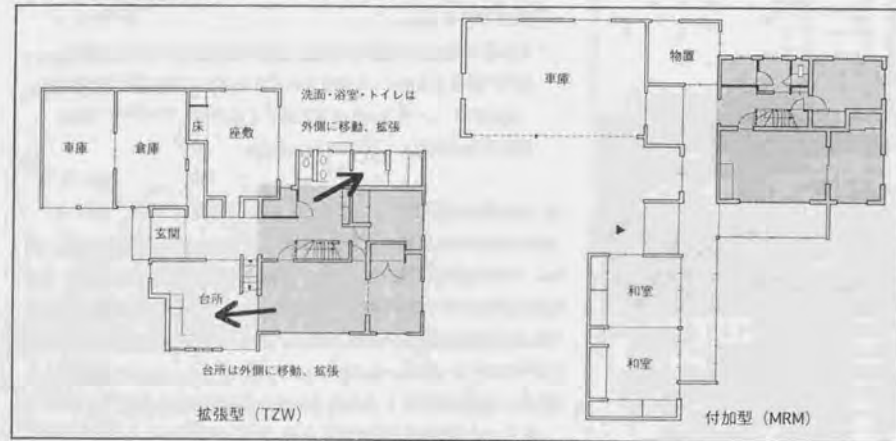
それぞれの内訳は図表3-30のようになっており、以降順に説明する。

(a) 踏襲型

調査対象のうち事例数が8例と、一番多いのが初期の入植住宅をベースにして、その平面計画を踏襲する形で増改築が行われるタイプである。踏襲型はさらに拡張型と付加型に細分できる。

まず拡張型の例である。TZWの平面の変化を見ると、台所、玄関、トイレ、浴室はそれぞれはそれぞれ外側にシフトし、面積が増加するなど充実しているが、位置関係には大きな変化が見られず、初期住宅の平面計画を踏襲する形で増改築が進行している。

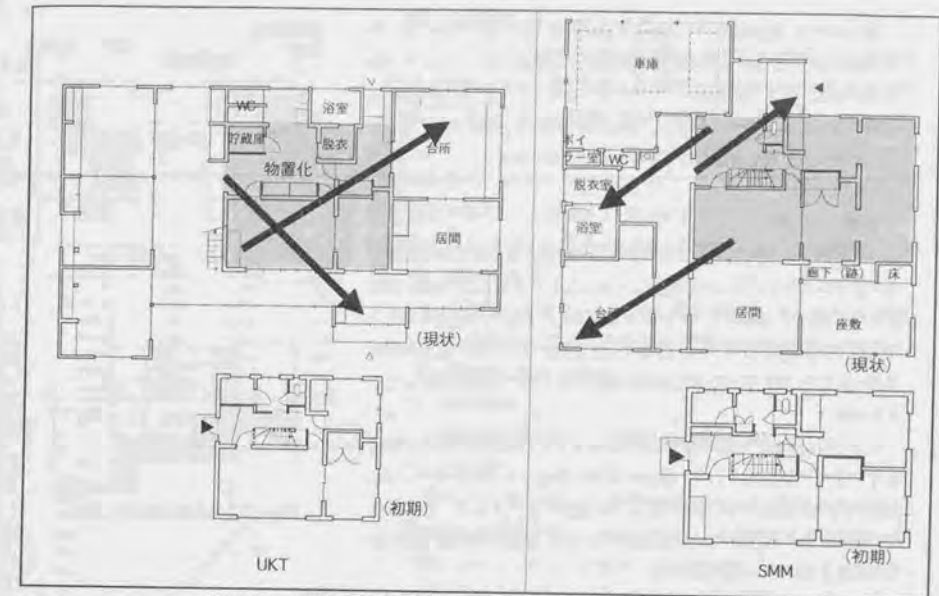
次に付加型の例である。MRMの場合、初期住宅の躯体は全く手つかずで残っており、西側に住戸を作り、その間の空間を玄関・縁側として新旧の両者を繋いでいる。このように初期住宅の横に単純に追加する形で住居の増改築が進められる場合もある。



図表3-30 踏襲型（1階部分、灰色部分は初期住宅部分）

(b) 抜本的変型

初期計画が増改築の途中で抜本的な見直しを迫られている例もあった。図表3-31の左はUKTの例である。階段は物置になり、台所と食堂は南から北へ移動、玄関は西から南に移動、北側には勝手口が作られるなど、初期計画と見比べると大幅な変化が読みとれる。図表3-31の右はSMMの例である。この例でも玄関が西から北へ移動し、もともと浴室だった部分が玄関に隣接した通路となっている。いずれの場合も玄関の位置が変化したことが、平面の大幅な見直しにつながっているといえる。



図表3-31 抜本的変型（1階部分の初期住宅と現在の比較、灰色部分は初期住宅部分）

(c) 刷新型

先述したように86%の住居で初期住宅が残っているため、全く刷新して新築した事例は少ない。調査した11軒でも新築した家は1事例しかなかった。TBRはその1事例である。この事例の場合、2世帯化され住居も大規模なものになっているが、住居の配置や敷地の入り方は、以前の住居の形式を踏襲している。これは方位や日照といった敷地固有の条件や、既存の庭の関係で入り口の位置が決まるなど、以前の住居の影響によって周辺の環境が変質しており、逆にそれに影響される形で新築の計画が行われるためであると考えられる。

ただし、この様に全く刷新してしまう場合は、建設工事中の住居が問題になる。このTBRの事例の場合は、知り合いのついでで村内の空き家を借り、そこが借りられる時期を待って建設工事を開始している。他には、敷地内の空居っている部分に空き地にプレハブなどの仮設住宅を設ける例や、格納庫に一時的に居住するなどの方法がある。KWTの場合は、増築工事中は既存部分に家族全体が移動して居住しているが、面積が足りなかったため、花壇だった部分に暫定的に仮設プレハブを建造している。

図表3-32は、航空写真による経年変化の観察（次章参照）から得られた事例である。住居の外構の位置の関係がある時期を経て、ちょうど地と図が反転するように裏返っているのがわかる。これは、新築する際に敷地の空いている部分に新築し、完成し新築部分に引越が完了してから、旧居部分を取り壊したのではないかと推測される。

緑側による接続

実測調査の事例では、ほとんどの住居で初期住宅の躯体が増改築部分に組み込まれるようにして現存していることがわかる。これは、敷地が十分に、新たに必要になった空間を初期住宅のまわりに付加する形で住居の増改築が進んだこと、初期住宅部分がブロック造で頑丈な構造であったため、取り壊すのが工法的に大変であったことが原因として考えられる。

以上2点を踏まえて増改築の変遷を検討すると、初期住宅部分と増改築部分を媒介する空間として、緑側が有効に機能しているのが分かる。SKMの場合、初期住宅の躯体は全く手を加えられておらず、増改築部分と初期住宅部分を媒介する形で緑側がつくられ、初期住宅の開口部を介して接続されている（図表3-33）。

増改築の順序

実測調査した各事例で住居の変遷を見ると、住居の増改築は

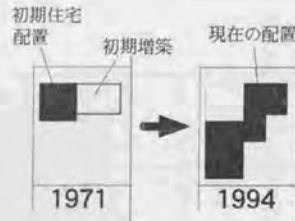
- (1) 入植直後の車庫等生活に必要な機能の増築
- (2) 量的な拡充を主眼とした増築
- (3) 機能の充実など質の向上に目を向けた増改築

という順序で進んでいるのがわかり、前節のアンケートによる量的な把握と共通の傾向が見て取れる。

3-5 増改築の動機と決定要因

増改築の計画性

図表3-34は、増改築を計画してから実現するまでに要した月数（計画した時期）—（実現した時期）である。半数以上が計画から実現までが1年以内で、増改築の計画が長期的な展望で行われているのではなく、場当たりの増改築がされている可能性が考えられる。



図表3-32 地と図の反転



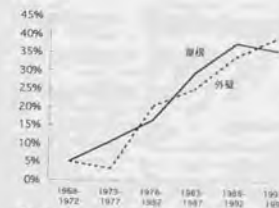
図表3-33 SKMの通路部分（灰色）



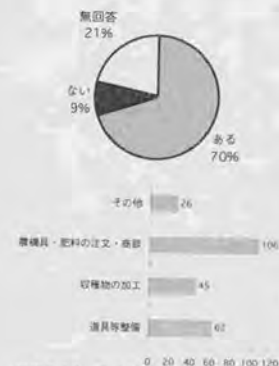
図表3-34 増改築の計画と所要期間

年度	世帯数	人口	1世帯当たりの人口
1970	360	1,640	4.32
1975	686	3,237	4.72
1980	706	3,334	4.72
1985	704	3,254	4.62
1990	711	3,268	4.60
1995	762	3,311	4.35
1999	1,003	3,411	3.40

図表3-35 大湯村の人口と世帯数



図表3-36 増改築における屋根・外壁の占める割合



図表3-37 家での仕事の有無（上）とその内容（下）

動機と決定要因

アンケートと、住居の変遷に関するインタビューを通して、増改築で住居を改編していく際の動機と決定要因が明らかになった。動機と決定要因としては、以下の要因が指摘できる。

家族数の変化

家族数の変化といった量的な住居欲求の変化は、増改築の強い動機となる要因である。変遷から見ると家族数の変化には以下の3種類がある。

(1) 家族呼び寄せ

入植当初は1家族だったものが、農業が軌道にのった後に、両親などの親族を呼び寄せ、そのための空間を追加する例。時期的には入植初期に多い。（TCD）

(2) 子供の増加

入植後子供が誕生し、子供部屋が必要になるなど。

(3) 2世帯化

図表3-35は村内の人口と世帯数の推移である（既出）。人口はほぼ横ばいの状態が続いているのに対し、世帯数はここ5年間で急増している。これは、入植第2世代が後継者として戻り、村内で家庭を構える例が増えてきたからであると考えられる。この世帯数の増加に対応して、大湯村の住宅の多くが2世帯化していることが考えられる。

メンテナンス

建築部材の老朽化に伴う住居の補修作業も増改築の動機の一つとなっている。アンケートで得られた増改築事例うち、屋根・外壁が対象となった割合の推移を追ったのが図表3-36である（既出）。屋根・外壁が対象となる割合は増加の傾向にあり、今後も増改築の大きな動機となり得る要因である。またこうした維持作業が、住居全体に何らかの加工を施すきっかけになる可能性も考えられる。

職関係の導入

入植後の初期時期の増改築で、職にまつわる機能（車庫、倉庫、作業部屋など）が住宅に求められる傾向に関しては先述したが、職関係の導入はこうした初期時期の増改築の動機となるものに加え、現在においても職の内容の変化が、住居に新しい機能の追加を促している。

図表3-37は、アンケートにおいて家での仕事の有無とその内容を問

たものである。回答者の70%が自宅でも仕事をおこなっていることが分かる。仕事の内容を見ると、道具整備、収穫物の加工といった倉庫や作業部屋、住宅外部の敷地を利用して行う作業以外に、農機具、肥料の注文・商談といったデスクワーク系の仕事が住居に多く持ち込まれているのがわかる。以前は収穫物はすべて共同の施設に収め、収穫以降の流通に関しては一切関与しなくてよい共同経営的な営農システムであったが、現在は米の流通のシステムも変化し、それぞれが個人で出荷・販売までを行う個人営業的な農業経営にシフトしており、今後はこうしたデスクワーク空間が住居に組み込まれていくものと考えられる。

生活の向上、充実、趣味化

職関係の導入も含め、新しい機能の追加が増改築の動機になる場合も多い。増築される新しい機能を、職空間の追加も含めて系統的に追うと、以下の3種に分類できる。

- (1) 職関係の機能など生活上必要な機能（Ⅰ期）
- (2) 接客空間など最低限の生活には必要無いが、一般的に必要とされる空間（(1)の充足後～Ⅱ期）
- (3) 趣味的な空間（Ⅲ期）

(3)の趣味的な空間にあたるのは、住居内に音楽スタジオを設けたKWTや、収蔵庫をつくったTCDである。

防風

大潟村は全くの平地で週りに風を遮るものが全くなかったため、防風林も十分でなかった入植当時は風が極めて強く、初期の住宅の増改築では風を考慮した事例が見られる。

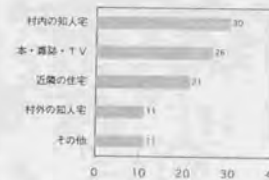
住区の北なので住宅の位置は考慮した。北西の風が強いので、西入りのタイプを選び、車庫を増築して風を防ぐことを考えて配置した（UKT）

住居以外の所有空間との関連性

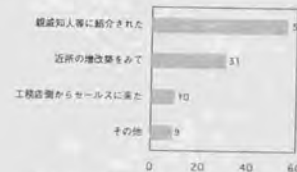
大潟村の居住者は、住居以外に格納庫、農舎を所有している。当初はこれらはそれぞれに明解な機能分け、役割分担がなされていたが、住居に職の機能が持ち込まれるのと同様、格納庫・農舎の機能も変容しており、それが住居におよぼす影響も考えられる。インタビューでは農舎に



図表 3-38 作業場化した車庫



図表 3-39 参考にした要素の有無（上）と内容（下）



図表 3-40 増改築工事を依頼したきっかけ

台所をつくり休憩室にしたというコメントもあった。

農舎の中に4畳半ほどの部屋を作って休憩している。食事はここでつくったり、持って行ったり。風呂を除けば生活できる環境。（TKD）

近隣の影響、技術のストック

図表3-39は増改築の際に参考にしたものの有無と、参考にしたものの内訳である。約半数が増改築の際に参考にしたものがあり、近隣や村内の住宅が多く参照されている。また、依頼する業者の依頼したきっかけも、親戚知人の紹介に次いで近所の増改築を見て紹介してもらうという事例が多い（図表3-40）。このように増改築のノウハウは工務店や近隣の増築手法の相互参照といったかたちで村内で蓄積している。特に、大潟村の住戸は共通の初期住宅をベースにして増改築が進められており、初期住宅がブロック造であるなど村外との違いも大きく、村内独特のノウハウが蓄積されていることが想像される。

流行

増改築の際に、近隣の住戸が参考にされることは先述したが、複数が増改築することで一種の流行になっていたものもある。

当時流行っていた車庫の2階の増築という形で、寝室と客間を作った。（TBR）

また、近隣を参照し、虚栄心をくすぐられてしまった例もあった。

元の家があまりこじんまりとしていたので反動で大きい家を作ってしまった。当時近隣の家も大きい家を作っていて、それを見ていた家族が「あそこ家は廊下が何間だった…」とか、大きくしろといったのでつい大きくしてしまった。（TBR）

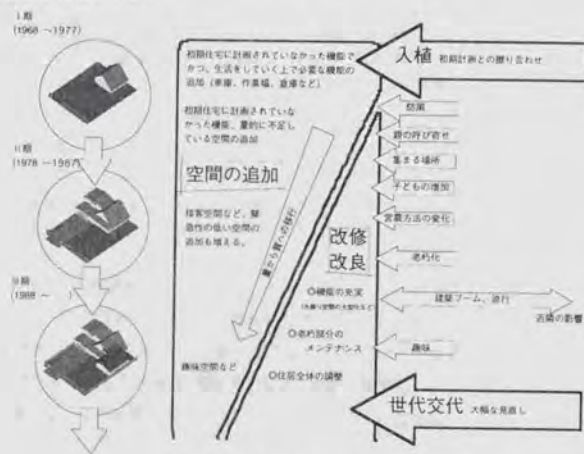
3-6 まとめ

大淵村の住宅は居住後に平均2.5回の増改築が行われており、一見初期住宅を壊して新築したように見える住宅の多くも初期住宅を増改築したものである。初期住宅は、増改築による平面計画の変更にも柔軟に対応しており、住宅の初期計画が以後の住宅平面を拘束する力は弱かったことがわかる。これは元々の初期住宅が最小限の大きさであり、多くの機能や空間が後から追加で取り付けられたことと、敷地に余裕があり、こうした増築に対して制限が少なかったことが理由として考えられる。

図表3-41は、時期毎の増改築の傾向と、その動機・要因を図式化したものである。入植時に作業場、車庫、倉庫などの職業空間の追加など住宅の初期計画で入植当初から矛盾が生じていた部分の擦り合わせがあり、以降は、居住者の住居に対する欲求の変化に合わせて住居に手が加えられていっているのが分かる。また、現在は世代交代などによる2世帯化という、現況の住居に大幅な変更を余儀なくする事態が起きつつあり、入植期の擦り合わせ以来の大きな改変期を迎えている。また、こうした世代交代のような大規模な見直しは今後も周期的に起きる事が予想される。

増改築を時期毎に見ていくと、不足の追加から内容・外見の充実へと移行し、量から質へシフトする傾向が見て取れる。

また、増改築のノウハウや技術が工務店や近隣の増築手法の相互参照といったかたちで村内で蓄積しており、こうした知識の共有・蓄積が、居住環境の持続に貢献している可能性や、大淵村様式でもいべき住戸形態を生んでいる可能性が指摘できる。



図表3-41 増改築の傾向とその動機・要因

4章：住区レベルの居住環境の変遷（街路景観の形成）

4-1 住区の初期計画	49
大淵村の住宅の構成	49
4-2 調査方法	50
4-3 経道の現状	51
4-4 街路景観の構成要素	53
4-5 (1) 宅地における住宅の位置と増築方向	53
住戸形状の傾向	53
住戸形状と接道方向	56
街路毎の住戸形状の収束	58
4-6 (2) 外構（住宅まわりの敷地）の使われ方	58
(a) 作業場化	58
(b) 農園化	59
(c) 庭園化	59
4-7 (3) 宅地と街路の境界状態	59
生け垣・堀	60
花壇	60
側溝	61
車庫	61
道の引き込みによる境界の曖昧化	61
4-8 街路景観構成要素の相互関係	62
4-9 街路景観の収束	64
奥配置型による街路景観（建物間）	64
奥配置型による街路景観（植木間）	65
近接配置型による街路景観	65
直交配置型による街路景観	66
4-10 面影とスカイライン	66
住戸残存（目視）	67
スカイラインの傾向	67
4-11 まとめ	68
大淵村特有の景観の醸成	68
デザインコードなきデザインコントロールの可能性	68
幾何形態がつくる景観の可能性	70

4章：住区レベルの居住環境の変遷（街路景観の形成）



図4-1 初期の街路

前章では住居に関して、増改築を中心に議論したが、本章では住戸外部の敷地から街路空間街路までの住区の居住環境に関して議論する。

図表4-1、4-2は大潟村の街路景観の初期と現在の状況である。同じ建物が規則正しく並ぶ、極めて均質な街路景観であったものが、30年が経過して、それぞれ異なった特徴をもつ街路に変化し、居住環境のアイデンティティの獲得に貢献していると考えられる。本章では、住居まわりの外構の使われ方を分析し、その組み合わせによって生まれる街路空間の個性化のプロセスを明らかにするものとする。

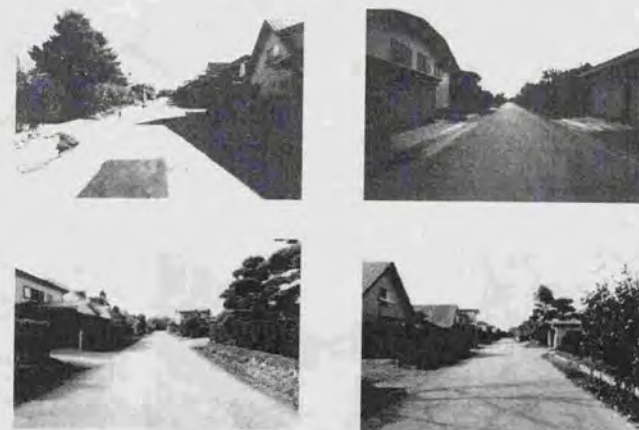


図4-2 現在の街路

4-1 住区の初期計画

大潟村の住宅の構成

大潟村の集落計画のうち、住区レベルで特徴的なものは以下の通りである。

- ・住区はセンターベルトを挟んで西に3住区、東に2住区配されている。南東の住区が矩形でないのは、ボーリング調査の結果、総合中心地の南東部と北部（居住区の外側）の地盤が良好でなかったため、そこを回避するためである。
- ・住区は500m×400mを単位として、150戸ずつ配置されており、これが1つの町になっている（図表4-3）。

- ・各住区（町）ごとに住区の中心に公民館と公園をもつ。
- ・住区はそれぞれ40～50戸の小ブロックに分けられ、住区のセンターベルトに接している1辺を除く3方向からループ上の街路でアクセスするようになっていく（図表4-4）。センターベルトに接している1辺にはセンターベルトに抜ける歩行者専用の緑道（未舗装）が設けられる。
- ・各住宅の敷地には背後に歩行者用の緑道が設けられ、表の街路と二方向からのアプローチが可能。
- ・歩行者は住宅背後の緑道から住区内の緑道を経由して中心のセンターベルトまで緑道づたいで行くことが可能のように計画し、歩車分離を実現（図表4-5）。
- ・隣接する住区同士が防風林を兼ねた緑地帯で分節されている。（図表4-6：防風林の有効範囲）
- ・住宅の三角屋根は赤、黄、青の3色があり、入植時期によって色が区別されている。

4-2 調査方法

住区レベルの調査で用いたのは以下の調査項目である。

アンケート：緑道の使い方

航空写真：住戸の配置状態とその変遷

実地調査：住区内の全街路の実地調査



図4-3 住区と小ブロック



図4-4 車道とループ状の街路

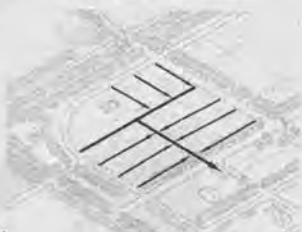


図4-5 緑道

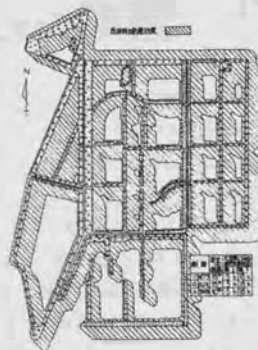


図4-6 防風林の有効範囲

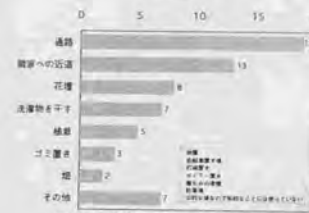
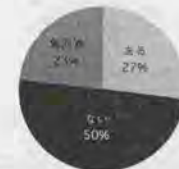
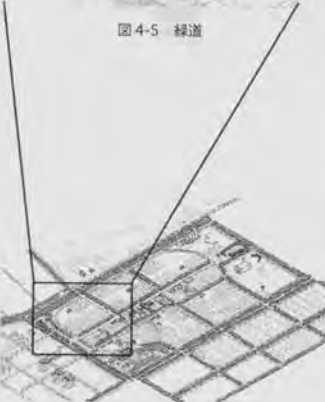


図4-7 緑道の利用の有無と利用方法

（註）1974年の川崎の調査でも緑道は歩行者専用道としては殆ど使われていないとされ、使い方として以下を挙げている。

- ・溝が掘られ、雨水の排水路として
 - ・家庭菜園の延長として
 - ・材木、肥料、砂利、ゴミ焼却用ドラム缶等の物置場
 - ・両側の壁に棒を渡し物干しとして
 - ・子供の遊び場
 - ・車の駐車場
 - ・ネットを延長して完全にふさいだり、竹簾、板柵の支え棒などにより歩行の障害になっているところもある。
- （川崎雅章「八郎湯新農村」に於ける道の使われ方」日本建築学会大会学術講演梗概集、1974年）

4-3 緑道の現状

図表4-7は現在の緑道の利用の有無と、その利用方法である。緑道を利用しているという回答は全体の4分の1であり、利用方法を見ても動線以外の使い方が、半数以上を占め、緑道が動線としては、有効に使われていないことが分かる。

実地調査時の観察でも、小ブロックと小ブロックの間の広い緑道の場合は、植栽、花壇、畑などに活用されている例が見られたが、通常の宅地と宅地の間の幅4mの緑道の場合は、建物と建物が背を向き合ったり、塀や生け垣に挟まれた残余空間となって、荒廃している例が多く、通路化している事例は見られなかった。（図表4-8）

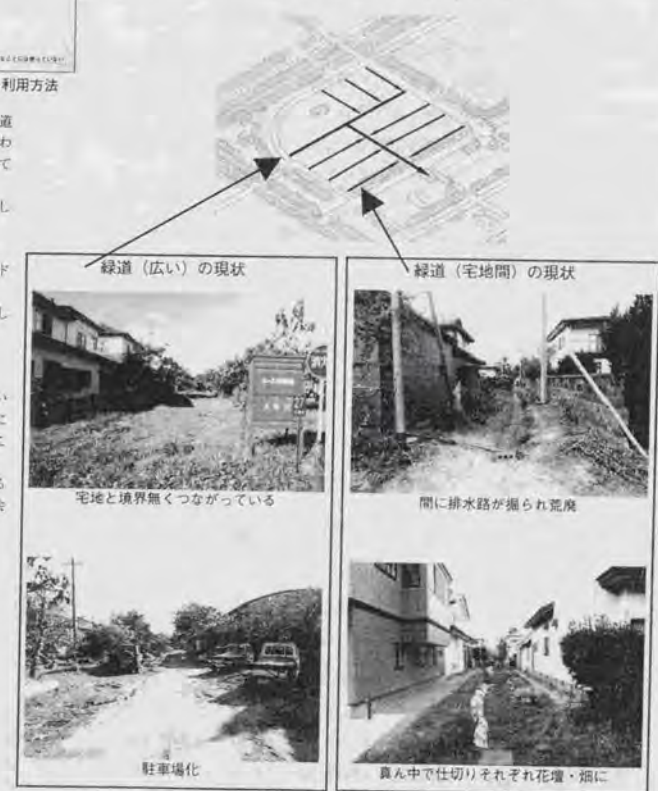


図4-8 緑道の現状

このように緑道は現在は動線としての機能を果たしておらず、裏庭と一体化している。二方向接道の歩行者用通路として計画された道が活用されなかった理由としてまず第一に考えられるのは、この緑道がルートとしてメリットを持たなかった点である。緑道を利用して移動する場合も、小ブロック毎に一旦車道を横断しなくてはならず、正確には歩車分離にはなっていない。距離的にもメリットがないことから利用の動機付けが低かったのではないかと考えられる。第二に、緑道としての幅が十分でなかったことも理由に挙げることができる。幅が狭いため、緑道に面する住戸が戸でも緑道に対して表出を行うと、通過が困難になり道として成立しなくなる。

ただし、緑道は動線としての役割は果たさなかったが、ガス、電気、水道といった配線・配管が緑道側から住居にアクセスしているため、マンホール、電柱などが表側に露出して街路景観に干渉することが避けられている点など、緑道の存在は、表の車道からの街路景観に少なからず好影響を与えている。また、緑道側がサービスヤード的な使われ方をすることにより、庭のおよび敷地のしっかりとした性格付けに役立っているといえる。

4-4 街路景観の構成要素

街路景観を決定付ける要因として、本章では以下の3点を分析する。

- (1) 宅地における住宅の位置、
- (2) 外構（住宅まわりの宅地）の使われ方、
- (3) 宅地と街路の境界状態、

また、以上3点の組み合わせで構成される宅地と、その配列で構成される街路の傾向を明らかにし、街路を歩行する際に体験される空間体験という側面から、街路景観の特微化について言及する。

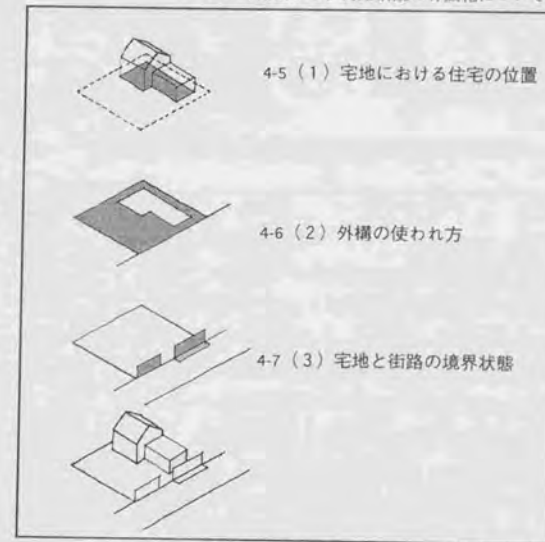


図4-11 構成要素

(註) 大湯村の住区の一部には、敷地が南北方向を正確に向いていない部分がある。今回の分析ではこれらの住区はデータからはずしてある。

(註) 初期の住宅の配置はそれぞれの居住者の選択に任された（第5次入棟を除く）。初期の住宅配置の傾向としては、道からのアクセスが東、西、南入りの宅地に関しては、庭を多く取り為に北より配置し、北入りの敷地では南庭と接道側の側の空間のバランスをとって、中央付近に住戸が配置された。

4-5 (1) 宅地における住宅の位置と増築方向

住戸概形の傾向

図表4-12は住宅の概形と配置、車庫・物置等の位置関係から、41通りの配置パターンを想定し、航空写真（1995年）（図表4-13）を用いて、大湯村の開拓住宅の敷地における建物の概形を分類したものである。考えられる41通りのうち25通りの住戸が確認され、初期住宅が様々なバリエーションに派生しているのがわかる。

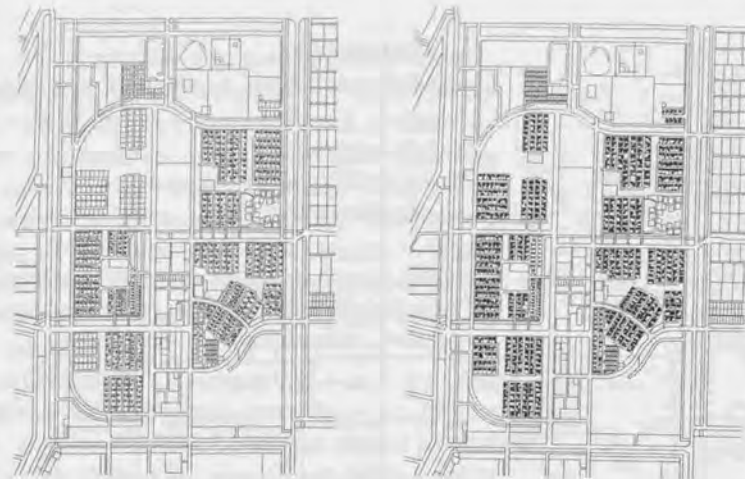


図4-13 航空写真より抽出した住戸配置（左：1971 右：1994）



図4-12 住戸形状のパターン（各図の右の数字は事例数）

以降に敷地の使い方として多く見られた2傾向について述べる。

(a) 南に広く

住戸の配置パターンの基本的な傾向として第一に挙げられるのは、住戸を敷地の北側に配することである。図表4-14は、住戸のパターンのうち、東西軸に関して線対称なパターン毎に頻度を比較したものである。敷地の北側に建物を配置する傾向が見て取れる。アンケートの「増改築時に考慮すること」でも、「日照」が主要な要因の一つになっており、南側に外部空間を確保するために建物が北側に配置される傾向になると考えられる。



図4-14 東西軸に対象な形態の事例数比較（各図の右の数字は事例数）

(建物西寄り) (建物東寄り)



図4-15 南北軸に対象な形態の事例数比較（各図の右の数字は事例数）

(b) 西を閉じる

次に住戸を南北軸に線対称な形態毎に比較したのが図表4-15である。建物が東側よりも西側に偏る傾向が見られる。

この原因として、まず考えられるのが、庭を敷地の南東側に持つてくる可能性である。これは、先述した建物を北側に配し庭を南側に持つてくる傾向と関連するものであるが、庭が南東にあった場合、庭に面した開口が南面もしくは東面することになり、西日を避けた日照が期待できる。

もう一つの理由として考えられるのは防風対策である。大湯村は元々は湖底で風をよける遮蔽物がない平地であるため、特に防風林が未発達であった初期の風は相当に厳しいものであった。風は北西方向からの吹き、この風を防ぐために建物を敷地の北西側に配置したと考えられる。

住戸概形と接道方向

図表4-16は、住戸の概形を大きく8タイプに分類し、それぞれの頻度を求めたものである。一番多いのがL型の配置、次いで敷地の半分ぐらいを用いた1型の配置である。大湯村は住戸の敷地の面積が広いこともあり、余裕のある配置がなされていると考えられる。

次に図表4-17は、敷地の接道方向毎に建物概形を頻度の高い順に並べたものである。接道方向によって、主流を占める住戸概形は異なり、接道方向で宅地の使われ方に違いがあることが分かる。



図4-16 住戸の概形を大きく8タイプと事例数

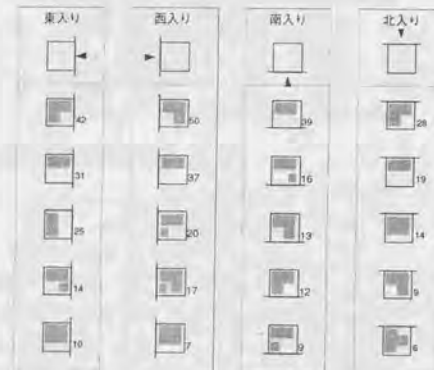


図4-17 接道方向毎の建物概形頻度

宅地の使われかたのうち、街路からの景観に与えるのは街路近傍の部分である。図表4-18は宅地の街路に面している部分を、住戸の接し方から4つの段階に分類し接道方向毎で頻度を比較したものである。

まず、東西軸方向の街路、すなわち南入りと北入りの宅地がならぶ街路では、道の左右（南北）で大きな違いがある。北入りの宅地がならぶ街路の南側は、多くの住戸が街路に対して近接する形で建っている。一方で、南入りの敷地が並ぶ街路の北側は住戸が街路から遠い位置にある。これは前述した住戸を北側に配置する傾向が原因であると考えられる。

図表4-19は実路調査で得た街路から見た住宅の位置を、街路単位で評価したものである。東西軸方向の街路では道の南側（北入り）は街路単位で見ても近接が大多数を占めており、北側（南入り）は住戸が街路から離れた位置にあるものが多く、宅地の使い方の違いが、実際に体験

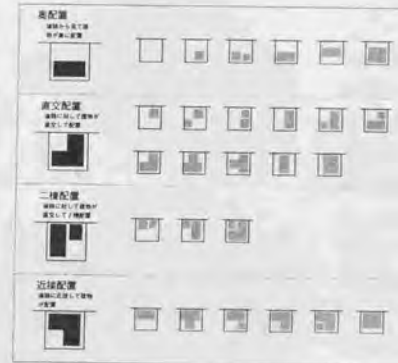
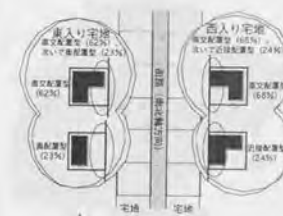
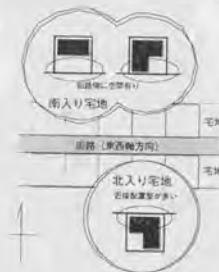
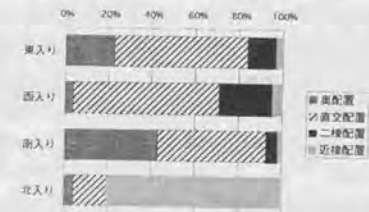
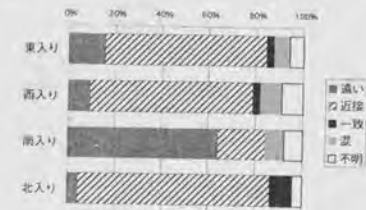


図4-18 建物の接道状態による4分類と街路方向毎の頻度

入り方	道と建物の関係	近接	一致	混	不明	総数
東入り	37	101	21	5		164
西入り	6	106	38	7		157
南入り	43	50	5	2		100
北入り	4	14	0	75		93
計	90	271	64	89		514



入り方	道と建物の関係	近接	一致	混	不明	総数
東入り	5	22	1	2	2	32
西入り	3	23	1	3	3	33
南入り	16	5	0	2	2	25
北入り	1	18	2	0	1	22

図4-19 道路から見た建物の位置（実路調査）
（一致は建物が完全に街路に接している状態）

街路毎の住戸概形の収束

図表4-20は、ある小ブロックの建物概形の経年変化を追ったものである。宅地の入り方、風の向き、方位等の諸条件が一致する一並びの小ブロックでは、このように各住戸の建物概形が似た形に収束する傾向がある。これは前節で述べた、住戸の増改築後の概形に接道方向毎の傾向があることを裏付けるものであり、こうした街路単位での建物概形の収束が街路景観の特徴化に関与していると考えられる。

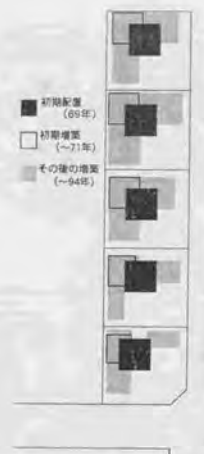


図 4-20 住戸の経年変化

4-6 (2) 外構（住宅まわりの敷地）の使われ方

住居まわりの敷地（外構）は、それぞれの住戸の変化や所有者の使い方によって大きく変化している。大潟村の1次入植者住宅の敷地面積は、500㎡であったが、2次入植以降は700㎡と改められた。これは、大潟村の初期の計画では機能の分化が徹底しており、住居の他に作業用の格納庫、家庭菜園用の敷地がそれぞれ計画されていたが、2次入植以降では住居と同一敷地に計画されることになったためである。いずれにしても面積的には恵まれた規模であるといえる。菜園として加えられた200㎡も現在では敷地の一部として菜園以外の用途で使われている例も多い。

外構の使われ方は大きく (a) 作業場化、(b) 農園化、(c) 庭園化、の3つに大別される。

(a) 作業場化

住居部分に持ち込まれた農作業のセクションが拡大し、外構においても主要素になる例である。玄関まで道が引き込まれ、それに接続する形で作業小屋、車庫などが建設されるが、その道の舗装部分が肥大化して作業場となり、天候の良いときに作物を日干しにしたり、駐車場に入りきらない車を置いたり、農機具を整備するときに使われたりしている。

街路に近い位置につくられ、出入りしやすいように、接道部分が広い。ため、街路から見るとそこだけ道が広がった形になる（図表4-21、4-22）。

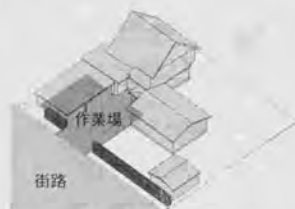


図 4-21 作業場化



図 4-22 作業場化した宅地

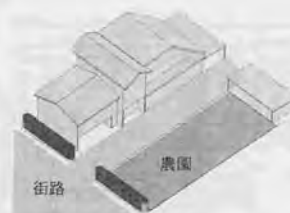


図 4-23 農園化

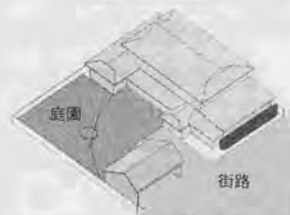


図 4-24 庭園化



図 4-25 庭園化した宅地

(b) 農園化

前述したとおり、2次入植以降の住宅では家庭菜園用の200㎡の土地が住居敷地に含まれているが、現実にはそこで農作業を行っている住居は少ない。理由として考えられるのは、プロの農家が細作をするには200㎡という規模が中途半端だったこと、現在は米作以外の農業も農地で行っており、わざわざ家で作る必要もないことなどが考えられる。

ただし希ではあるが、敷地が農園化している例もある。この場合農園は作業スペースと隣接し、日照の確保のため開放的になり、街路に対して開く形になる（図表4-23）。

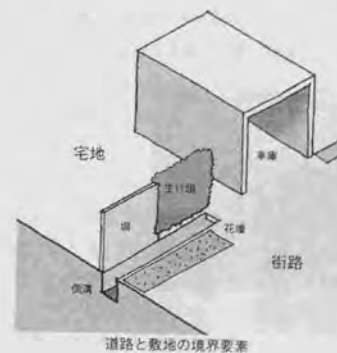
(c) 庭園化

庭の一部または全部が囲われ、趣味的な庭園となるもので、大きな庭石を搬入したり、池を造営した例もある。住居が庭に対して開放的なつくりになる場合も多く、視線を考慮して街路とは境界が明確になる。住居の形態も含め、「お屋敷化」ということもできる。（図表4-24、25）

以上、外構の使われ方を3類型に分けたが、これらの使われ方は、庭単体として独立しているのではなく、住宅や街路との相互影響で、その使われ方や街路との境界が決定づけられている。

4-7 (3) 宅地と街路の境界状態

ここでは、街路と宅地の境界付近で街路景観に関与すると考えられるのは、生け垣・塀、花壇、側溝、車庫、引き込みの5要素である。



生け垣・塀

図表4-26は実地調査で得られた宅地と街路を仕切る要素の数である。生け垣が圧倒的が多く、それに次ぐのが塀であり、フェンスが使われる例は少ない。また、近接配置型の配置などで、街路と建物が近接する場合も、そこが出入口でない場合は、街路境界と建物の間には、何らかの植栽が存在する。

塀を用いて閉鎖的に囲ってしまう例は、敷地が庭園化し、住居が庭に対して視覚的に開く一方で、外部からの視線を遮るためなどが考えられるが、敷地が充分広く、視線を明確に遮断する必要がないことも多く、比較的その例は少ない。



図4-27 塀



図4-28 生け垣

花壇

道の両脇には未舗装の部分が造られており、花壇が造られている住戸もある。図表4-30は、花壇の分布を示したものである。花壇の管理が各住区の自治会に任されているため、花壇の手入れ状況は住区毎で異なっている。また、居住者が独自で行っている部分も散見された。



図4-29 花壇

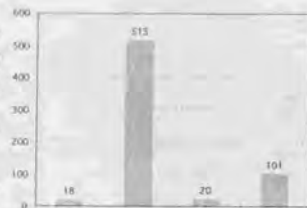


図4-26 宅地と道路を仕切る要素 (実地調査)

住区	花壇の状態	○	△	×	総計
西1-1	2	1	3	6	6
西1-2	6				6
西1-4		1	4		5
西2-1	3	1	2		6
西2-2	1		5		6
西2-3	1	2	3		6
西2-4			5		5
西3-1		1	3		4
西3-2	2		4		6
西3-4	1		3		4
東2-1			16		16
東2-3		1	6		7
東2-4	5	1			6
東2-5	8		2		10
東2-6			6		6
東3-1	6	1	1		8
東3-2	2	3	3		8
東3-3	7	1			8
総計	44	13	66	123	

図4-30 町毎の花壇の状態 (実地調査)

○：よく手入れされている

△：花はあるが手入れ悪し

×：荒廃

4章：住区レベルの居住環境の変遷 (街路景観の形成)

側溝

敷地と住宅の間の側溝は、街路によって蓋がつけられている場合と、各住宅のアプローチ部分だけ橋を渡すかたちで後は溝が露出している場合がある (図表4-32)。いずれの場合も、境界の状態をきめる上で重要な要素と言える。図表4-31は、宅地の入り方毎に側溝の状態を分類したものである。北入りは他よりも側溝に蓋がされている割合が高い。これは、北入りは近接型が多く、車庫が街路に直接アプローチする形になり、車庫の幅 (接道幅の半分近い場合もあり) だけ蓋がされることが、結果的に全体に蓋がされる所まで発展したと考えられる。

入り方	側溝の状況	蓋付	溝	無	総計
東入り	4	27			31
西入り	6	26			32
南入り	4	18	2		24
北入り	8	13	2		23
総計	26	92	4		122



図4-31 側溝の状態 (実地調査)



図4-32 蓋がされていない側溝 (左)

蓋がされている側溝 (右)

車庫

大岡村は気象条件もあり、車は住居に組み込まれた車庫か、家屋型の車庫に駐車され、外型の駐車場は見られない。近接配置型、直交配置型、二棟配置型の場合は、車庫は街路の近傍に配されるが、車庫が街路に直交タイプ (図表4-33) と、車庫が街路と平行に配され、宅地に街路が引き込まれるタイプ (図表4-34) の2タイプがある。車庫の入口が直接街路に向いているタイプでは、車庫のシャッターは開いたままの場合が多く、街路に対してアルコープ的な空間が接続する形になる。街路からは、車庫内部が見える形になる。車庫が街路と平行に配されるタイプでは、引き込まれた街路が、作業空間として、拡大する傾向があり、大きく街路に対して開かれた形になる。

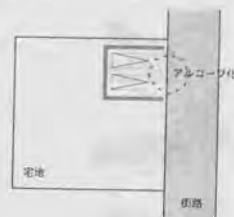


図4-33 街路直交向きの車庫



図4-34 街路と並行の車庫

道の引き込みによる境界の曖昧化

街路が敷地内に引き込まれ、街路と敷地の境界が不明確になる状態。先の作業場化にあるように、門扉を設ける例は少なく、街路に対して、開かれたかたちになる。前述した直交配置型はこのような境界をつくりやすい。街路からの見えとしては、道が広がったような感じを受ける。外部に対して開かれた形であるともいえる。宅地の外構が作業場化している場合にも見られる。

4-8 街路景観構成要素の相互関係

以上、街路景観の構成要素について、住戸の位置、宅地と街路の境界付近、外構の使われ方、の3つに分けて検討してきた。これらの要素の中には、関連があり同時に存在することが多いものや、同じ宅地では一緒に存在することが考えられないものがある。これらの要素のうち、関係があり同じ宅地でセットで存在する組合せを、2要因間が主従的なものと相互に対等なものに分類してまとめたのが図表4-35である。方角（宅地と街路の関係）で建物の配置が決定されることが、それ以外の要素にも関連しており、こうしたつながりによって景観醸成の方向付けが行われていると考えられる。

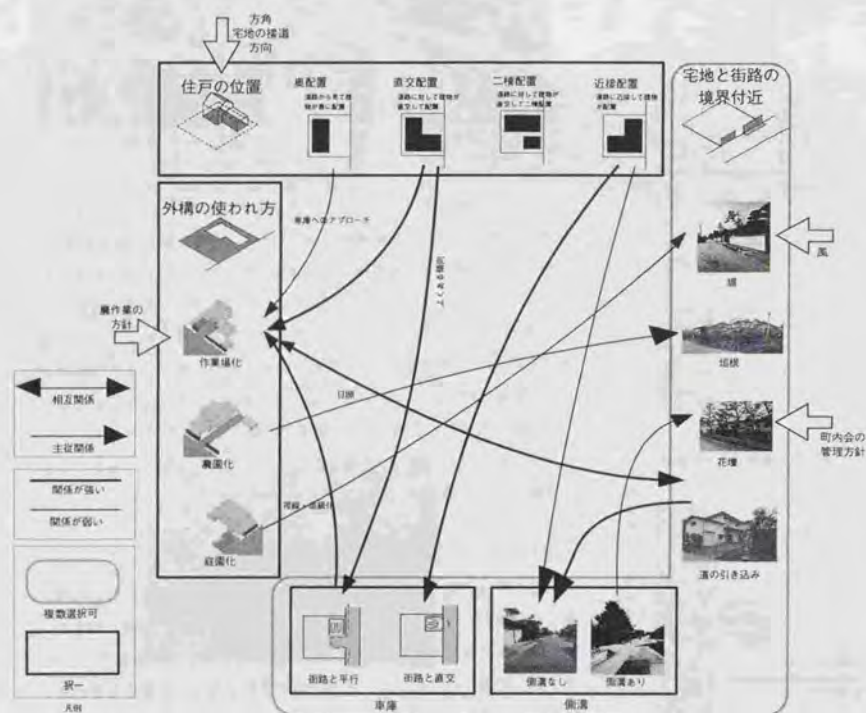


図4-35 関連する景観決定要素

逆に要素のうち、同じ宅地内で同時に存在しにくい要因の組合せをまとめたのが図表4-36である。これらの組合せも消極的な決定要因として、景観の方向付けに作用していると考えられる。

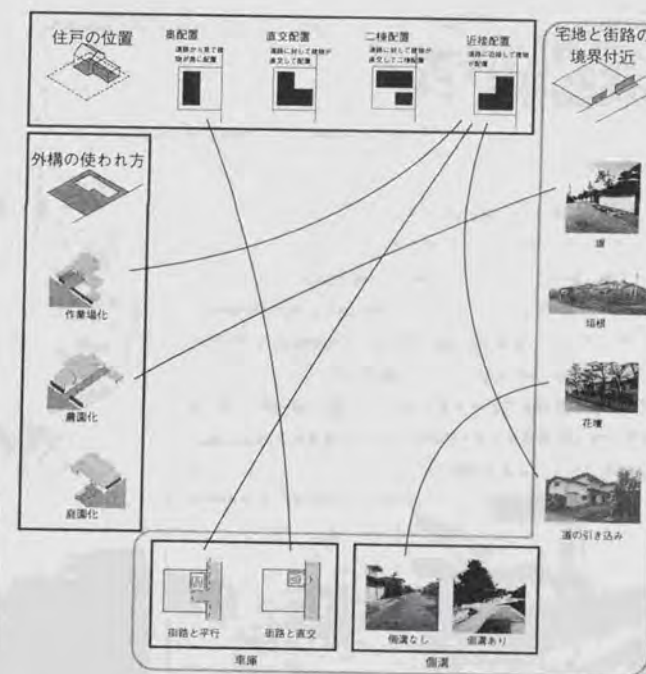


図4-36 相反する景観決定要素

4-9 街路景観の収束

前節では、街路景観の構成要因の相互関係もたらされる街路景観の方向付けについて考察した。ここではこうした方向付けによって生まれる街路景観の典型と考えられる以下の4例について、実例と照らしながら検証するものとする。

- (1) 奥配置型による街路景観（植木関与）
- (2) 奥配置型による街路景観（建物関与）
- (3) 近接型による街路景観
- (4) 直交配置型による街路景観

	住宅の位置	外構の使い方	宅地と街路の境界				
			生け垣・塀	花壇	側溝	車庫	引き込み
奥配置型（建物関与）	奥配置型	—	生け垣	—	—	—	あり（細い）
奥配置型（植木関与）	奥配置型	庭園化（緑豊満）	生け垣	—	—	—	あり（細い）
近接配置型	近接配置型	—	なし	—	溝	道路に直交	なし
直交配置型	直交配置型	作業場化	—	—	溝	道路に平行	あり

図4-37 奥配置型による街路景観（建物関与）

—：街路景観に特に関与せず

奥配置型による街路景観（建物関与）

建物が街路から見て、奥に配される奥配置型によってつくられる景観で、街路が宅地に南面する南入りの宅地（東西軸の街路）に見られる景観パターンである。建物は奥におさまリ、街路に面して庭や畑が配されることがになり、街路からの見えには垣根や塀、宅地内部の植栽が関わり、その背後に建物が垣間みえるという景観になる。

また、車道が奥の車庫まで引き込まれることになる。直交配置型に較べると、車庫の前の作業場は宅地の内側に配され、車道の引き込み幅はそれほど大きくならない（図表4-38）。

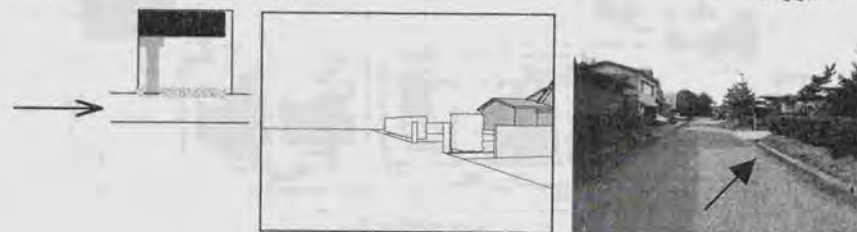
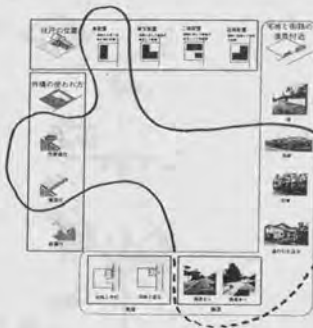


図4-38 奥配置型による街路景観（建物関与）



4章：住区レベルの居住環境の変遷（街路景観の形成）

奥配置型による街路景観（植木関与）

上と同じ、奥配置型でつくられる景観であるが、敷地内が庭園化するなどして植栽が視野に大きく入り、奥に配置された建物が景観に関与しない場合である（図表4-39）。

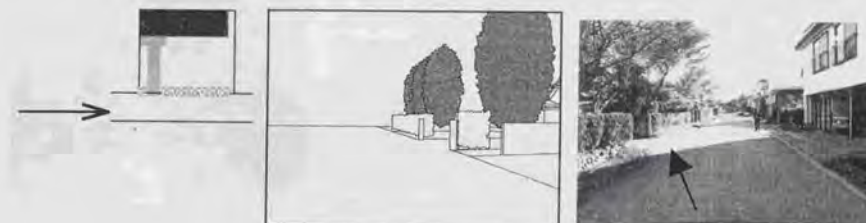
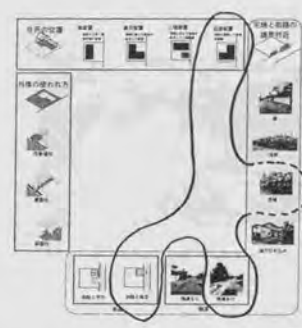


図4-39 奥配置型による街路景観（植木関与）



近接配置型による街路景観

敷地に対して街路が北側にある場合（東西軸）に多く見られる配置である。街路に近接する形で住居、車庫が配置され、敷地境界における車のアプローチの幅が広がる。街路からの見えには建物が大きくからんでくる。車庫が道に直接つながる形となり、シャッターが閉じられないため、アルコープ状の空間が街路に接続する形になる（図表4-40）。

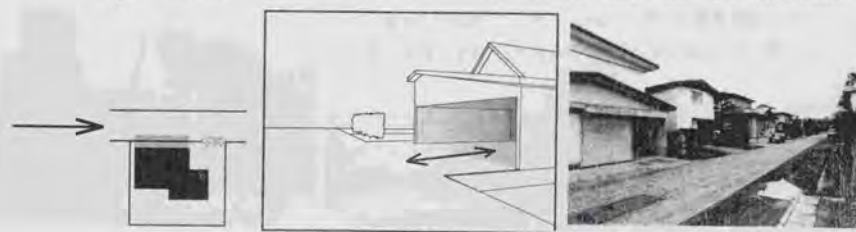


図4-40 近接配置型による街路景観

直交配置型による街路景観

敷地の接道面に直交する形で建物が配置される形で、街路が敷地の東または西側にある場合（南北軸の街路）に多く見られる。車庫が街路に対して平行に配置される場合は、敷地内に街路が引き込まれる形になり、街路に対して開かれた作業場となる場合が多い。街路からの見え方としては、車庫は進行方向の視線に対して、引きがあり、遮るものがないため、街路景観に大きく絡んでくる要素である。進行方向によって、作業場を介して車庫の内側が見える場合と、車庫の裏側が見える場合があり、印象が大きく異なる（図表4-41）。

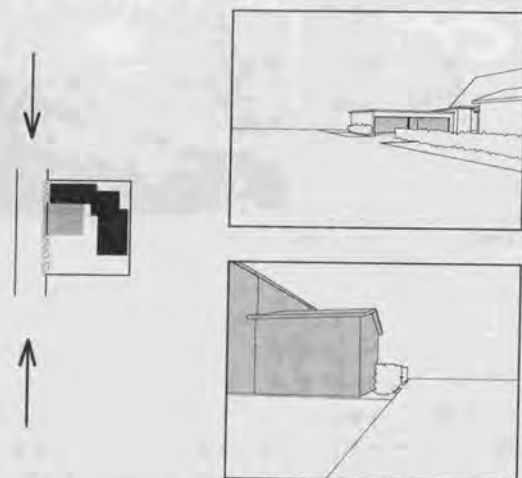


図4-41 直交配置型による街路景観

4-10 面影とスカイライン

以上、宅地の入り方と、建物の増築傾向、それによる街路境界の状態を中心に住区の街路景観を分析してきた。これらは、経年的に蓄積されることで、大淵村村内の各街路の景観を特徴付け、差異化してきた要因である。

一方、初期から存在し、大淵村独特の街路景観を形成する要因としては、入植者住宅がある。これは増改築を経てその痕跡がだんだんと薄まっていくものであるが、三角屋根の初期住宅は大淵村特有のものであり、村外他地域の景観と差異を生む要因として重要であると考えられる。



ほぼ原型で残る初期住宅



入り方	住戸数	増改築された初期住宅の残存	比率
東入り	200	84	42%
西入り	214	75	35%
南入り	125	61	49%
北入り	111	48	43%
計	650	268	41%

図4-42 初期住宅の残存（実証調査）



図4-43 増築に組み込まれながら面影を残す初期住宅

入り方	面影	平面	源	総計
東入り	6	14	10	30
西入り	12	9	11	31
南入り	10	7	2	19
北入り	13	3	3	19
総計	41	33	26	99



図4-44 スカイラインの現状（実証調査）

初期住宅は南北方向の道（東入り、西入り）では平面を、東西方向（南入り、北入り）では面影をそれぞれ道路に対して向けて配置されていた。



住戸残存（目視）

図表4-42は実証調査で確認できた初期住宅の数である。約41%の住戸で、初期住宅の面影が確認されていることになる。アンケートでは、86%の住居が初期住宅が残存していると答えたが、実際は増改築部分に埋没している場合も多く、それよりも率こそは低い。30年経過した後にも、その形態は村内に点在していると言える。

スカイラインの傾向

初期住宅のデザインの残り方として、初期住宅の残存以外に考えられるものとしてスカイラインがある。図表4-44は、街路毎にスカイラインを概観し、宅地の入り方毎に分類したものである。

現況では東西方向に関しては、現在でも妻型がスカイラインの多数を占める場合が多く、スカイラインは初期の形態を継承しているといえる。この理由としては、北入り住宅はもともと、初期住宅が街路に近い位置に建てられており、増改築が街路方向にはあまり行われなかったため、初期住宅のスカイラインが継承され、南入りは初期住宅は街路から見て奥に配置されており、そのまま奥配置型のように増改築された場合は、スカイラインは妻型になるが、街路側に増改築が進む場合は、平型になる可能性があり、北入りより、南入りが妻型の割合がやや低い原因になっていると思われる。

一方、南北街路に関しては、東入りでは平型が多いものの、全体としては、妻型と平型が混在しており、東西方向ほど明確なスカイラインの継承は見られない。これはまず、いずれの場合も街路側には増改築部分があることが多いことが原因と考えられ、特に西入りは、近接型の様に、街路側前面に住戸が来る場合が多く、これが、さらにスカイラインを多様化している一因であると考えられる。



図4-45 山型のスカイライン

4-11 まとめ

大湯村特有の景観の醸造

3章で見たように大湯村の住宅は極めて頻繁な増改築が行われており、それぞれの増改築は個人の裁量で自由に行われているにも関わらず、増改築にはある一定の規則性が見られ、街路景観は乱雑化に向かうのではなく、いくつかのパターンに収束する方向にある。こうした経年的な蓄積と初期住宅の残存が醸し出すものによって、大湯村独特の街路景観が醸造されているといえる。

また、こうした計画的で無機的に配された街路空間は郊外住宅地、ニュータウンといった居住環境の典型的な空間であり、これらの均質な景観が、特徴を持った景観に醸造していく点は郊外型の街路景観の醸成の可能性を示唆している。

デザインコードなきデザインコントロールの可能性

現在、帰属意識を持たせる街づくりの手法として、デザインコードを用いた景観のコントロールが盛んに行われている。図表4-46は、アメリカのある住宅地で用いられている住宅建築、改築に関わるデザイン上の規定の一部である。窓枠のデザインまで実に細かく取り決められているのが分かる。

こうした、デザインコードを用いた街路景観のコントロールの問題点として以下の2点を指摘できる。

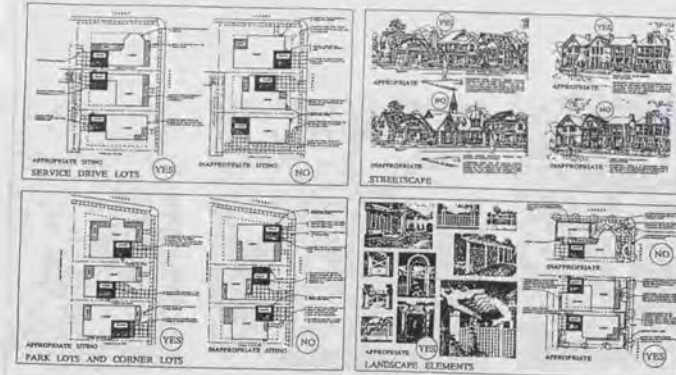
(1)バリエーションの限界

デザインコードのバリエーションにも限界があり、街路景観を誘導的にコントロールした結果、どこかの住宅地も「デザインされているが似たような住宅地」という状況に落ち着くのではないかと。

(2)デザインコードの鉄の檻

居住者に帰属心を与える、美観を整え良好な居住環境を整える、といった生活の質の向上を本来的な目的としているはずのこうした規定が、逆に必要以上の外見整備の負担をかけたり、生活上の様々な制約を生んだりすることになる「デザインコードの鉄の檻」とでもいうべき状況が生まれる可能性がある。

大湯村は計画時より、デザイン的な指標が示されことなく今日を迎えたが、住居の増改築が進み、街路毎に住居の配置傾向が似てくることで、特徴をもった街路景観が醸成されるのがわかる。このことは配置計画による誘導的な景観の特徴化の可能性を示唆しており、デザインコードなどの規制によらない計画手法として興味深い。

SITE CHARACTERISTICS AND PLANNING PRINCIPLES
SINGLE FAMILY HOMES

SINGLE FAMILY HOMES



SUPPLEMENT TO HARBOR TOWN DESIGN GUIDELINES
DEVELOPER: ISLAND PROPERTIES ASSOCIATES

図4-46 デザインコードの例（戸谷英世「アメリカの住宅地開発」より）

幾何形態がつくる景観の可能性

図表4-47は航空写真から採取した東京の郊外住宅地における幾何形態である。大崎村は縦長のブロックが並ぶ住区構成であったが、ニュータウンでは、円弧、グリッド、雁行、コンタラインに合わせた彎曲道など、いくつかの街路パターンに則った敷地の配列法則が存在する。こうした幾何的な配置法則で構成で作られた街路空間も、今回のケーススタディと同様に、ある収束する景観パターンを持っている可能性がある。

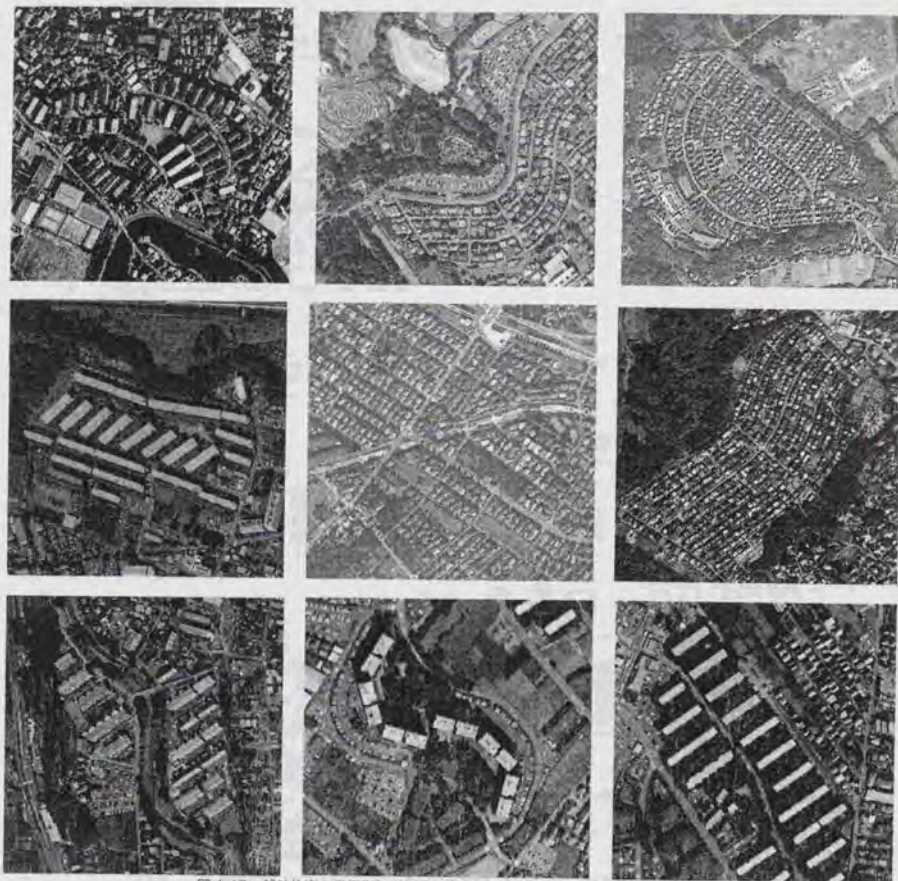


図4-47 郊外住宅の幾何形態（西武新聞社「空から東京一多摩」より）

5章：地域レベルの居住環境の変遷（特徴のある場所の誕生）

5-1 地域の初期計画	71
総合中心地の計画	71
ベリーの近隣居住区との比較	74
一般的な居住者の村内所有地	75
計画の現状とその要因	76
5-2 調査方法	77
5-3 記入マップからみた活動領域	78
広範な活動領域（村外の活動領域）	78
車社会化による村内施設の変質（自立型からネットワーク型へ）	78
徒歩圏（村内の活動領域）	80
5-4 村内の交流活動	84
72の村内サークル	84
サークル参加態度の二極化	85
サークルに参加するきっかけ	85
サークルの拠点は公民館	85
情報流通の場としてのサークル	86
「組織なかの人間」におけるサークル活動	86
選択的な行事の参加	87
5-5 個人の場所展開（ケーススタディ）	88
サークル拠点型	88
村外重視型	90
二代目	92
5-6 場所の特徴付け	94
5-7 地域に蓄積される知識	100
「地域の智慧」としての情報の共有	100
地域に蓄積された情報から生まれるあたらしいつながりや場	101
5-8 まとめ	102
核を持った広域化	102
行動圏と軸性	102
全員参加から同好の士へ	102
アイデンティティのある場所へ	103
記憶装置としての地域、地域の知恵の蓄積と活用	103

5章：地域レベルの居住環境の変遷（特徴のある場所の誕生）

本章では、居住者による場所の使い方に注目し、村内の各所が居住者によって意味付けられ、特徴のある場所になっていくプロセスから、地域レベルでの居住環境の変遷について考察するものである。

5-1 地域の初期計画

大潟村の生活に関わる施設のはほとんどは、総合中心地に建設されているため、ここでは総合中心地の計画を中心に述べる。

近隣地域との関係

まず総合中心地の場所がここに決定されたのは、

- ・干拓した湖底内では標高が高い位置であり、地盤が砂地で安定していたため。
- ・秋田から離れた湖北地域の振興策

2点が理由だとされる。

また、地区内主産業と関連部門を想定する際には、図表5-1の様に秋田市、能代市、男鹿市の3都市を結ぶ三角形の中央部に存在するという地理的条件と基本的な生活活動および生活活動の圏域はこの3都市内部でおさまり、二次的都市機能を有する琴丘町、八郎潟町、男鹿市船越などの町で実際の生活活動の外縁部は吸収されてしまうであろうという基本的な概念から出発している。

総合中心地の計画

総合中心地の計画に関して特徴的なのは以下の通りである。

■機能の分離（ゾーニング）

総合中心地は、居住区、公共施設区、農業生産施設区の3つに区分されている。区分は総合中心の中央南北軸に幅200mのセンターベルトを設け、そこを公共施設区とし、両脇を居住区とし、南側に農業生産施設区を設けた。

センターベルトを中心とした総合中心地案が作成されたのは、1964年からであり、この頃から村内の集落を1つに集約するという計画が有力となっている。農業生産施設区は幹線道路からの位置関係と、恒風方向（夏：南東、冬、北西）から南端に設けることとなった。また、1964年に地盤ボーリング調査を行い、詳細な位置関係の検討を行っている。

■センターベルト

総合中心地の中央に南北軸を通り、幅200mの公共施設を集めたセン



図 5-1 地域図概要図
〔「八郎潟新農村建設事業誌」p561より〕

ターベルトを計画。

ベルトの内部の配置計画に関しては、北に「静」的な施設（墓地、運動公園）、南側に下るにしたがって「動」的（サービス業務、観光）になるように配置計画がされたとしている。

センターベルト上の各施設の規模に関しては第一次入植者が入植した1969年まで集落を1つにまとめるかどうか流動的だったことや、1戸あたりの作付け計画面積が拡大していく一方で入植予定者数が減ったといったこともあり、明確な数値目標を設定できずに規模が決定していった部分も散見されるが、1000戸前後を想定した段階で計画が進んでいる。

■歩車分離

各住戸には、ループ状にアクセスする車道以外に緑道がつくられ、緑道づたいでセンターベルトまでアクセスできる歩行者道（未舗装）が計画された。

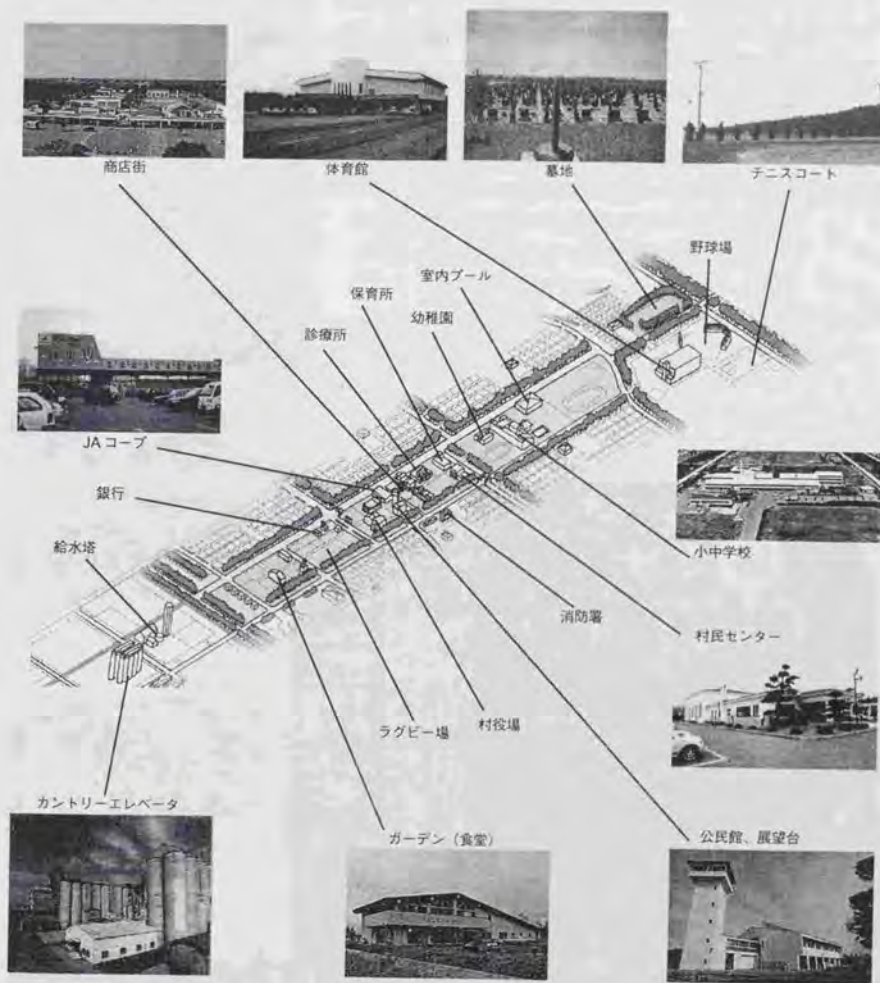
■ラドバーン

住区内の街路は村内を周回する道路からループ状にアクセスしており、住区内の通過交通はない。また、村内の道路も村外へ出る幹線道路とははずして計画されている。

詳しくは4章参照



図表 5-2 総合中心地



図表 5-2+ センターベルト

ペリーの近隣居住区との比較

大岡村の総合中心地に、ペリーが「近隣居住区論」で述べている中心部から2分1マイル（約800m）の距離を当てはめたのが図表5-3である。大岡村の規模はちょうど近隣居住区に一致する規模であると言える。

また、千里ニュータウンで採用されている「共同居住区」は、近隣居住区の上位単位であり、大岡村の居住区はそれよりも一回り小さい大きさでまとまっていると言える。

（註）ペリーは「近隣居住区論」の中で「よく計画された都市では、すべての商品をそろえた地域の店舗が集まっている業務地区に通うのに、住民を2分の1マイル以上歩かせる必要はない。」（p.9）と述べている。このペリーの近隣居住区は学校区を中心とした徒歩圏である。

（註）大岡村と同時期に計画された千里ニュータウンでは、住宅地の計画単位として、近隣居住区の上位単位である「共同居住区」を用いている。これは、商業核を中心とした徒歩圏（約1Km）を日常生活圏とするもので、日笠暲の学位論文「住宅地の計画単位と施設の構成に関する研究」（1959年11月）の提案を下載きとしている。（片寄俊秀「実験都市」による）



図 5-3 ペリー近隣居住区との比較

5章：地域レベルの居住環境の変遷（特徴のある場所の誕生）

一般的な居住者の村内所有地

大岡村で農業を営む一般的な居住者は村内に以下の所有地を所有している。（図表5-4）

- ・自宅：1次入植者は500㎡、2次入植者以降は700㎡
- ・家庭菜園：1次入植者は500㎡、2次入植者以降は300㎡。育苗に利用。
- ・農業用格納庫：農業機材の収納。
- ・圃場：1戸あたり15ha。追加で増反された5haを含むため、農地が1ヶ所ではなく、数カ所に分かれている場合もある。
- ・農舎：圃場にあり、大型の農耕機や休憩小屋に利用。



家庭菜園



農業用格納庫



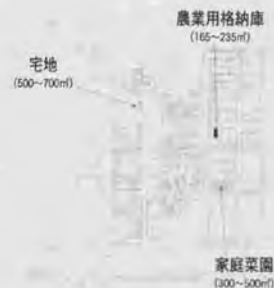
農業用格納庫内部



農舎



圃場



図表 5-4 村内所有地の一例

計画の現状とその要因

大湯村の施設の配置や機能、使われ方は、初期計画と比較して異なる点も多い。社会的な変化で、大湯村の総合中心地の現在の使われ方に影響を及ぼしたものとでは以下が考えられる。

■営農方法

職関係のゾーニングの変化に大きな影響を与えたものは営農方法である。入植時は栽培方法も直播きによる米作を想定していたが、上手くいかず農法を従来の方法に戻している。そのため、当初は計画していなかった苗床のための用地を格納庫群の横に新設した。また、当初は6〜12戸のグループで行っていた農作業も徐々に個別化し、それぞれが独立して農業を行うようになった。これは格納庫の個別化を進めるとともに住居部分に農機能の一部が派生し、組み込まれた一因にもなっている。

職機能の変化には流通方法の変化も大きく関わっている。初期は収穫された作物は全て共同のカントリーエレベータ（サイロ）に収納され、一括して精米出荷されていたが、現在は個人で出荷までの作業を行っている農家もあり、これらの施設と同様の機能が格納庫地域に点在し、格納庫地域は当初よりも高密度化が進んでいる。

■車の普及

大湯村の集落計画は周回道路など、もともと車利用を想定したものであったが、近隣地域の車社会化が進むにつれて村内の集落計画にも変化が見られた。初期の計画では日常生活に必要なものは総合中心地に設けられた商店で完結するように店舗が誘致されていたが、現在は村の周辺の幹線道路にも郊外型の大型店舗が多く誕生し、そういった郊外店舗に週に1〜2回車で行き、日常生活用品をまとめ買いするという事例が見られる。一方、村内にも郊外型の大型店舗やホテル、温泉、植物園など、村外からの利用者を当て込んだ施設もつくられている。もともとは、衛星都市のような自律的な地域計画でつくられた大湯村の各機能も、現在は広域な周辺地域との関係性で成り立つように変化している。

■世代構成

多くの新興住宅、郊外住宅に較べて、大湯村は世代構成の偏りが少ない。これは、入植時に世代のばらつきがある程度あったことと、入植第二世代が農業を後継する例も多く、若年人口が途絶えずに追加されていることが理由として考えられる。従って、ある特定年齢層の増減が原因で施設の内容変更、統廃合などが迫られた例はない。ただし、入植第一世代が引退し、高齢者のための居場所の需要が生まれつつある。ふるさと創生1億円基金でつくられた温泉を手がかりに高齢者施設がつくられ、バスによる送迎なども行われている。



図5-5 格納庫群（「新農村の歩み」より）

（註）車による行動圏。地域の施設の変化は5-3で詳しく述べる。

5章：地域レベルの居住環境の変遷（特徴のある場所の誕生）

5-2 調査方法

調査事項のうち、地域レベルで用いたのは以下の4点である。

(a) アンケート

アンケートのうち、本章に関連するのは以下の4点である

- ・年間の恒例行事の参加状況：大湯村の恒例行事のうち、11行事を選び、参加の程度を5つの選択肢から選択。
- ・開村以来の出来事の記憶状況：開村から現在までに村内で起こった出来事を16選り、その出来事の認識を4つの選択肢から選択。
- ・サークル活動への参加の有無と参加したきっかけ。
- ・サークル活動の拠点。

(b) 自由記入マップ

アンケートの際に、図表5-7のような自由記入式の調査用紙（各住戸3枚づつ）を配布。大湯村の総合中心地の地図に村内の場所に関して自由に記入（註）。

(c) 村報

開村時から現在までの大湯村の広報（初期は隔月）を通読し、起こった出来事や、暮らしぶりを反映した記事を抽出。

(d) インタビュー

村での生活や体験についてフリー形式でインタビュー

（註）地図に記入を求めた項目は以下の通り

村の中で目印になっているもの
村の中で気に入っている場所
昔（現在）の遊び場所
サークル等趣味活動の拠点
日常的に利用する場所
よく行く知人宅
日用品を購入する場所
格納庫
仕事で行く場所
趣味などで利用する場所
毎年（毎月）恒例で行く場所
維持・運営に関わっている場所
思い出深い場所
知らなかった所
知っているが行ったことのない場所
徒歩で行動する範囲

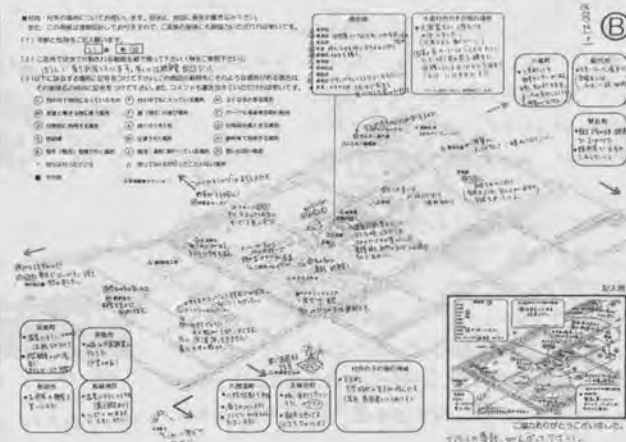


図5-6 アンケート回答例

5-3 記入マップからみた活動領域

ここでは、自由記入方式の地図アンケートの回答を中心に分析を進める。

広範な活動領域（村外の活動領域）

購買活動を中心とした商店の利用状況をみると、ほとんどすべての人が、村内の商店を日常的に利用しているほか、よく利用する施設に村外の商店をあげており、車を利用することによって、村内にとどまらない選択肢数の多い広範な活動領域が浮かび上がる（図表5-8）。アンケート・インタビューより得られた、周辺地域の使い分けの動機は以下の通りである。

- ・サービス：品揃えがよい、趣味の品、安い所でしか手に入らないなど、商店の魅力による選択。
- ・ついで利用：取引先がある、子どものけいこ事の間に買い物ができる。
- ・距離：インターが出来てアクセスしやすくなった、能代の方が近い、畑から近いなど。
- ・時間帯：夜開いているのはここなど。
- ・評判・口コミ：ここの医者がいいと聞いたからなど。

車社会化による村内施設の変質（自立型からネットワーク型へ）

こうした車を利用した活動領域の拡大の背景にあるのは、周辺地域の車社会化である。大岡村は計画の段階で車の利用を前提とした地域計画（通農式、ラドバーンなど）が行われていたが、周辺の幹線道路にロードサイドショップ、郊外型大型店舗（ジョイフルタウン）などがつくられ（註）、大岡村が周辺地域も含めた車社会圏に組み込まれることで、広域な活動領域の中から商店、施設を選択的に利用することが可能になっている。

また、大湯村村内の施設はもともとは、商業施設も含め村内の利用を想定し、そこで一定の生活が完結する衛生都市のような地域計画がなされていたが、村内からの利用を想定した施設がつくられるなど、広域な周辺地域との関係性で成り立つように、機能が変化している。

このように大潟村の村内の施設は、自立型からネットワーク型に変質したと言える。行動圏に関しても、広域化していると言えるが、一般の郊外化やエッジシティと異なり、村内(徒歩圏)に通りの施設があり、核を持った広域化と言える。

(註) 小田によるとロードサイドショップは1970年代に誕生し、80年代に急速に普及した。
(「＜郊外＞の誕生と死」より)



温泉

ホテル

物産センター

バイオミックスガーデン

(植物園)

村外の利用を見込んだ施設は、初期の計画で想定されていなかったことと、幹線道路の近くに配する必要があるため、従来の施設が集まるセンターバルト以外の所に位置している。

図表 5-7 村外の利用を意識した施設



図 5-8 アンケート地図から得られた村外の利用 (1:50,000)

徒歩圏（村内の活動領域）

センターベルトと徒歩圏

アンケートでは、地図に自分が普段徒歩で移動する範囲を記入してもらった形式で徒歩圏を調査した。アンケートから採取された徒歩圏は170事例であった。記入された徒歩圏は、(1) 住戸の近傍と中心のセンターベルトを含んだものと、(2) センターベルトを含まず、住戸近傍だけのものの2種に大きく分類できる。図表5-9は住戸近傍の徒歩圏を6種に分類し、それとセンターベルトが徒歩圏に否かで事例数を数えたもので、センターベルトを徒歩圏内としているものが、事例の65%を占めていることが分かる。また、センターベルトが行動圏に含まれない場合、住戸まわり（居住区）の徒歩圏は、最小限の範囲でとどまることが多く、センターベルトを徒歩圏とするか否かが、居住者の居住地の使い方決定する上で、大きなファクターであると考えられる。

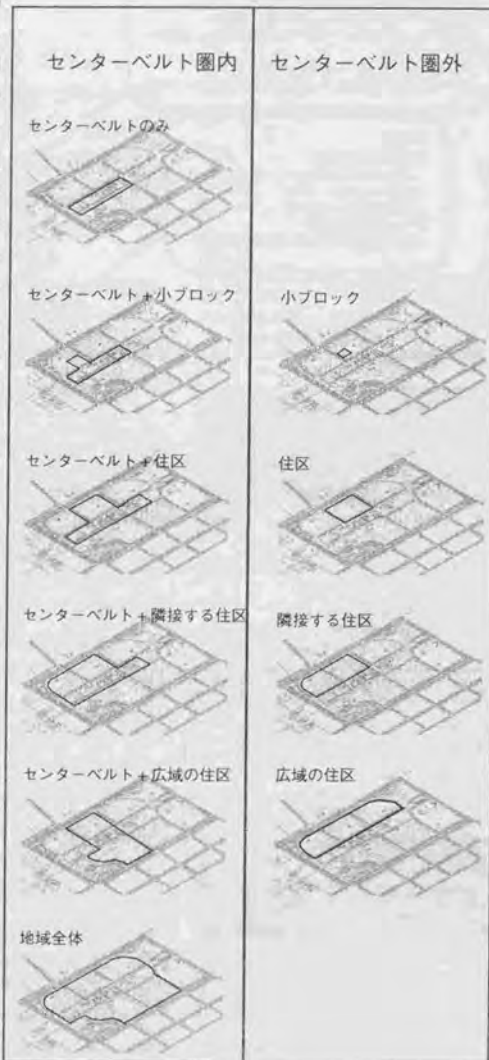
全体（170事例）

行動圏	センターベルト		計
	圏内	圏外	
なし	18		18
小ブロック	32	44	76
住区	37	13	50
近接する住区	9	1	10
広域な住区	12	1	13
全域	3		3
計	111	59	170

全体（170事例）

行動圏	センターベルト		計
	圏内	圏外	
なし	11%		11%
小ブロック	19%	26%	45%
住区	22%	8%	29%
近接する住区	5%	1%	6%
広域な住区	7%	1%	8%
全域	2%		2%
計	65%	35%	100%

図5-9 徒歩圏の分類（左）と内訳（上）



センターベルトと近接した住区（88事例）

行動圏	センターベルト		計
	圏内	圏外	
なし	10%		10%
小ブロック	25%	27%	52%
住区	20%	1%	22%
近接する住区	4%	1%	6%
広域な住区	8%		8%
全域	2%		2%
計	70%	30%	100%

センターベルトと離れた住区（82事例）

行動圏	センターベルト		計
	圏内	圏外	
なし	11%		11%
小ブロック	12%	24%	37%
住区	23%	15%	38%
近接する住区	6%		6%
広域な住区	6%	1%	7%
全域	1%		1%
計	60%	40%	100%

図表5-10 住区的位置による行動圏の比較

5章：地域レベルの居住環境の変遷（特徴のある場所の誕生）

図表5-10はセンターベルトと近接した住区と離れた住区に分けて、徒歩圏を分類したものである。センターベルトと離れた住区は近接している住区に比べて、10%センターベルトへのアクセスが低いのが分かる。標本数がそれぞれ80程度で、数にして8~9事例ぐらいの差ではあるが、中心部への距離の違いが徒歩圏に影響を与えているといえる。

図表5-11は、徒歩圏にセンターベルトが含まれているものに関して、センターベルトを3つに分けて、センターベルト内での徒歩領域を分類したものである。徒歩圏はセンターベルトの中央部分に徒歩圏が集中している。センターベルトの中央付近には、公民館、商業施設、村役場など、利用頻度の高いものが集まっており、徒歩圏は、センターベルトのなかでもこの中央部の商業部分へのアクセスで決まっていると考えられる。

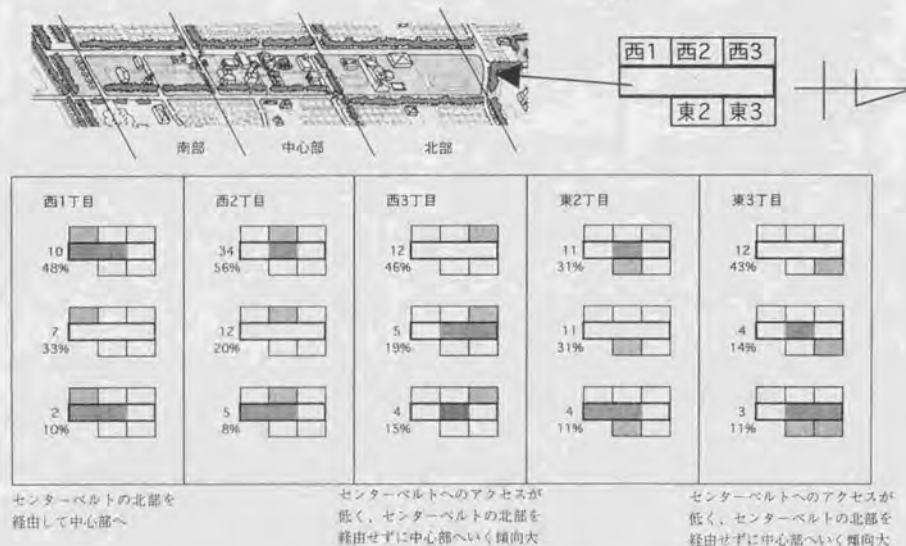
センターベルトの利用のされかた

南	中央	北	事例数	比率	センターベルトの中央を含む
全体			15	9%	61%
中心+北部			22	13%	
中心+南部			21	12%	
中心			45	26%	
北部			3	2%	5%
南部			5	3%	
住区のみ（圏外）			59	35%	圏外 35%
計			170	100%	100%

図表5-11 センターベルトの利用

軸性による徒歩圏の変化

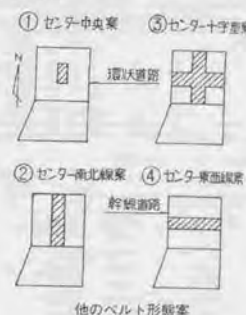
図表5-12はセンターベルトを3つのゾーンにわけ、住区(町)ごとに徒歩圏を分類し、頻度の高いものを3パターンずつ挙げたものである。センターベルトの南側に位置する西1丁目の場合、センターベルトの中心部と南部が徒歩圏となっており、町(街区)から出て、センターベルトに沿って、中心部へ移動するという徒歩領域が浮かび上がる。一方、センターベルトの北側に位置する西3丁目・東3丁目の場合、まず、徒歩圏にセンターベルトを含まない事例が多く、センターベルトにアクセスする場合も、センターベルトの北部を経由せず、中心部だけを徒歩圏とする例が多く見られ、北部の2街区と南部の1街区の徒歩圏事例のセンターベルト中心部へのアクセス率を比較しても南部の方が高い。これは、北部のセンターベルトには小中学校が配され、南部のセンターベルトに較べて、閉鎖的なブロックになっており(内部を通過することは物理的には可能ではあるが)、センターベルトの領域的な軸性が弱く、これが徒歩圏に影響を与えているといえる。このように、大湯村のセンターベルトの軸性は行動圏に影響を与えており、村の空間の性格付けに関与しているといえる。



図表5-12 行動圏の傾向(町毎)

5章：地域レベルの居住環境の変遷(特徴のある場所の誕生)

「八郎湯新農村建設事業誌」によるベルトの形状は十字型、東西軸型なども検討されている。



配置計画時の軸性

総合中心地の公共施設がベルト状に配置された根拠は、「八郎湯新農村建設事業誌」によると、(1)一ヶ所に集まっている方が居住者にとって便利、(2)施設が拡大するための余裕があるが、施設と住区の間に空間(緑地)を設けると、住区と分断される恐れがある。ベルト状なら、住区との接触面積が高く、かつ長手方向に発展可能である、の2点である。

また、ベルトの内部の配置計画に関しては、北に「静的な施設(墓地、運動公園)、南側に下るにしたがって「動的(サービス業務、観光)になるように配置計画がされたとしている。ベルト内部の配置の根拠は、地盤のボーリング検査の結果、まず、南側に農業生産施設を配置されることになり、「動」側からのヒエラルキーで決定したと考えられる。

中心地全体を南北につらぬいて幅200mの公共施設軸をとった。生産施設区では、上水道浄水場、ガスプラント、廃棄処理場、火葬場などの供給処理施設を配置し、居住施設区では、南から観光施設地区、業務官庁地区、商店街、診療所、公民館、教育施設地区、運動公園、宗教施設、と配置してあり、これは、外部の人の利用の考えられるものから、より住区中心の機能のものへ、即ち、動的なものから静的なものという原則で配置した。

「八郎湯新農村計画」
(SD, 1966年10月, p.36,37)

センターベルトのブロック割

居住区の北より、農業生産施設区の一部にかけて、幅200mのセンターベルトを設け、その利用形態を考え、これに見合ったブロック割とした。

「八郎湯新農村建設事業誌」(p.582)



図表5-13 ベルトのゾーニング

この記述を見る限りでも、センターベルト全体のつながりや軸性よりも、羊羹を切るような機能割が行われている。

このように、センターベルトという形態の決定や、その内部の配置計画においては施設の機能的な側面に焦点がおかれていたことがわかる。

都市デザインにおいて都市軸というものは重要視されることが多い要素であるが、大湯村の場合、結果的にセンターベルトの軸性が村の空間の性格付けに役立っているが、こうしたセンターベルトの空間的な軸性といったものは、元々積極的につくり出されたものではなく、副次的に生まれてきたものであったと推測される。

この様に初期の線を引く段階で軸というアイデアが生まれなかったのは、大湯村は元々湖底の村であり、最初の計画の際に軸性を決定づける空間的な根拠が全くなかったことが一因であると考えられる。

5-4 村内の交流活動

72の村内サークル

大湯村の特徴の一つとして、一つにサークル活動が盛んであることが挙げられる。図表5-14は、現在大湯村村役場が掌握している村内サークルの一覧である。現在でも文化サークルが43、体育サークルが21、スポーツ少年団が8と、極めて多数のサークルが存在している。

サークル活動が盛んな理由として、初期に励行されていたこと以外に理由として考えられるのは、居住者の職業が農業で、季節（農閑期）によっては時間に余裕があることである。また、その時間に余裕がある時期が、居住者全体で共通なグループでの活動を容易なものにしている。本節では、サークル活動を中心に居住者の村内での交流活動について考察する。

サークルが強いのは農業で休みが一致するので練習がしやすいからだろう。
No.2

大湯村の初期の活発なコミュニティ活動、サークル活動に関しては、岩藤、萩原「八郎湯新農村におけるコミュニティ組織と集会所施設利用」1973年、日本建築学会学術講演梗概集で報告されている。

以降インタビューで得られたコメントは「No.1～15」、アンケートで得られたコメントは「2137-1」のように表記するものとする。

大湯村芸術文化協会に所属する団体		大湯村体育協会に所属する団体	
1 演劇会（民謡舞踊）	23 華曲正経社	1 野球協会	12 大湯ローイングクラブ
2 コールガキはな	24 詩吟同好会	2 卓球協会	13 バドミントン同好会
3 ごてんまり同好会	25 白鳥短歌会	3 ソフトボール協会	14 大湯相撲連盟
4 お茶愛好会（義手会）	26 水楽連	4 大湯バレーボールクラブ	15 大湯ゴルフクラブ
5 人形劇同好会「八郎」	27 男性コーラス	5 山友会	16 大湯射撃同好会
6 踊躍人形同好会	28 エプロンの会（大正琴）	6 はしろう会	17 大湯村グラウンドゴルフ同好会
7 紅花会（舞物番付け）	29 エプロンの会（合唱）	7 大湯テニスクラブ	18 大湯サッカークラブ
8 写真クラブ	30 花かげ会（大正琴）	8 大湯スキークラブ	19 大湯村ボウリング同好会
9 華道池田村教室	31 七宝庵同好会	9 剣道会	20 大湯スイミング愛好会
10 絵画同好会	32 読書会	10 柔道同好会	21 体育指導委員会
11 生花	33 生花（タンポポ会）	11 ゲートボール同好会	
12 飯茶同好会	34 華道池田村教室		
13 堀ひも（堀の会）	35 カトレア会（大正琴）		
14 寿花池田栄華会（新舞踊）	36 演劇会（民謡）		
15 器楽会	37 生花小原道徳田教室	大湯村スポーツ少年団に所属する団体	
16 書道同好会	38 小原流（藤平教室）	1 ラグビースポーツ少年団	
17 将棋	39 白鶴会	2 野球スポーツ少年団	
18 民謡	40 俳句同好会	3 女子ミニバスケットボールスポーツ少年団	
19 花芸安達連	41 なのはな会（大正琴）	4 柔道スポーツ少年団	
20 囲碁	42 切り絵同好会	5 剣道スポーツ少年団	
21 薩摩会	43 大湯村川柳倶楽部	6 相撲スポーツ少年団	
22 社交ダンス同好会		7 ジュニアスキークラブ少年団	
		8 男子ミニバスケットボールスポーツ少年団	

図表5-14 サークル一覧（公民館資料より）

サークル参加態度の二極化

図表5-15はアンケートで尋ねた、サークルの参加の有無と、参加数である。全体では約半数がサークル活動に参加しており、さらに参加者の半数以上が複数のサークルに参加し、中には6つのサークルを掛け持ちしている。居住者の半数がサークル活動にコミットしていない一方で、参加する人は複数のサークルに参加するなど熱心な活動を行っており、サークル活動に対する態度は二極化しているといえる。また、年齢に関しては20代は標本数が3人なこともあり、かなり確度が低いが、20代、30代が参加率、参加サークル数のいずれでも低調であり、高齢者ほど平均参加サークル数が多い（図表5-16）。

サークルに参加するきっかけ

図表5-17はサークルに参加するようになったきっかけである。圧倒的に多いのが、友人の紹介である。サークルに参加者の多くが複数のサークルに参加するようになる理由の一つとして、このような人のつながりでサークル参加が広がっていくことが考えられる。

短歌の会は誘われて入った。それぞれのサークルで顔あはれ違う。（No.10）

次に多い「公民館で知った」というのは、サークル活動は公民館が管理しており、サークルに関するインフォメーションなどの拠点となっているためである。

サークルの拠点は公民館

サークルの活動拠点は、ほとんどが村内の公共施設である（図表5-18）。体育系サークルはグラウンド、野球場、体育館、文化系サークルは遊戯館（村民センター）、公民館などが拠点となっている。

インタビューによると、公民館の近隣の飲食店は、サークル活動後の交流場所として活用されている。

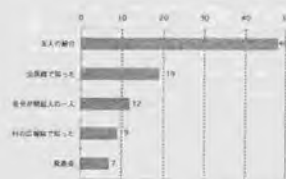
また、大湯村には芸術文化祭（註）という行事があり、文化系サークルの発表の場となっている。

不参加	参加	サークル数						計
不参加	参加	1	2	3	4	5	6	計
20代	3							3
30代	13	3	1					17
40代	20	9	7	3				39
50代	26	11	6	5		1		50
60代	16	4	7	5		1		33
70代	5		2	1				8
不明	8	5	2	1				17
計	91	32	23	16	1	2	2	167

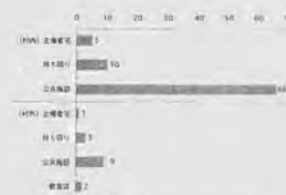
図表5-15 サークルの参加状況

年齢	参加率	参加者の平均サークル数
20代	0%	-
30代	24%	1.25
40代	49%	1.68
50代	48%	2.04
60代	52%	2.24
70代	38%	3.33
不明	53%	2.00
総計	46%	2.00

図表5-16 サークルを知ったきっかけ



図表5-17 サークルを知ったきっかけ



図表5-18 サークルの活動拠点

（註）芸術文化祭：大湯村のサークル全体を統合する組織「芸術文化協会」が毎年11月に行う文化祭。

情報流通の場としてのサークル

インタビューでは、作付けの時期、肥料の購買先といった農業に関する情報をサークル活動の場で得ている例があった。大湯村の農業は個人単位で行われており、農業は天候の同行、最新技術など情報に頼る部分が多いことから、こうした人のつながりが情報源として重要な価値を持っている。

農機具に関する情報など、どの機械がいいとか悪いとかと言うような話はサークル仲間からも聞く。苗に失敗したときなどに「うちにある」「じゃあ、分けてくれよ」というのはしょっちゅう。趣味の仲間も、趣味だけでなく困ったときはお互い様、という感じ。(No.10)

「組織なかの人間」におけるサークル活動

ホワイトは「ORGANIZATION MAN (組織の中の人間)」で、アメリカの郊外住宅地パークフォレストのコミュニティ内でのサークル活動について以下の様に述べている。

彼は仲間入りの温床にとび込んでしまったのだ。大人の組織が六十六もあり、人口はたえず入れかわり、そのために各組織は新会員を飽かず求めることになるわけだが、このようパークフォレストはおそらくこの国の他のどの地域社会よりも、百人単位で比較すると、より多くの市民のエネルギーを吸い取っているであろう。多くの組織に関係している主婦にとっては、台所の黒板は欠くことができない。同時に二つの会合に出席しなければならない羽目に陥るようなことのないように、予定を組むことは必ずしも容易ではないからである。午前七時から午後十時までのどの瞬間にも、どこかでなんらかの組織が会を開いている。この地域社会の或る建物で、私はその見聞らしき通して一つの典型的な夜をも目撃した。すなわち、一番上の階では、稽古中の教会唱歌隊、探検団員(大連の徒歩旅行のプランを立てるため定数に達するのを待っている)、世界政治討論会(戦争の原因を討論するためのもの、もう一つ別の討論会はアメリカの外交政策を討議するため、別の日の夕方に会合することになっていた)。一番下の階では次のようなものがおこなわれていた。学校理事会の会合(新しい学校の室内装飾についての話し合い)、新しい組織(新教徒クラブ)設立のための組織委員会、夫と妻、の会(子どものための安全な規則についてのスライド参照)。

ここで、述べられているサークル活動と、大湯村で行われているサークル活動の大きな違いとして指摘できるのは、参加に対する強制力である。

先述したが、アメリカの郊外社会は極めて居住者の移動が大きく、伝統的な縦のつながりよりも、利便的な現在のつながりに力点が置かれる。ホワイトは、こうした人付き合いの様態を、移植を重ねることで、長い根はないが短い毛根がたくさんあり、定着が早い植木のたとえを用いて説明している。

要するに小さな根が多いほど、移植は容易である。仮り住い族はもっと深い根を欲している。だが彼らは懸命にたて探れ求めたがゆえに、何かこれまで求め続けてきたようなものを発見した。彼らはお互いのうちに、それをみだし始めている。一種の全国的な浮遊共同体を通して、新たな種類の根を発展させている。この根は確かに浅い。しかしかのアメリカーンの根のように、浅い根であっても、充分にありさえすれば、大きな支えとなることのできるものである。

パークフォレストでは、参加は半ば義務であり、「不参加=コミュニティからの離脱」という図式さえ予期させるものであるが、大湯村のサークル活動はそこまでの拘束は持ち得ない。先述したとおり、参加と

ホワイト「組織なかの人間」p.139

ホワイト「組織なかの人間」p.144

5章：地域レベルの居住環境の変遷(特徴のある場所の誕生)

不参加の態度は二極化しており、「同好の士が集まって積極的に活動している」という運営体型になっている。

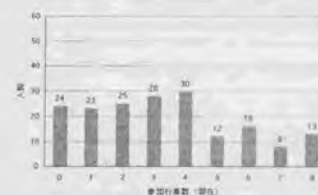
あくまで、選択肢の一つとして、サークル活動が存在しているといえる。

選択的な行事の参加

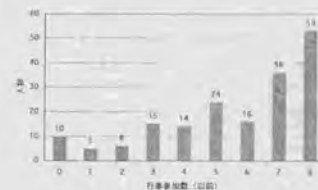
図表5-19は、年中の各行事の参加状況を探ったもので、図表5-20は11の行事のうち参加が任意な8つの行事に関して、各回答者の参加行事数の分布を求めたものである。参加行事数にばらつきがあり、先述したサークル活動同様、行事に対するスタンスも居住者によって様々であると言える。

- アンケートで参加を尋ねたのは以下の行事
- クリーンアップ作戦(村内大掃除)
 - 花壇に花苗移植
 - 特産品祭
 - ソーラーカーラリー(観戦含む)
 - 盆踊り
 - 村民運動会
 - 大湯神社例大祭
 - 千拓記念駅伝(観戦含む)
 - 農業文化祭
 - 冬季ふるさと祭り
 - 芸術文化祭

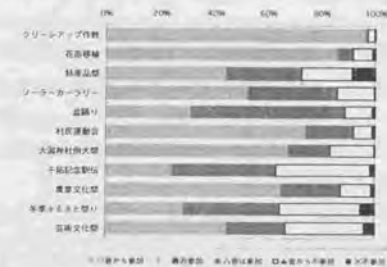
- ：任意参加の行事
●：参加が義務、奨励されている行事



図表5-20 現在の任意参加行事の参加数



図表5-21 以前の任意参加行事の参加数



図表5-19 行事の参加状況

図表5-21は参加が任意の8行事の各回答者の以前の参加行事数である。現在に較べると参加数が多く、全行事に対する人も多数存在するなど参加に対する暗黙の拘束力が窺えるが、現在では個人の行事参加へのスタンスが自由になっているのが分かる。

5-5 個人の場所展開（ケーススタディ）

ここまでは、地域の使い方を徒歩圏の統計的な分析からマクロに見てきたが、ここでは、インタビュー調査で得られた事例から、個人によって組み立てられている大湯村で構築されている地域環境を見ていく。

サークル拠点型

Uさんは、農業の経営は息子に任せ、農業は続けながらも、余暇活動に時間をかけるようになった人物である。実に10のサークルに所属し、村のテニスクラブの副会長、郡のテニス連盟の事務、南秋田郡のテニスサークルの会長を務め、特棋クラブの創始者でもある。

それぞれのサークルはメンバーが異なるが、サークル仲間から他サークルへの参加を誘われるなど、参加が参加を呼ぶ相乗効果的に参加サークルが増えていっている。また、サークルをきっかけに村外にも交流が広まっている。サークルの活動拠点が様々であることもあり、普段利用している車にテニスラケット、カメラなど趣味の道具一式を搭載し、「動く趣味空間」として活用している。

また、サークルは余暇活動として以外に、農業などに対する情報交換の場所としても機能している。

スィミングクラブにも入っている。夏はB&Gのプールや宮沢海岸に行く。海へ行くときは海水パンツをはいて車に乗り、海水パンツのまま帰ってきて家の風呂で潮を落とす。

体育館は冬場は夜も昼も満杯。たまには中学生も来る。

テニスは村内のテニスコートで。対戦相手はいつも10人ぐらいいて、夏になると雨が降らない限り毎日ナイターをやっている。

バイオミックエリアには写真を撮りに行くが、入場料を取られるのがいやなので、早朝に忍び込む。

船越のジョイフルシティに週2～3回行く。甚の道具をジョイフルシティの風呂のロビーに置きっぱなしにしてあるので、行ったときにすぐ船越の友達に電話して替をしたりする。ジョイフルシティにはボーリング場もあるので、その後でボーリングをする事もある。あの辺りにはパチンコ屋も4軒程集まっているが、パチンコはしない。競輪のサテライトもあるがあまり興味はない。飲み屋も船越には60軒くらいあり、スナックもいっぱい。

天王町によくテニスをしに行く。

図表 5-22 Uさんの村内外の行動

No.10 Uさん（62歳男性） 第3次入植 実施日：1998/11/18 9:00～11:30

■サークル活動

□自身はテニスの村の副会長、郡の連盟の事務、百歳会（南秋田郡）の会長（県では80歳くらいの人もいるので若いほう）、特棋クラブの創始者。現在、10のサークルに所属している。

（テニス）

□テニスは県の大会にも出る。大湯村のテニスチームは結構強くて、いつも2～3位くらいには入っている。今、大湯村ではこのところ、女性の参加が活発で男性の参加はあまり多くない。高校時代に2年テニスをやっていたので基礎はできているので、15年くらい前にテニスを本格的に再開できた。

□天王町によくテニスをしに行く。

（写真）

□写真を撮るのは村内が多いが、どんなものでも対象にして、風景も人も撮る。東北地方道路建設写真コンテストで、朝もやの秋田自動車道の写真が入選し、さきがけ新聞に掲載され、大変うれしかった。賞金3万円。

□大湯村には写真を撮る人が多く、好きな人は多いときで日にフィルム100本分も撮る。

□メード写真の撮影会にも行ったことがある。

□バイオミックエリアには写真を撮りに行くが、入場料を取られるのがいやなので、早朝に忍び込む。

（書道）

□書道もやっている。仏壇のある部屋の方に道具を置いている。

□書道も月5,000円くらい掛かるが、8段9段の人はもっと掛かっている。段を取るのには金がかかるので段はいらない。

（水泳）

□スィミングクラブにも入っている。夏はB&Gのプールや宮沢海岸に行く。海へ行くときは海水パンツをはいて車に乗り、海水パンツのまま帰ってきて家の風呂で潮を落とす。

（短歌）

□短歌の会は誘われて入った。それぞれのサークルで顔ぶれは違う。

■サークル等の拠点

□写真の道具やテニスの道具は、自分の車（ライトバン）にいつも入れてある。趣味の道具だけでなく、作業着等も積んでいるので、車に乗りさえすれば、いつでも何処でも何処でもできる。写真を撮る場所も車に乗って一人で探しに行く。つい最近も、島山に写真を撮りにいった。残存湖の朝日は美しい。熱心なひとは写真を撮るために全国を旅行するが、自分はそこまではしない。カメラや現像はスーパーの写真屋に頼む。人によっては、東京のヨドバシカメラなどで100本以上のフィルムを購入してくるが、交通費を考えると100本くらい買くと、安く上がるようだ。

□ソーラースポーツライン（村内にあるソーラーカーレース用直線道路）を3kmくらいジョギングすることもある。

□体育館は冬場は夜も昼も満杯。たまには中学生も来る。

□続き間の和室は周方とも趣味に使用している。テレビと暖房（居間と同じもの）があり、写真や本・書道の道具等が散らばっている。ものを置いたらそのままにして、人が動けばいいように出来て便利。秋田杉を用いて作ったが、和室は非常に金がかかる。こんな杉は最近では手に入らないと大工に言われた。趣味の写真は大体ここで、将棋はここが知人宅が多い。テニスもするが、テニスは村内のテニスコートで。対戦相手はいつも10人ぐらいいて、夏になると雨が降らない限り毎日ナイターをやっている。

□船越のジョイフルシティに週2～3回行く。甚の道具をジョイフルシティの風呂のロビーに置きっぱなしにしてあるので、行ったときにすぐ船越の友達に電話して替をしたりする。ジョイフルシティにはボーリング場もあるので、その後でボーリングをする事もある。あの辺りにはパチンコ屋も4軒程集まっているが、パチンコはしない。競輪のサテライトもあるがあまり興味はない。飲み屋も船越には60軒くらいあり、スナックもいっぱい。

■その他、生活

□寝る前に短歌を考え、写真雑誌を見、なかなか忙しい。

□奥さんと同じサークルには入っていない。奥さんはおどりだけ。でも、芸文祭での発表を見たことはない。自宅の和室前の広い廊下でよく練習している。

□農機具に関する情報など、どの機械がいいとか悪いとかと言うような話はサークル仲間からも聞く。苗に失敗したときなどに「うちにいる」「じゃあ、分けてくれよ」というのはしょっちゅう。趣味の仲間も、趣味だけでなく困ったときはお互い様、という感じ。

□趣味が多くて忙しいが、お金が掛かり、小遣いをいつもオーバーしているのが悩み。また、芸文祭の時には全てのサークル（写真・囲碁・将棋等）で出品する。10もサークルに入っていると、会費だけで35,000円。そのほか、大会の滞りには反省会があったりして3,000～5,000円と掛かってしまう。大体そういう集まりは大湯村に帰ってきて、パンダ等で行く。

□農繁期は小遣いを使う暇もないが、農閑期はたくさん使ってしまう。

図表 5-23 Uさんインタビュー記録（サークル関係を抜粋）

村外重視型

先のサークル拠点型とは対照的なスタイルで生活しているのが、Tさんである。Tさんは、べったりとした近所付き合いを嫌い、活動拠点の多くを村外に求めている。しかし、村内で全く孤立しているわけではなく、村の芸文協（芸術文化協会：サークルの統括団体）の10周年の際には自分の付き合いのコンネクションを利用して、記念コンサートをコーディネートするなどしている。このように、興味があつたり、必要とされたときは参加するが、それ以外では最小限の付き合いで済ますという付き合いの使い分けを行っている。こうした、部分参加、村外重視の付き合いを実現している背景にあるのは、

- (1) 長い居住生活でお互いの人物像を理解し合っており、個々人のコミュニケーションの取り方が理解されているため。（先述した、ホワイトの「組織の中の人間」で紹介されている人付き合いの場合、居住者の移動が多く、お互いを知り合うために極めて頻繁な（半強制的な）サークル活動が盛んであったのと対照的である。）
- (2) 車社会化が進み、近隣との交流が容易になったこと。

の2点が考えられる。

No.11 Tさん (55歳女性) 4次入植 実施日：1998/11/17 13:35 - 15:20

■生活のスタンス

- ☐ 人付き合いは悪いと言われるがどうだろうか。隣の奥さん方と集まって世間話をするのが人付き合いだろうか。人が宇宙にも行ける時代に大淵村からでないとと言うのも変な話だ。
- ☐ 一人で遊ぶことは好き。人に友達がいると言われるとわからない。人は親しくなりすぎると破裂する。画一的な生き方なら楽なんだが、個性的に生きると風当たり強い。
- ☐ たとえサークルに入っても結局は何事も結局は自分で解決するしかない。一人で出来る事がいくつあるかということが大事だと思う。
- ☐ 農業は一生出来ると言うが、生涯現役、生涯生産というのきつい。
- ☐ 昔は筆曲（こと）をやっていた。今は寝言と小言ぐらい。

■村外での活動

- ☐ 趣味の店は全て村外。ちょっとこだわれば、J Aのたけやのケーキジャタメでしょ。秋田に行けば、個人の店も一杯ある。
- ☐ コーヒーにも凝っている。豆は秋田の「まめまめハウス」で手に入れている。
- ☐ 美容院も秋田に行っている。ゆっくりとホテルで待たたりする方がリラックス出来る。
- ☐ 居住地ではあんまり活動したくない。興味のあることはアンテナを張り巡らせていればなんかと引っかかって来るものである。東京とか秋田まで情報を仕入れに行く。
- ☐ 五城目の朝市に行く。新鮮なものがたくさんあり、歩くのが楽しい。
- ☐ 情報は本によるところが多い。
- ☐ 東京には姉がいるし、住んでいたこともある。表参道とか有明通りとかを歩くのが好き。
- ☐ 村外に出かけるときは八郎潟駅まで車で行って、そこからは汽車に乗る。村外で車を運転することはほとんどない。汽車で行くなら、本も読める。こういう機会がないと一時間も集中して楽しめる時間はとれない。
- ☐ 家を作る前にいろんなものを見ておきたいと思い、あちらこちら旅行した。
- ☐ オペラを見に行くのは東京とかウィーン。世界の大ホールを観劇した人もいる。

- ☐ ドミンゴのファンクラブに入っている。ソウルまで見に行ったこともある。
- ☐ 去年はロマンティック街道に行った。あとはニューヨーク、ワシントン、ウィーン、ソウルとか。
- ☐ 主人とオランダのアムステルダムに行ったときにボルダーにも行ってきた。種に大淵村に似ている。草まで似ている。大淵村で植えている植物のいくらかはオランダから来た聞いた。花やチューリップを仕入れている人もいる。

■村内での活動

- ☐ 近所とは挨拶程度の付き合いでいいと思っている。遊びのお宅でお茶会に誘われたが、断った。頻りに会う必要もないと思う。
- ☐ サークルには何一つ入っていない。サンルーフで催し物をやっているみたいが行ったことはない。
- ☐ 村内にホテルが出来たことも知らなかった。夫婦とも知らずびっくりした。見つけて感動して主人と2人で食事をした。
- ☐ 今年は例大祭（神社の祭り）の当番が当たっており、家で準備をしたりすることもあったので、いろいろを覚えて置いた。
- ☐ 村は一種終生状態。自分も少しだけ組組を教えたつもりだったが、出来れば生徒の方がよい。教えたり教わったりより自分一人で楽しんでいる。
- ☐ 芸文協の10周年の時は由紀さおりと安田祥子のコンサートをセッティングした。ちょうど安田さんは文化庁の派遣でニューヨークにいたので、手紙を何度もやりとりした。つながりとは怖いもので、安田さんの娘さんのやすこちゃんとは下の娘が進研ゼミで知り合ったペンフレンドだった。また、安田さんの旦那だったエリザベスサンダーホーム（孤児院）の沢田さんは三菱財閥系の人で、三菱の岩崎さんの小岩井農場と家の主人の農場が交流があった。安田さんとは今でも手紙で交流がある。20周年でもコンサートをお願いしたのだが、予約が一杯でダメみたいだ。今年も大晦日まで働くことになりそうですと書いてあったので、今年の紅白の出場も内定したのかも知れない。
- ☐ 農業短大には親しい先生がいてよく遊びに行った。普通は作業着なので脚光を浴びることのない野良着を、美しいもの、として研究をしている人（湯浅ちえこさん）だった。
- ☐ 夫が大淵神社の氏子総代をやっている。（氏子代表は住区内で通給だからやらされてしまう。）大淵神社は出雲大社の廃材をもらってきて建てたと聞いている。9月9・10日に祭典がある。
- ☐ 大淵村の横のつながりは都会並みだと思う。意外と孤独な人もいるのでは。でも個人差もあるし。
- ☐ 村内の移動は歩くことが多い。歩いたり、自転車を利用したりするようにしている。ボボラを見たりしながら自転車に乗るのは好き。
- ☐ J Aめぐりプラザ（農協）で普通の買い物は充分。
- ☐ あまりにも農協が社交場になっていて、何時間も立ち話など聞くに煩わしい時がある。人付き合いを否定する訳ではないが……。
- ☐ ボルダー一周の湯には入ったことがない。知り合いとかいてわずらわしいかも。
- ☐ 夫は観光パレスに一杯引っかかっている。1人で行く。店の固定客になっているようだ。あそこは男の息抜き場所なんだと思う。
- ☐ 今までホームコンサートは6回聞いた。シャンソンとかお呼びして。毎回30人ぐらい来る。村内だけではなく秋田とか色々。ホームコンサートが終われば、旦那方は食堂のテーブルと投場から借りてきたテーブルに座ってわいわいやる。
- ☐ 家を建てるときは、地域性に関しては、まわりとの違和感がないようにすることを考えた。あまり目立ちすぎると良くない。（住まいは主観と客観のせめぎ合い）結果、外は洋風で中は和風になっている。住まいには生活に対する人生観がでる。今は自分の家は真似したが人がある。嫌な思いをしたこともある。しかし、真似するのはどうかと思う。家とかは急にできあがるものではなく、伴う精神的なものがなければならぬと思う。

図表 5-24 Tさんインタビュー記録（村内外の活動を中心に抜粋）

二代目

Eさんは小学校2年の時に大湯村に入植し、中学卒業時以降10年ぐらゐ村外に居住していたが、その後農業後継者として村に戻った人物である。大湯村の農業は大規模で機械化が進んでいるほか、米の流通が自由化されてからは単純な生産活動だけでなく、流通・販売も含めたビジネスとしての側面も生まれるなど、職業的にも魅力があることもあり、後継者問題はほぼ無いとされている。また、Eさんが村内で一緒に育った幼なじみも、次々と村に戻ってきており、こうした横のつながりも、後継者を呼び戻す要因になっている。

図表5-25は、Eさんのインタビューから得られた大湯村の場所にまつわるコメントを地図にプロットしたものである。子どもの頃から過ごしている大湯村は、Eさんにとっては自分が育った環境であり、体験が込められた場所である。また、こうした第二世代の中には、子どもが誕生し、自分が通っていた小学校に子供も通うなど、2世代に渡って環境が共有されている。

No.15 Eさん (37歳男性) 農業後継者

実施日：1998/11/18日 19:30～21:15

- 生まれは北海道。小2の時に大湯村に来た。父は2次入植。妻も入植2代目で、生まれは佐渡。
- 1次入植が西2丁目。2次入植が東2丁目。他はみな空き地だった。
- 田は、手伝いには行かされたけど、遊ぶところというイメージはなかった。
- 大湯村に来たのは開校1年目の時。学年は15人くらいだった。
- 小学生の頃は毎月のように転校生が来ていた。当たり前前の出来事だった。小2の時には15～16人だったのが中学卒業の時には46人くらいいた。
- 全国から来ているので遊びのルールはいろいろだったが、グループの中で強いやつが仕切っていた。今でもその人間関係は保たれているかも。
- 同級は46人、うち男は26人いた。そのうち男は半分くらいは今でも村にいる。女は5～6人。
- 中学を出て、外の世界は怖かった。高校は他校に進学し下宿したが、運動部では上級生に秋田弁が喋れないといじめられた。
- 村内の言葉は標準語。青年会などで周囲の町村と交流するときに、秋田弁が喋れないから打ち解けられなかった。両親は北海道弁で、自分は一体何弁だ？という感じ。
- 高校、大学（東京）卒業後、海外青年協力隊に行っていて村には10年以上の空白がある。
- 大湯村の若手・後継者の集まりには、青年会と、青年会の農業版の日会というのがあるが、それを大湯村では産業近代化ゼミナールというのがある。
- 青年会よりもうちょっと就がいたら農協青年部という流れがある。青年会や農協青年部は住区単位などではなく村全体の組織。青年会には年齢上限（30歳過ぎ）があり、その年齢になり結婚するとだいたいそちらに移行するし、だいたい友達がみな移行するのでみな移る。最近では入らない人が多い。
- 世代間の縦のつながりは、持っている人もいるが横のつながりに比べると薄い。子供時代の方が大抵はやはり縦の繋がりも普通の人以上強い。
- サークルは、普通に連想するサークルというより、集まりと呼んだ方がいいだろう。会員内外の区別も特になし、お金も絡んでいない。所属している「スーパーごま会」という米の研究会も、サークルを言うより会社に近い組織。
- 村の国際協力〇〇会に所属している。海外協力隊から帰ってきたときに参加した。年に4～5回集まるが、飲みが基本になる。AET (Assistant English Teacher) が来る度に歓迎会だとか、南の池公園でバーベキューだとか、海外からの研修生の受け入れ先にもなるが、フランス語しか喋れないイジリアからの留学生を実家に泊めたり（Eさんは英語を話せるので）には苦労した。
- 村出身同士の夫婦も多い。青年会などで古くから付き合いもあるし、村内で女性に会ったのはお母さんくらいだし、大学を出たら90数パーセントは帰ってくる。皆帰ってくるから自分も帰ってくるのだから。農業後継者の会で、秋田県700人のうち70人が大湯村ということもあった。

- 村内結婚なので、デートは見られると地味悪いので車で村外に出ていた。村外に入ったら助手席を倒して見つからないようにしたりしていた。村外に出て、村の人にはデパート（開店セール等の時は絶対）とかどこに行っても会う。
- 情報交換はよくする。場所は紀の屋やパンダで、昼に雑談にやり取りするときは南の池公園でバーベキューなどやりながら。
- 農業の機械の情報交換は頻繁にする。誰かが新しい機械を買ったら見に行く。コンバインやトラクターは1,000万円くらいする。コンバインの耐用年数は10～15年、トラクターは20～30年。村で考案された農業機械の技術も多々ある。
- 知り合いとは偶然会うこともあるし、人の田に遊びに行ったり畑を売ったりすることもある。友達が集まれば仕事の手を止めるが、お互いに行き来している。近所でも話好きで人がいる。悪いといふときは困るが……。

図表5-25 Eさんインタビュー記録（抜粋）



図表5-26 Eさんの場所にまつわる思い出

5-6 場所の特徴付け

大湯村は、もともとは湖底だったところであり、村内に存在する全てのものは干陸後人工的に造られたもので、計画によって意図されたもの以外は何かもないという極めて漂白された環境であった。しかし、居住30年が経過し、そこで様々な事（行為）が行われたことや、これらが居住者に記憶・共有されることにより、居住者に特徴を持って認識されたり、形態的にも特徴のある場所になっているものもある。

これらは、地域計画で想定されている何らかの機能を担うものではないが、情報源や場所に対する愛着や住民の共有感情の拠り所になるなど場所にアイデンティティを与えるきっかけになっているものもある。

このように場所が特色を持つようになるには、以下のパターンが考えられる。これらは、独立したものではなく、複合して場所のイメージ形成に関与することも考えられる。

視覚的な象徴（目印）

地図記入アンケートの「目印になっているもの」で多くの人が挙げていたのが、カントリーエレベーターである。幹線道路から総合中心地に向かう道のりからもよく見えるカントリーエレベーター（穀物の収蔵庫）は、開村時から存在し、多くの人にとって村のシンボルとして認識されている。村の北西部に建てられたサンルール（ホテル）は、夜間にライトアップされることもあり、新しい目印として認識されている。

外から帰ってくると、カントリーが見えると安心し、ぐっと気が緩み、緊張が切れる。運転がおろそかになり、酔ってでもいようものなら蛇行運転をしてしまう。No.7

カントリーは30mの高さが目につく（1132-1）

サンルールは暗くなるとよい目立つ（2320-3）

サンルールのライトの色は、青がこれからより坂、緑は現状維持、オレンジは下り坂ということらしい。（No.15）

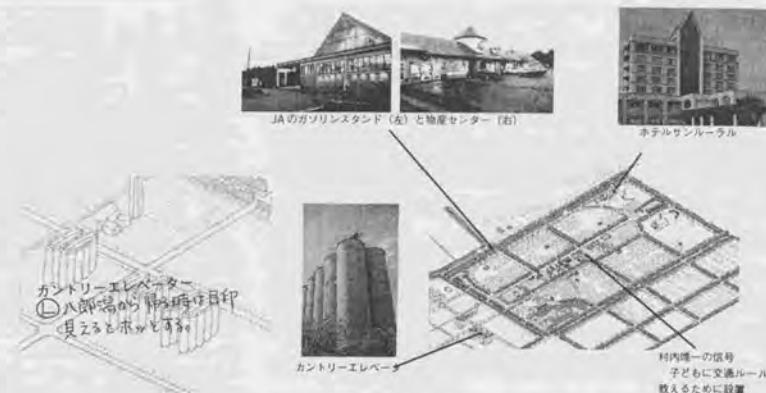
目印になっているものは、大きくて目立つものばかりではない。幹線道路沿いに立つJAのガソリンスタンドと物産センターは、幹線道路から総合中心地に進入するための目印として、道を案内するときに利用されている。

JA スタンド:お客様に道を教える時便利（1234-1）

村で唯一の信号（2209-1）

目印になっているのは役場や公民館。会話でも「公民館の前で…」「役場の前で…」というのわかりやすい。（No.11）

ここで場所としてあげているものは、初期の計画で意図していない機能を発揮しているものを中心としている。



図表 5-28 視覚的な象徴（目印）

大湯村の周辺には干拓時の残存湖があり、村に入るためには必ず橋を渡らなくてはならない。このため、橋を渡ることが、一つの目印になっている例もあった。

村に入るには必ず橋を渡らなくてはならない。橋を渡ると帰ってきた気がする。No.5

戻ってきたと思うのは、橋を渡ってまっすぐな道に入ったとき No.4

特別な体験の提供

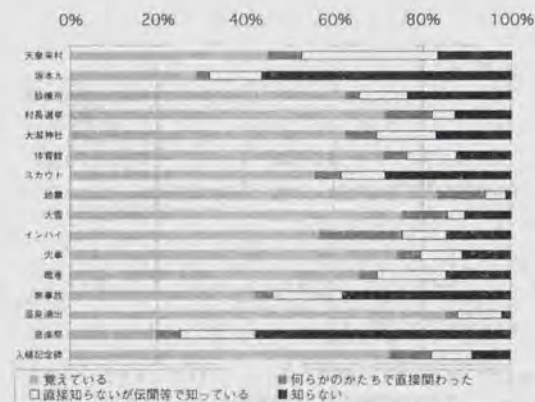
その場所に行くことによって、そこでしか味わえない体験が出来る場所。大湯村に入ってから総合中心地に向かうひたすら真っ直ぐな道は、周辺の地域では体験できない走行体験をもたらしている。また、水路の脇の崖は村内に存在する数少ない起伏のある地形であり、子供たちのソリ遊び場所になっている。

これはもともと大湯村が建造された際から存在するものであるが、居住者によって発見されたり、同じ体験を共有することで、共有される特徴として認識されている。

船越へ向かう道（葉の花）、八郎崎町に向かう道（ひまわり）、琴丘に向かう道（いちじく）の直線道路が雄大な気がして気持ちいい（2418-1）

大湯村に帰ってきたときに大湯村だと感じるのは、直線道路に入ったとき。ゆったりするし、気分がスカッとする。信号も家もないので気がゆるむのは、人が飛び出して来る心配もないからだろう。No.10

アンケートでは、大潟村開村以来の出来事を村報から選び、その認識を4段階で調査した。選んだ出来事は、大潟村で起こった事件や出来事のうち、場所との関連が強いものであるが、30年の間にさまざまな場所ですさまざまな出来事が起こっているのが分かる。また、事件や出来事はそこに目に見える形骸を残すわけではないが、その事件を体験したり伝聞されることにより、その場所に意味を付加すると考えられる。図表5-29は、その回答結果である。「天皇陛下来村」、「坂本九氏による村内初テレビ中継」の認識が低いのは入植が完了していなかったためで、以降の出来事はほとんどが5割を超える効率的に認識されており、大潟村居住者のみに共有される出来事が多く存在していることが窺える。また、インタビュー調査でこれらの出来事についてさらに詳細に聞くと、その出来事を起きた場所と関連して記憶している例や、その際に自分が何をしていかなど個人的な体験と結びつけている例などが見られた。アンケートで取り上げた出来事がフラッシュバルブメモリー(註)的な記憶を喚起するほど衝撃度の高い事件であったかは、少し疑念の余地があるが、こうした出来事が単純に事実としてではなく、体験された出来事として記憶されている。



図表 5-29 出来事の認識

(註) 大江健三郎は「懐かしい年への手紙」のなかで、「谷間と『在』の地形を気をつけて見ると、むしろ、人が歩くことで道が踏みかためられるように、語り伝えられていく出来事がそこで行われたことによって、この地形が出来上がった、というように感じたのさ」(p.124)と記述し、出来事と場所の分がかりない関係を示唆している。

心理学において人間の記憶の種類の一つにフラッシュバルブメモリーといわれる記憶がある。大事件が起きたとき、その事件の知らず聞いたときに自分がどこで何をしていたかその状況を、あたかもフラッシュを打てたその時の様子を写真で取ったかのように鮮明に記憶しているというものである。アメリカの調査ではケネディ大統領が暗殺されたことを知ったときに自分が何をしていたかを事件の14年後に尋ねたところ98.7%の人がその時のことを思い出すことが出来る、と答えたという研究報告もある。佐伯隆・佐々木正人氏は「アクティブ・マインド」(東大出版会 1990年)

(注) アサートで導かれた村内で起こった事件は以下の通り。

昭和天皇来村（昭和44年）
田橋中継で坂本九氏来村（昭和45年）
診療所に医師就任（昭和49年）
村の村長選挙（昭和51年）
大原神社落成式（昭和53年）
村民体育館完成（昭和54年）
北一丁目でボーイスカウトが大キャンプ（昭和55年）
日本海中部地震（昭和58年）
大雪（昭和58年）
インターハイ（ポート）開催（昭和59年）
カントリー教会で火災（昭和60年）
無産発生（昭和62年）
敬老会2508日で途絶える（昭和63年）
温泉湧出（平成元年）
ポルカ音楽祭（平成3年）
南の地区間に人権記念碑が完成（平成4年）



村報：平成年7月号より

交会点には皇室の方も来たりして。昭和40何年かの寛政宮がいらしたときは、
 子をおぶって出迎えた記憶がある。(No.11)

地震はもっとも強烈な出来事だった。トラクターで田を起しているところ
 だった。ちよっと前に一回トラクターを壊して、ゆれたのでまた壊した、父に叱
 られたと思っていたら降りても揺れていた。道路もやっこで構ってこられる状態
 だった。家は壊れなかったが、棚のものは落ちていた。堤防決壊という噂も流れた
 が、実際は壊れていなかった。津波が来るというので海まで見に行ったが、
 実際は来なかった。八戸町の友人の家が屋根だけになっていた。当時海外協力隊に
 参加するために街を休みねばならない。街衛者に通っていたが、痛く先生だった。
 地震のためしばらく休みますというのが嬉しかった記憶がある。(No.15)

先の村全体が共有するような出来事以外にも、個人的な体験によって、場所が意味付けされている場合もある。先のケーススタディで紹介したEさんの様々な場所に対する思い出もこれにあたる。

桜並木も桜を移植する際には、寒風山の桜の例(寒風山の桜は寒さ枯れている。)や桜の木自体の寿命も短いため、どうせ植えるなら秋田杉のように過去の人達の意志が反映し、しかもそれによって村に貢献出来るようなモノにすべきという思いから、村長に大反対したが今となっては桜を見ると恥ずかしい気持ちになる。No.12



一個人的在出來事（再揭）

また、公民館は200組以上の村民が、結婚式に利用しており、そうした体験が場所に重ねられている場合もある。

公民館：手作りの結婚式をした。(2137-1)

30年が経過し、大湯村で育った居住者が自分も世帯を持ち、昔、自分が遊んでいた利用していた場所を、自分の子どもが使うという形で、二世帯にわたって環境が共有されている。

学校：子供の頃に通っていた。今は娘が通っている。(1137-1)
カントリーエレベーター：昔は収穫期になるとダンプが行列を作って子供心に感心した記憶がある。(1137-1)

運営への関与

その場所の運営に関与することで、個人にとって意味が付加されている場所。参加することで、一人ではできないことを実現できる。

各街区の外周道路に面した花壇は、各街区の居住者に維持管理が任されている。植えるものを話し合って決めるなど、各街路毎に工夫を凝らしており、維持作業以上の価値をもたらす。

小学校の校庭には冬になるとスケートリンクが設けられる(図表5-30)。これは、寒冷地出身の入植者が始めたもので、以降父兄が代々に渡って継承している。初期は上手く氷がはれなかったり、表面がでこぼこになったり、いろいろ苦労があった様だが、様々な人がノウハウを持ち寄り、子供に冬の娯楽を提供する様になった。現在は施設も本格化し、コンクリート製の専用庭が造られている。

スケートリンクは北海道出身の人にノウハウを教えてもらい、みんなで工夫してリンクをつくった。自身も参加。おそらく近所のYさんも参加。自分が働きかけることによって要望が達成される。その理由は人数が少ないからというよりも1村1校なので教育の平等ということを考えることなく実現しやすい、身軽であるというメリットがある。No.12

人のつながり

図表5-31は、防風林の中に半ば非合法的に作られた場所である。ここには、庭師の試験を練習するのに必要な木や石などが置かれており、村内で庭師試験を受ける人たちの間で密かに伝承されている場所である。上述した「運営への関与」の一例と見ることが出来るが、場所を維持運営していくというより、場所との関わり方が一過的で、後継に伝承されていく点に特徴がある。



村報：昭和56年12月号より



図表5-30 スケートリンク



図表5-31 庭師試験の練習場

5章：地域レベルの居住環境の変遷（特徴のある場所の誕生）

近年このような、食用が可能な果実や木の実などの実を付ける樹木を（Edible Landscape）と呼び、環境との親和性を高めるものとしての可能性が指摘されている。

一広瀬 おおがた 平成元年11月号

約2万個の大収穫



村報：平成7年11月号より

収穫

センターベルトに植えられた柿の木は、老人会が管理しており、毎年収穫した柿は老人会を通じて近隣や、学校に配付している。

これは先述した「運営への関与」の一例とも考えられるが、生産物が他者との交流のきっかけにもなっている。

他者の仲介

自分自身が関わらなくても、自分の親近者が利用することでアイデンティティを持つ場所。村外から嫁いできた居住者も、子どもが小学校に入學し、保護者として学校の行事に参加するようになり、保護者同士で知り合いも出来た。この様に、子どもを媒介として場所と関わりを持ち、結果的に自分にとってもアイデンティティのある場所になっている。

村の中で印象に残っている色々な場所は、子どもの成長の過程でアプローチしたもの。体育館は長女がバレーボールをやっていた、勝った負けた云々と悲喜こもごもの思い出がある。(No.11)

予定を超える機能

物産センターの脇にある自動販売機コーナーは、幹線道路の利用者を見込んで24時間営業している。夜でも明かりがついている公共空間が他にないこともあり、夜は若者の集まる場所になっている。

自動販売機コーナーに夜中に集まる。(2137-3)

このように、意図した用途とはずれるが、それが本来的に予定、準備された機能のカバーできなかった用途を供し、それが場所としての意味や価値を強化させている。

定期的を使う場所（慣習、習慣）

恒例で行っている行事や、紅葉など季節的に毎年起きることなど規則的に関わっている場所。頻度は1年に1回のものもあれば、毎週決まった曜日のサークル活動のように頻繁なものもある。上述した日常的に使う場所よりは利用頻度が低い、紅葉の様に季節感や、墓参りのような年中行事など、印象深い体験と結びつく場合もある。



アンケートより

5-7 地域に蓄積される知識

「地域の知恵」としての情報の共有

前述した場所の意味付けは、場所に対する記憶や出来事、(予定されていない)機能などの情報であり、場所を通して地域に対する知識の蓄積ということが出来る。他にも、地域の中ではお互いに共有され蓄積されているものがある。

3章では、増改築のノウハウが建物本体や、業者、個人的なつながりなどを通して流通しストックしている事例を指摘したが、増改築のノウハウ以外にも村内には場所や人に従属して流通している知識がある。

まず、一つ挙げられるのは個人の持っている能力や特徴が広く村内で伝わっており、そうした知識が各所で生かされている例である。インタビュー調査ではお互いがどのくらい知り合っているかを聞くために「パソコンをお持ちですが、分からないときはどうしますか。」「ご近所に同じ様な趣味をお持ちの方はいらっしゃいますか。」等、村内居住者の個人名を聞き出すことを試みたが、「パソコンなら〇〇さんが詳しい」、「ソーラーカーは〇〇さん」、「修理道具は〇〇さんが色々持っている」など何人かの人名が複数の居住者から挙げられた。パソコンに詳しいとされる人物には直接インタビューを行ったが、人づてに頼まれることも含めて実に多くの人から、パソコンに関して様々な質問を受けるという。

パソコンは本を読んで勉強した。自分の写真を取り込んで年賀状を作ったりするが、そういうときはサンルールなどの写真にして大湯村の近況を知らせるようにしている。こういう年賀状は郷里の鳥取の知人に出したりする。パソコンのことはTさんが詳しいので、Tさんがうちの担当。No.10

コンピューターのことならTさん。彼は寝るのも忘れてやる人。わかんなくてメールを入れるとすぐ返事くれる。信者がたくさん居る。コンピューターはあまり使ってなかったが、青色申告しようと思うと簿記が必要だからやろうと思った。No.12

コンピューターのことに関しては、TMさん、Hさん、友人のOさんや、マックについてはKさんなどに聞けばいい。Kさんは県内でも有名な人で、村内にもマックユーザーは多い。本屋にもマックの雑誌は多い。No.15

他にも、自分の経験や知識を何らかの出来事の際に提供している例もあった。

秋田市内の中学校で、豪雪の時、邪魔になった雪をグラウンドに積んだ所、1m地盤が下がったという事件があった。だから、村で子どものために、校庭に雪を集めて山を作るという話があったときはこの例を紹介した。No.7

大湯村はいろんな場所の出身者がたくさんいるので、ある意味全国の情報が集まってくる(情報豊富)。そのため、その出身地方の知識もいろいろ活用できる。全国の知識から村に合うのを選ぶ。No.12

5章：地域レベルの居住環境の変遷(特徴のある場所の誕生)

このように、適任者同士を結び付けるネットワークの背景には、大湯村の居住者が長年の付き合いの中で、お互いの特徴や持っている能力、知識といったものを少しずつ認識しており、そうした断片的な知識、情報が村内の組織やサークル活動など、様々なネットワークを通して共有されることで、地域に蓄積され活用される「地域の知恵」というべきものの存在が指摘できる。

地域に蓄積された情報から生まれるあたらしいつながりや場所

こうした地域の蓄積が生かされることで、個人では出来ないような大きな働きかけを地域に対して行い、結果、新しい場所が生まれた例もある。

総合中心地から少し離れたところにあるクルミ園は、防風林として植えられたクルミの木の実を障害者や高齢者が収穫し、それを加工して地域の特産物として販売する組織である。これは、防風林に適した木を探していた人、故郷の庭にあったクルミを農地に植えていた人、障害者や高齢者のための軽作業を探していた人、特産物になるようなものを探していた人、樹木に詳しい人などがそれぞれがお互いの知識とノウハウを持ち寄るかたちで実現したものである。これらの人々は村内で別々に活動をしていたが、村内のいくつかの組織や人を媒介として知り合い、一緒に活動することで一人では成し得ない大がかりな活動を実現している。

大湯村内のサークル活動などの組織やその活動拠点は、居住者同士が知り合いになるきっかけとして機能するが、こうしたネットワークの連鎖反応で新しく作られた場所といえる。

他にも、寒冷地出身の居住者の協力で毎年、校庭につくられていたスケートリンクが、居住者が様々なノウハウを持ちよることで軌道に乗るようになり、最後は専用のスケートリンクをつくるに至った例や、三重県出身者の口利きがきっかけで伊勢神宮から社を譲り受け、神社の建立を実現した大湯神社などが例として挙げられる。



クルミ園



大湯神社



干拓時に一番最初に湖底が干上がった場所(微妙に高度が高い場所)では、干拓完了時には干陸式が行われ、奉納相撲が行われた。大湯村内では唯一誕生時から記念性を帯びた場所であり、現在そこは大湯神社となっており、記念植樹は鎮守の森となっている。神社の社は伊勢神宮の式年遷宮時に払い下げられたもので、三重県出身の入植者が安堵の窓口となることで、払い下げが実現したものである。こうしたエピソードはインタビュー時には多くの人から聞くことが出来、村内では広く共有されている記憶だともいえる。現在も毎年10月には例大祭が行われ、正月に初詣に出かける人も多い。

図表5-32 新しくつくられた場所

5-8 まとめ

- (1) 記入マップによる活動領域の検討。
(2) 村内の交流活動、(3) 場所の意味付けに関して検討し、その結果もたらされる地域に蓄積される情報について考察した。

核を持った広域化

大湯村は計画の段階で車の利用を前提とした地域計画(通農式、ラドバーンなど)が行われていたが、周辺の幹線道路にロードサイドショップ、郊外型大型店舗(船越地区のジョイフルタウンなど)がつくられ、大湯村が周辺地域も含めた車社会圏に組み込まれることで、広域な活動領域の中から商店、施設を選択的に利用することが可能になっている。

また、大湯村村内の施設はもともとは、商業施設も含め村内の利用を想定し、そこで一定の生活が完結する衛生都市のような地域計画がなされていたが、村内からの利用を想定した施設がつくれるなど、広域な周辺地域との関係性を配慮し、村内施設の機能が変化している。

ただし、徒歩圏である村内には、生活を充足するための機能は最低限確保されており、車の利用によって実現しているのは選択肢の拡張であり、ここでの広域化(郊外化)は、車なしでは生活が成立し得ないエッジシティブな広域化とは異なる、核を持った広域化と言える。

行動圏と軸性

居住者の行動圏は、住居とセンターベルトの中心部分をつなぐ形で展開されており、センターベルトが持ち得た軸性によって規定される傾向が指摘できる。

全員参加から同好の士へ

村内の交流活動は、サークルに関しては、活動に対する参加不参加が二極化しており、行事の参加に関しても以前ほどの参加率でなく、選択的な参加となっている。同時期に入植し結束が固かったこともあり、何事も村民総決起状態だったのが、自分の興味のあるサークルや行事に選択的に参加し、そこで自分と趣味、志を同じくする少数の仲間と濃密に付き合うかたちにシフトしつつある。また、村内にとどまらず村外も含めた広域を志向する例も見られた。

5章：地域レベルの居住環境の変遷(特徴のある場所の誕生)

アイデンティティのある場所へ

大湯村の村内は入植当時は、全く何の手がかりもない場所であったが、30年の居住を経て、村内の各所は居住者によって様々な意味づけられており、アイデンティティのある場所になっている。居住者がそうした場所とつながりを持つきっかけとしては、そこで提供される体験や機能(計画、非計画)、出来事・事件による記憶、維持運営への参加、などが挙げられる。

大湯村は地形もなく、伝承もなく、ジークエンスなど視覚的、空間的な起伏も少ない環境であるが、こうした環境でも居住者による生活の積み重ねで場所性が獲得されていると言え、ニュータウンなど計画的居住環境の環境醸成の可能性を示唆するものとなっている。

また、場所だけでなく、居住者個人に対しても、長い居住生活でお互いの人物像を理解し合っており、村内での活動や人付き合いに関して、様々なスタンスが容認されるようになっている。

記憶装置としての地域、地域の知恵の蓄積と活用

大湯村の居住者が長年の付き合いの中で、お互いの特徴や持っている能力、知識といったものを少しずつ認識し、そうした断片的な知識、情報が村内の組織やサークル活動など、様々なネットワークを通して共有されることで、地域に蓄積され活用される「地域の知恵」というべきものの存在が指摘できる。この他にも、共通の記憶の場所や、増改築のノウハウなど、様々な形式や方法で知識や情報が地域にストックされている。

また、くろみ園の様にそれぞれが知識やネットワークを持ち寄って新しい場所が自発的につくられていく過程は、地域の知恵の還元作用ということもでき、居住者が一方的に環境に働きかけ、加工していくのではない、情報環境として居住者と場所は分かちがたい関係を構築しており、トランザクショナルな関係(註)を見ることが出来る。

(註) トランザクショナルな関係：人間と環境とを互いに独立し、一方が他方を規定する存在とみなす決定論、相互作用論ではなく、双方が分離できない一体として過去から未来にわたって変容していく状態として把握すること。(高橋憲志の定義による)

6章：まとめ

住宅レベルの居住環境の変遷（3章）	105
住区レベルの環境の変遷（4章）	106
地域レベルの居住環境の変遷（5章）	107
計画的居住環境の醸成モデル	108
つくられたものから、つくったものへ	109
現在の住宅地計画への示唆	109
現況から見た初期計画の位置付け	112

り、入植期の擦り合わせ以来の大きな改変期を迎えている。また、こうした世代交代のような大規模な見直しは今後も周期的に起きる事が予想される。

増改築を時期毎に見ていくと、不足の追加から内容・外見の充実へと移行し、量から質へシフトする傾向が見て取れる。

また、増改築のノウハウや技術が工務店や近隣の増築手法の相互参照といったかたちで村内で蓄積しており、こうした知識の共有・蓄積が、居住環境の持続に貢献している可能性や、大潟村様式とでもいうべき住戸形態を生んでいる可能性が指摘できる。

住区レベルの環境の変遷（4章）

街路景観の決定要素

ここでは街路空間の景観決定要素を、

- (1) 宅地における住宅の位置、
- (2) 外構（住宅まわりの宅地）の使われ方、
- (3) 宅地と街路の境界状態の3点に分割して検討を進めた。

< (1) 宅地における住宅の位置 >

各宅地での住宅の位置は「南に開く」、「西に閉じる」の2傾向がみられ、それぞれ日照、防風が原因であると推測される。

街路境界付近建物の配置傾向を4つのパターン（奥配置、直交配置、二棟配置、近接配置）に分けて検討したが、宅地の入り方毎でパターンの分布に偏りが見られ、街路境界付近の住戸の配置構成が、街路毎（＝宅地の入り方が同じ）で収束する傾向が見られた。

< (2) 外構（住宅まわりの宅地）の使われ方 >

外構の使われ方は、作業場化、農園化、庭園化、の3つに大別され、庭単体として独立しているのではなく、住宅や街路との相互影響で、その使われ方や街路との境界が決定づけられている。

< (3) 宅地と街路の境界状態 >

宅地と街路の境界近傍の「生け垣・塀」、「花壇」、「側溝」、「車庫」、「引き込み」の5要素に関して考察。

街路景観の決定要素の相互関係と街路景観の収束

街路景観の構成要素の中には、関連があり同時に存在することが多いものや、同じ宅地では一緒に存在することが考えられないものがある。ここでは、相互関係をポジティブなものやネガティブなものに分けて分析した。方向（宅地と街路の関係）で建物の配置が決定されることが、それ以外の要素にも関連しており、こうしたつながりによって景観醸成

の方向付けが行われていると考えられる。

また本論では、上で述べた相互関係を踏まえ、街路景観の典型的な収束例4つを実例に即して検討した。

以上より、

- ・大潟村独特の街路景観が醸成されており、同様に郊外型の街路景観の醸成の可能性があること。
 - ・細かいデザインコードの規定で街路景観を整えるのではない、デザインコードなきデザインコントロールの可能性
 - ・幾何形態がつくる景観の可能性
- を示した。

地域レベルの居住環境の変遷（5章）

地域レベルの居住環境の変遷に関しては、

- (1) 記入マップによる活動領域の検討、
- (2) 村内の交流活動、
- (3) 場所の意味付けに関して検討し、
- ・行動圏の核を持った広域化
- ・軸性の行動圏への影響
- ・交流の全員参加型から同好の士型へのシフト
- ・場所のアイデンティティの獲得

を明らかにした。

また、その結果もたらされる地域に蓄積される情報について考察した。大潟村の居住者が長年の付き合いの中で、お互いの特徴や持っている能力、知識といったものを少しづつ認識し、そうした断片的な知識、情報が村内の組織やサークル活動など、様々なネットワークを通して共有されることで、地域に蓄積され活用される「地域の知恵」というべきものの存在が指摘できる。この他にも、共通の記憶の場所や、増改築のノウハウなど、様々な形式や方法で知識や情報が地域にストックされている。

また、それぞれが知識やネットワークを持ち寄って新しい場所が自発的につくられていく事例は、地域の智慧の還元作用ということもでき、居住者が一方的に環境に働きかけ、加工していくのではなく、情報環境として居住者と場所は分かちがたい関係を構築しており、ここにトランザクショナルな関係を見ることが出来る。

計画的居住環境の醸成モデル

計画的居住環境の変遷に関して、3つのスケールに分けて分析を進めてきたが、これらの空間はそこで生活する居住者が同時に体験し得るものである。計画され準備された居住環境と折り合いをつけ、そこで生活を展開していく際の、居住環境が醸成していく要件は、以下の4つに分類できる。

(1) 初期計画（現状）の矛盾点との対立、克服

計画され、与えられた環境と実際の生活との擦り合わせ。相対する要因を統合するプロセスは、より居住環境を自分に親近なものとして引き寄せる過程であると考えられる。例としては、住宅の入植時数年内に行われた増改築、初期計画では予定されていなかった機能の追加、近隣地域の車社会化や、営農方法の変化による地域の使われ方や施設の変化などが挙げられる。

また、こうした矛盾点の発生、克服は居住の初期だけでなく、経年的なライフスタイル、住欲求の変化によっても起こり得る。特に現在は、世代交代による2世帯化の波が押し寄せており、現状住居に対する見直し期となっている。

(2) アイデンティティの確保

同じように均質だった空間に意味付けし、差異化する。増改築を経て、街路毎の特徴を獲得した街路空間（4章）や、様々な記憶や意味を付加した村内の場所（5章）などがこれにあたる。また、居住者個人に対しても、居住以降の付き合いで、お互いの人物像を理解し合い、村内での活動や人付き合いに関して、様々なスタンスが容認されるようになっていることもこれにあたる（5章）。

(3) ストック（知識の環境への埋め込み）

アイデンティティ以上の付加的な情報を、地域やコミュニティが蓄積すること。居住者が長年の付き合いの中で、お互いの特徴や持っている能力、知識といったものを少しずつ認識し（＝「アイデンティティの確保」）、そうした断片的な知識、情報が村内の組織やサークル活動など、様々なネットワークを通して共有されることで、地域に蓄積され活用される「地域の知恵」（5章）や、住居の増改築のノウハウや技術が工務店や近隣の増築手法の相互参照といったかたちで村内で蓄積されること（3章）。

(4) 還元（トランザクショナルな環境の構築）

蓄積された知識により、生活が支えられること。また、クルミ園（5章）のように、こうした蓄積の集成によって、居住環境に新しい展開を生むこと。情報環境として、人と場所が分かちがたい関係を作る。

これら、(1)～(4)は、双六のようにステップアップしていくものではない。入植初期においては、(1)→(2)→「(3)、(4)」という傾向も指摘できるが、世代交代による初期計画（現状）の矛盾点との対立・克服など、より戻しもあり、単純なプロセスではなく、(1)、(2)、(3)が渾然と行われる中で、上位な事象である(4)の状況が生み出されていくと考えられる。

つくられたものから、つくったものへ

大湯村の、居住環境の大湯村の居住者にとって、初期の居住者環境は計画者に準備され、与えられたもの（「つくられたもの」）であったと言える。しかし、こうした環境の移行を経ることで、居住環境は居住者と一体化した「つくったもの」に進化している。

現在の住宅地計画への示唆

図表6-2は、アワニー宣言（サステナブルコミュニティの指標）で提案されている事柄を、大湯村の現状に当てはめて検討したものである。アワニー宣言は1991年に発表されたものであり、当然大湯村の建造よりもずっと後につくられたものであるが、大湯村の居住環境は、アワニー宣言で示されているものに近似している点が多いことが分かる。

この理由として考えられるのが、アワニー宣言自体で盛り込まれている事項の多くが、かつての住区計画で提案されていたことのリバイバルであるということである。アワニー宣言発表の背景には、エッジシティを代表とするアメリカの極度に車に依存した地域社会への反省があり、こうした地域社会へのアンチテーゼとして、徒歩圏を重視した旧来の地域計画の復権を目指したものであるといえる。奇しくも、大湯村は戦後になって急速に日本にも紹介されるようになった欧米の1940年代の地域計画（ペリーの「近隣住区」など）の蓄積の影響を受けたものであり、緑道や配置計画、歩車の分離を目指した街路計画などの形態にアワニー宣言との共通項が見られるのはこのためであると思われる。

サステナブルコミュニティで目標とされているもののうち、こうした旧来の影響と一線を画すのが、「コミュニティに一体感を与える、帰

「属意識を与えるデザイン」である。ここでの、「属意識を与えるデザイン」は、ポストモダニズム以降のデザイン手法を色濃くするもので、アイデンティティの確保のために、デザインコードの重視、あるテーマに沿った住環境の整備など、多くの物理的制約を伴うものである。

本研究では郊外型の規則的な街路の街路景観が、デザインコードを用いることなく、特徴ある景観に収束する事例を明らかにした。これはアイデンティティを持ち、「属意識を与えるデザイン」のもう一つの成立過程であり、デザインを上意下達的に伝えるのではないデザインコントロールの可能性が指摘できる。また、先述した環境醸成モデルにあるような居住環境のつくられ方は、セレブレーション（1章で紹介したサスティナブルコミュニティ）のような入念なつくり込みとは違う、居住環境の成立過程であり、持続可能性に対する異なるアプローチの可能性が指摘できる。

	志摩市	大高村
■1 序言 (Preamble)		
現在の都市および郊外の開発パターンは、人びとの生活の質に対して重大な障害をもたらしている。従来の開発パターンは、以下のような現象をもたらしている。		
・自動車への過度の依存によってもたらされる交通混雑と大気汚染		
・誰もが利用できるような貴重なオープンスペースの喪失		
・伸びきった道路網に対する多額の補修費の投入		
・経済資源の不公平な配分		
・コミュニティに対する一体感の喪失		
過去および現在の最良の事例に依拠することによって、そのコミュニティのなかで生活し、働く人びとのニーズに、より的確に対応するようなコミュニティをつくりだすことが可能である。そのようなコミュニティをつくりだすためには、計画策定の段階で以下のような原則を遵守することが必要である。		
■2 コミュニティの原則 (Community Principles)		
①すべてのコミュニティは、住宅、商店、勤務先、学校、公園、公共施設など、住民の生活に不可欠なさまざまな施設・活動拠点をあわせ持つような、多機能で、統一感のあるものとして設計されなければならない。	★★★	施設や活動拠点は一通り揃っている。しかし、近隣の地域がないため、選択的な利用は出来なかった。現在は車を用いることで、選択的な利用を実現している（核のある広域化）。
②できるだけ多くの施設が、相互に気軽に歩いて行ける範囲内に配置するように設計されなければならない。	★★★	全て歩いていける。ただし、ベルト状に配されているため、端から端に行くには結構歩くことになる。
③できるだけ多くの施設や活動拠点が、公共交通機関の駅・停留所に徒歩で歩いて行ける距離内に整備されるべきである。	★★	停留場へは歩いていける。村内を循環しているバスもある。ただし、本数は少なく、曲人の車に頼りがちである。
④さまざまな経済レベルの人びとや、さまざまな年齢の人びとが、同じ一つのコミュニティ内に住むことができるように、コミュニティ内ではさまざまなタイプの住宅が供給されるべきである。	★	住宅のタイプは様々であったが、増築、改築が進み、「様々なタイプの住宅」になりつつある。農業経営が中心であることから、後継者もおり、年々多様化していると言われている。ただし、高校・大学が遠方なことから10代後半から20代前半までの世代は少ない。経済レベルは様々と言えは不明。（日本自体が経済レベルの格差は小さい）
⑤コミュニティ内に住んでいる人びとが喜んで働くような仕事の場が、コミュニティ内で提供されるべきである。	★★	仕事の場はたくさんある。ただし、選択性が豊富とは言えない。
⑥新たにつくられるコミュニティの場所や性格は、そのコミュニティを包含する、より大きな交通ネットワークと調和のとれたものでなければならない。	★★	場所に関しては、過疎対策として坂田から離れた位置に配置した。物産センターなど通過交通に対する貢献もある。
⑦コミュニティは、商業活動、市民サービス、文化活動、レクリエーション活動などが集約的になされる中心地を保持しなければならない。	★★★	持っている。それぞれの町会には児童館と公園を持ち、中央のグリーンベルトにはそれらを集約する施設がある。

⑥コミュニティは、広場、緑地帯、公園など用途の特定化された、誰もが利用できる、かなりの面積のオープンスペースを保持しなければならない。場所とデザインに工夫を凝らすことによって、オープンスペースの利用は促進される。	★★★	オープンスペースは十分ある。山を作ったり、ゲートボール場を作ったり、用途の特定化も徐々にではあるが進んでいる。
⑦パブリックなスペースは、百億人でも人びとが興味を持って行きたがるような場所となるように設計されるべきである。	×	夜は確かに寂しい。
⑧それぞれのコミュニティや、いくつかのコミュニティがまとまったより大きな地域は、農業のグリーンベルト、野生生物の生息環境などによって明確な境界を保持しなければならない。またこの境界は、開発行為の対象とならないようにしなければならない。	★★★	明確な境界が存在する。ただし、コミュニティに対するベルト部分の比がやや大きすぎるとも言える。
⑨通り、歩行者用通路、自転車用通路などのコミュニティ内のさまざまな道路は、全体として、相互に緊密なネットワークを保持し、かつ、興味をそそられるようなルートを提供するような道路システムを形成するものでなければならない。それらの道は、建物、木々、街灯など周囲の環境に工夫を凝らし、また、自動車利用を減退させるような小さく細いものであることによって、徒歩や、自転車の利用が促進されるようなものでなければならない。	★★★	自転車利用を減退させる仕掛けはないが、住戸をループ道路で細かく分割するなど自転車の利用が分散されるような工夫はされている。車道の他に歩道も計画されていたが、実際の利用は余りなかった。
⑩コミュニティの建設前から敷地内に存在していた、天然の地形、排水、樹木などは、コミュニティ内の公園やグリーンベルトのなかまはじめとして、可能な限り元の自然のままの形でコミュニティ内に保存されるべきである。	---	以前の風景を継承させるような自然の地形、植生など一切ない。ここにあるのは全て作られたものである。
⑪すべてのコミュニティは、質素を原則とし、産業物が最小になるように設計されるべきである。	★	初期の住宅はほとんど同じ仕様であったため、建設時の資材費や省資源物は実現したと言える。また、増設家は付加する形で進んでいる場合が多く、住宅の廃棄は少ない。（生活廃棄に関しては、特に考慮されていない）
⑫自然の排水の利用、干ばつに強い地形の活用、水のリサイクルの実施などを通じて、すべてのコミュニティは水の効率的な利用を追求しなければならない。	×	水源への農業等の産入など、水源の効率的な利用は上手くいっていない。
⑬エネルギー節約型のコミュニティをつくりだすために、通りの方向性、建物の配置、日陰の活用などに十分な工夫を凝らすべきである。	★	防風林は配されているが、配置や日陰の活用はなされていない。
■3 コミュニティを包含するリージョン（地域）の原則 (Regional Principles)		
①地域の土地利用計画は、従来の、自動車専用的高速道路との整合性が第一に考えられてきたが、これからは、公共交通路線を中心とする大規模な交通ネットワークとの整合性がまず第一に考えられなければならない。	×	駅までは通る、バス交通も十分でなく、公共交通路線等の交通ネットワークとの整合性は低い。
②地域は、自然条件によって決定されるグリーンベルトや野生生物の生息環境などの形で、地の域域との境界を保持し、かつ、この境界線を常に維持していかなければならない。	★★★	明確な境界が存在する。境界は農地であり、生産性を考えると、スプロールの対象とはなりにくく、今後も境界が維持されると考えられる。
③市庁舎やスタジアム、博物館などのような、地域の中心的な施設は、都市の中心部に位置していなければならない。	★★	施設群は中心に配されている。ただし、博物館など、より広域からの利用を期待する施設は中心から離れた、周辺地域からのアクセスの良い位置に計画されている。
④その地域の歴史、文化、気候に適合し、その地域の独自性が表現され、またそれが強化されるような建設の方法および資材を採用するべきである。	★★	開拓時に算入された三角屋根は、30年経過した現在では、地域の独自性を表すものとして認識されている。
■4 実現のための戦略 (Implementation Strategy)		
①全体計画は、前述の諸原則に従い、状況の変化に対応して常に柔軟に改訂されるものであるべきである。	★	柔軟に改訂されてきた。過当たり野とも言えるかもしれない。
②特定の開発業者が生導役を担ったり、地域のそれぞれの部分部分が地域全体との整合性もいままに展開されることを防ぐために、地元の地方公共団体は、開発の全体計画が決定する際の適正な計画策定プロセスの保持に責任を負うべきである。全体計画では、新規の開発、人口の流入、土地の開発などが許可される場所が明確に示されなければならない。	★★★	農地と住宅以外は完全に行政の範囲にあり、民間開発は考えにくい。
③開発事業が実施される前に、上記諸原則に基づいた詳細な計画が策定されなければならない。詳細な計画を策定することによって、事業が順調に進捗していくことが可能となる。	★★	経過時の計画は買付方法、入植者数などの変更のために二転三転した。現在の村では詳細な計画がなされているが、ハブ経済圏後は計画の変更を余儀なくされている面も多々ある。
④計画の策定プロセスには誰でも参加できるようにするとともに、計画策定への参加者に対しては、プロジェクトに対するさまざまな課題が視覚的に理解できるように資料が提供されるべきである。	★★	毎月発行される広報誌「太陽」で村の様々な計画は村民に公示されている。毎回の選挙では80%を超える投票率を誇り、村民の行政への参加意識は高い。また、「クルマ」など、地域の働きかけで場所がうまれるなどしている。

図表6-2 アワニー宣言と大高村の現状の比較

- ・片寄俊秀「実験都市」、社会思想社、1981
- ・福原正弘「ニュータウンは今40年目の夢と現実」、東京新聞出版局、1998
- ・Edward Relph「場所の現象学」、筑摩書房、1991年9月20日
- ・Yi-Fu Tuan「トポフィリア-人間と環境」、せりか書房、1992年
- ・Edward Relph「都市景観の20世紀 モダンとポストモダンのトータルウォッチング」、筑摩書房、1999年10月
- ・大場正明「サバービアの憂鬱」、東京書籍、1993年11月
- ・松村秀一「住宅」という考え方」、東京大学出版、1999年8月
- ・George Ritzer「マクドナルド化する社会」、早稲田大学出版社、1999
- ・片寄俊秀「千里ニュータウンの研究 計画的都市建設の軌跡・その技術と思想」、産報出版株式会社、1979
- ・小田光雄「＜郊外＞の誕生と死」、青弓社、1997
- ・William H. Whyte, Jr.「組織の中の人間」、東京創元社、1959
- ・若林幹夫「サバービアの系譜 (『アクロス』No.218)」、PRARCO出版、1992
- ・Jackson, K.T.「Crabgrass Frontier」、Oxford University Press、1985
- ・Fishmann, R.「ブルジョワ・ユートピア」、勁草書房、1990
- ・川本三朗「都市の風景学」、駁々堂、1985
- ・武田徹「『ニュータウン』が崩壊する」、『views』1996年10月号、1996
- ・Clarence Arthur Perry「近隣住区論」、鹿島出版会、1975
- ・戸谷英世「アメリカの住宅地開発 ガーデンシティからサステナブルコミュニティへ」、学芸出版、1999
- ・若林幹夫「都市のアレゴリー」、INAX出版、1999
- ・佐伯睦、佐々木正人ほか「アクティブ・マインド -人間は動きの中で考える-」、東大出版会、1990年
- ・西山康雄「アンウィンの住宅地計画を読む -成熟社会の住環境を求めて-」、彰国社、1992
- ・川村健一、小門裕幸「サステナブルコミュニティ」、学芸出版、1995
- ・住田昌二「日本のニュータウン開発 -千里ニュータウンの地域計画学的研究-」、都市文化社、1984
- ・安田孝「郊外住宅地の形成 大阪・田園都市の夢と現実」、INAX出版、1992年
- ・吉原直樹「都市の思想 -空間論の再構築に向けて-」、青木書店、1993
- ・高田光雄「日本における集合住宅地計画の変遷」、放送大学(教材)、1998
- ・橋弘志ほか「間主観性の人間科学 -他者・行為・物・環境の言説再構築に向けて-」、言義社、1999
- ・宮台真司「まぼろしの郊外 -成熟社会を生きる若者たちの行方-」、朝日新聞社、1997年12月1日
- ・西川祐子「借家と持ち家の文学史 -「私」のうつわの物語-」、三省堂、1998年11月
- ・10+1 Vol.1「ノンカテゴリー・シティ」、INAX出版、1994
- ・荒木経惟「都市の幸福」、マガジンハウス、1993
- ・ホンマタカシ「TOKYO SUBURBIA」、光琳社、1998
- ・エベネザー・ハワード「明日の田園都市」、SD選書、1968年7月
- ・横文彦、若月幸敏、大野秀敏、高谷時彦「見えがくれする都市」、SD選書、1980年6月
- ・戸原義信「街並みの美学」、岩波同時代ライブラリー、1990年3月(原著1979年2月)

- ・芦原義信「続・街並みの美学」, 岩波同時代ライブラリー, 1990年11月(原著1983年7月)
- ・佐藤滋+街区環境研究会「現代に生きるまち」, 彰国社, 1990年3月
- ・鈴木成文、小柳津静一、初見学「『いえ』と『まち』」, SD選書, 1984年6月
- ・佐藤剛也「街並みの視覚体験に関する研究-微少な移動と視覚の手応え-」, 東京大学修士論文, 1998年2月
- ・小林秀樹「集住のなわばり学」, 彰国社, 1992年8月
- ・Yi-Fu Tuan「空間の経験」, ちくま学芸文庫, 1993年11月
- ・高橋篤志、長澤泰、西出和彦編「シリーズく人間と建築>1 環境と空間」, 朝倉書店, 1997年10月
- ・日本建築学会編「人間-環境系のデザイン」, 彰国社, 1997年5月
- ・鈴木毅「人の『居方』からの環境デザイン試論」, 1997年
- ・森田芳郎は「ケア住宅間の共同性に関する考察分譲セミデタッチドハウスにおける集住システムの変容その1」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1998年9月
- ・柴田建は「地域景観の個性化とその要因に関する分析分譲セミデタッチドハウスにおける集住システムの変容その1」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1998年9月
- ・舟橋國男「環境行動研究におけるトランザクショナルリズムに関する一考察-理論の概要並びに建築計画学との関係-」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1989年10月
- ・東京大学建築学科高橋篤志研究室「『地域空間の環境行動的研究』(平成6~9年度文部省科学研究費補助金基盤研究(A))」, 1998
- ・篠崎正彦「『生活資源』から見た地域における居住者の環境行動に関する研究」, 東京大学学位論文, 1996
- ・橋弘志「高齢者にとっての地域環境に関する考察-根津・赤羽台におけるケーススタディ」, 東京大学修士論文, 1992年
- ・八郎潟新農村建設事業団編「集落建設の調査資料」, 1975年10月
- ・八郎潟新農村建設事業団編「集落建設の調査資料」, 1976年7月
- ・八郎潟新農村建設事業団編「八郎潟新農村建設事業(国史)」, 1976年10月
- ・八郎潟新農村建設事業団編「国営八郎潟干拓事業および八郎潟新農村建設事業技術資料目録」, 1977年10月
- ・八郎潟新農村建設事業団/東北農政局編「八郎潟干拓事業および八郎潟新農村建設事業設計図集」, 1977年3月
- ・八郎潟新農村建設事業団編「新農村建設の歩み八郎潟新農村建設事業の記録写真集」, 1976年9月
- ・東北農政局/八郎潟新農村建設事業団編「土地利用計画面積表(八郎潟干拓)」, 1977年3月
- ・八郎潟新農村建設事業団編「八郎潟新農村建設事業出来形図面(1)(2)」, 1976年
- ・八郎潟新農村建設事業団編「八郎潟農村基本計画試案」, 1961年3月
- ・八郎潟建設事務所編「八郎潟新農村建設基本計画」, 1964年3月
- ・日本都市計画学会/集落研究委員会編「八郎潟干拓地新農村建設計画」, 1964年3月
- ・日本建築学会/農村計画特別委員会編「八郎潟干拓地新農村建設計画(昭和40年度研究報告)」, 1966年3月
- ・日本建築学会/農村計画委員会編「八郎潟干拓地新農村建設計画」, 1967年3月
- ・日本建築学会/農村計画特別委員会編「八郎潟干拓地新農村建設計画(1967年度研究報告)」, 1968年3月
- ・日本建築学会/農村計画委員会編「八郎潟干拓地新農村建設計画(1968年度研究報告)」, 1969年3月
- ・日本建築学会/八郎潟新農村計画委員会編「八郎潟新農村建設計画」, 1972年3月
- ・日本建築学会編「八郎潟新農村建設計画研究報告」, 1973年3月

- ・日本建築学会編「八郎潟新農村建設計画研究報告」, 1974年8月
- ・日本建築学会/八郎潟委員会編「八郎潟新農村建設計画(1974年度研究報告)」, 1975年3月
- ・日本建築学会編「八郎潟新農村建設計画研究報告」, 1976年3月
- ・八郎潟新農村建設事業団編「八郎潟新農村建設計画研究報告昭和51年度」, 1977年3月
- ・日本建築学会/農村計画委員会編「八郎潟干拓地新農村農家住宅冬期住い方調査」, 1968年2月
- ・農林省農地局八郎潟干拓事業対策室編「八郎潟干拓の農業および農村計画について」, 1962年3月
- ・八郎潟干拓事業農村建設研究会編「八郎潟干拓事業農村建設研究会報告」, 1963年6月
- ・日本都市計画学会/集落計画委員会編「研究報告集/農村地域における家族型及び人口構成に関する研究ほか5編」, 1962年2月
- ・日本都市計画学会/集落計画委員会編「都市計画学会調査計画報告集八郎潟干拓地新農村建設計画報告」, 1964年12月
- ・農林省構造改善局編「八郎潟新農村建設事業誌」, 1977年4月
- ・大町知之、荻原正三、岩田俊二「八郎潟新農村の近隣交流からみた集落の構成」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1973年10月
- ・岩藤一樹、荻原正三「八郎潟新農村におけるコミュニティ組織と集会施設利用」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1973年10月
- ・川嶋雅章「八郎潟干拓地の宅地境界の実態と緑道の使われ方」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1973年10月
- ・川嶋雅章「八郎潟新農村における道の使われ方」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1974年10月
- ・安實真咲・玉置伸伍・柴田和彦・長谷川洋「八郎潟干拓地における計画住宅平面の変容過程」, 日本建築学会北陸支部研究報告集, 1993年7月
- ・SD編集部編「八郎潟干拓と新農村計画」, SDNo.22, 1966年10月
- ・坂本進一郎「八郎潟干拓地からの報告-入植者の記録」, 秋田文化出版社, 1975年8月
- ・坂本進一郎「大潟村新農村事情続八郎潟干拓地からの報告」, 秋田文化出版社, 1984年9月
- ・川辺信康「写真集潟の記憶」, 秋田魁新報社, 1991年1月
- ・秋田県教育庁社会教育課編「八郎潟の研究(社会編)」, 1965年7月
- ・秋田県教育庁社会教育課編「八郎潟の研究(民俗編)」, 1965年7月

付記

本研究は、住宅総合研究財団助成研究「居住環境の持続可能に関する研究」(主査：橘弘志)の一環として行った、秋田県大湯村の居住環境調査(1998年実施)の成果をもとにしたものである。

調査メンバーは、以下の通りであり、研究成果をそれぞれ論文としてまとめた。

岩佐明彦：本論文執筆者

砂金眞司(東京大学大学院)：

『住区環境のつくりこみに関する研究』(修士論文)

北野隆弘(東京大学)：

『居住者による「場所」づくりに関する研究』(卒業論文)

渡辺龍美(新潟大学)：

『住宅の初期計画と居住者による変革に関する研究』(卒業論文)

謝辞

多くの方のご指導、ご助力により本論文を完成させることが出来ました。

指導教官である長澤泰教授には、折に触れ多くのご教唆を頂きました。深く感謝いたします。

論文を審査して下さいました藤井明教授、大野秀敏教授、西出和彦助教授、松村秀一助教授には、多くの貴重なご指摘を頂きました。感謝申し上げます。

修士課程までの指導教官である高橋鷹志名誉教授には卒業論文、修士論文に引き続き、多方面にわたりご指導いただきました。まことに有り難うございます。

また、共同で研究を行った砂金眞司君、北野隆弘君、渡辺龍美さんをはじめ、東京大学高橋研究室、長澤研究室、西出研究室の皆様には多大なご助力を頂きました。ひとりひとりのお名前を挙げることは出来ませんが、この場を借りて御礼申し上げます。

最後になりましたが、調査対象地である秋田県大湯村の居住者及び、関係者各位の協力なしにはこの研究は成り立ちませんでした。深く感謝の念を捧げます。

アンケート調査のお願い

拝啓

秋も深まってまいります今日この頃、皆様におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。
突然このような書面を差し上げます失礼をお許し下さい。

私どもは、より良い環境を構築する設計手法を求めて、実際に生活している人の視点を切り口に、建物や地域環境と居住者の関わり方を研究しております。

大潟村は元々は全く何もないところからスタートし、居住者の皆様のご尽力により、現在のような豊かな環境を構築されている場所です。私どもにとりましてはこのような場所は、大変興味深く、示唆に富む点も多いため、このたび調査対象とさせていただきます、アンケートのお願いを差し上げた次第です。

アンケートはお住まいの変遷と、普段の生活での村内の場所の使い方をお伺いするものです。なお、調査結果はあくまで学術上の目的のみで使用し、プライバシーを侵害することは決まてございません。

お忙しいところ大変お手数をおかけいたしますが、アンケートにご回答いただいた上、同封いたしました、封筒にて10月末日までにご投函いただけますようよろしくお願いいたします。

何卒、私どもの主旨をご理解の上、ご協力いただけますようよろしくお願いいたします。

敬具

平成10年10月22日

新潟大学工学部建設工学科 教授 高橋鷹志
卒論生 渡辺龍美

東京大学工学部建築学科長澤研究室 教授 長澤 泰
大学院 岩佐明彦
大学院 砂金真司
卒論生 北野隆啓

連絡先：東京都文京区本郷7-3-1 東京大学工学部建築学科 長澤研究室 岩佐明彦

Tel: 03-3812-2111 (内6170) Fax: 03-5800-5795

e-mail: iwasa@kingo.arch.t.u-tokyo.ac.jp

内容物

調査用紙 ① (両面1枚) : ご家族のどなたかおひとりをご記入下さい。

調査用紙 ② (両面2枚) : 同じ調査用紙を複数枚同封いたしました。

ご家族の皆様のご協力をお願いいたします。

返信用封筒 : 切手の必要はございません。

ペン : このペンでアンケートのご記入をお願いいたします。返却の必要はございません。

アンケートはここから始まります。よろしくお願いいたします。

(A)

■ご家族の構成をお教えてください。

年齢	性別	出身地	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()
ご本人	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()
	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()
	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()
	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()
	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()
	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()	男・女	大湯村・秋田県内・その他 ()

これらの欄もご利用下さい→

■ご出身が大湯村以外の方にお伺いいたします。ご自分が育ったところと大湯村で、大きく違う点はどこですか。

■以下の行事の例年の参加状況をお答え下さい。(右の凡例に従って記号をご記入下さい)

(H)	盆踊り	村民運動会
クリーンアップ作戦	大湯神社例大祭	
花壇に花苗移植	千拓記念駅伝(観戦含む)	
特産品祭	農業文化祭	
ソーラーカーラリー(観戦含む)	冬季ふるさと祭り	
盆踊り	芸術文化祭	

○：昔から参加している
○：最近参加するようになった
△：昔は参加していたが今はしていない
▲：昔から参加していない
×：知らない

■以下の出来事に関して、凡例に従ってお答え下さい。

(H)	△ 温泉湧出(平成元年)	北一丁目でボーイスカウトが大キャンプ(昭和55年)
昭和天皇来村(昭和44年)	日本海中部地震(昭和58年)	
田越え中継で坂本九氏来村(昭和45年)	大雪(昭和58)	
診療所に医師就任(昭和49年)	インターハイ(ボート)開催(昭和59年)	
初の村長選挙(昭和51年)	カントリー数歳で火災(昭和60年)	
大湯神社落成式(昭和53年)	竜巻発生(昭和62年)	
村民体育館完成(昭和54年)		

○：覚えていない
○：何らかのみなちで直接関わった
△：直接知らないが伝聞等で知っている
×：知らない

無死亡事故2508日で途絶える(昭和63年)
温泉湧出(平成元年)
ボルダー音楽祭(平成3年)
南の池公園に入植記念碑が完成(平成4年)

■サークルには参加していらっしゃいますか？ また、サークルにご参加になったきっかけは何ですか。

参加している ()	参加なさったきっかけ(複数回答可)
参加していない	友人の紹介・発表会など・村の広報誌・公民館・その他 ()

■サークルに参加していらっしゃる方にお伺いいたします。ご参加になっているサークルの活動拠点はどこですか。

(村内) 自宅・主催者宅・持ち回り・その他 ()	(村外) 主催者宅・持ち回り・その他 ()
村内の公共施設 ()	公共施設 ()

■農業を営んでいらっしゃる方にお伺いいたします。(農業以外の方は裏面へお進み下さい)

■家でやる仕事はありますか、また、それは何ですか(複数回答可)

ない・ある	道具等の整備・収穫物の加工・農機具、肥料等の注文や商談・その他 ()
-------	-------------------------------------

■農場にいられているときに、昼食・休憩等は主にどこで取られますか？

自宅・農場・農場近くの格納庫・住居近くの格納庫・その他 ()	(誰と？)
---------------------------------	-------

■農場で農作業を行う時間はどのくらいですか

多い時期 () 時 ~ () 時	× () 日/週 (例)	() 時 ~ () 時	× () 日/週
少ない時期 () 時 ~ () 時	× () 日/週	↑	↑
		開始時刻	終了時刻
		週のうち作業をする日数	

アンケートは裏面に続きます。

■ お住まいの変遷についてお問い合わせいたします。ご自宅の増改築をなさっていない方は、こちらの質問までお済み下さい。
■ 現在のお住まいの中に、入居当時の住宅の痕跡は少しでも残っていますか？ また、残っているのはどの箇所ですか？

残っていない・残っている → (残っている箇所)

■ ご入居してから今までのお住まいの変遷を、増改築毎に分けてご記入ください。

回数	時期	増改築または、増えた部屋に○を付けてください。
記入例	S.48年頃	増改築・新築 玄関・縁側・居間・客間・応接間・食堂・台所・子供部屋・屋根 寝室・書斎・納戸・風呂・トイレ・車庫・倉庫・作業部屋・外壁・その他 ()
記入例	S.57年頃	増改築・新築 玄関・縁側・居間・客間・応接間・食堂・台所・子供部屋・屋根 寝室・書斎・納戸・風呂・トイレ・車庫・倉庫・作業部屋・外壁・その他 ()

複数の場合は、この様に記入して下さい。
新築の場合は、新築の間取りに合わせて○をつけて下さい。

1回目	増改築・新築	玄関・縁側・居間・客間・応接間・食堂・台所・子供部屋・屋根 寝室・書斎・納戸・風呂・トイレ・車庫・倉庫・作業部屋・外壁・その他 ()
2回目	増改築・新築	玄関・縁側・居間・客間・応接間・食堂・台所・子供部屋・屋根 寝室・書斎・納戸・風呂・トイレ・車庫・倉庫・作業部屋・外壁・その他 ()
3回目	増改築・新築	玄関・縁側・居間・客間・応接間・食堂・台所・子供部屋・屋根 寝室・書斎・納戸・風呂・トイレ・車庫・倉庫・作業部屋・外壁・その他 ()
4回目	増改築・新築	玄関・縁側・居間・客間・応接間・食堂・台所・子供部屋・屋根 寝室・書斎・納戸・風呂・トイレ・車庫・倉庫・作業部屋・外壁・その他 ()
5回目	増改築・新築	玄関・縁側・居間・客間・応接間・食堂・台所・子供部屋・屋根 寝室・書斎・納戸・風呂・トイレ・車庫・倉庫・作業部屋・外壁・その他 ()

■ 増改築の際にご考慮になったことのうち、特に重視されたことを3つまでお選びください。

値段・隣との距離・日照・防風・防音・通風・面積・風水・母屋とのつながり・仕事場との位置関係
近所とのデザイン的な調和・将来的な変更・人や車の入り方・植栽の位置・その他 ()

■ 増改築の際にご参考にしたものはありますか、ある場合はご参考にしたのは何ですか。

ない・ある → 近隣の住宅・村内の知人宅・村外の知人宅・本、雑誌、TVなど・その他 ()

■ 増改築を依頼された工務店はいつも同じですか、また、工務店はどのようにお知りになりましたか。

いつも同じ (一回しか頼んでない)・毎回違う
近所の増改築を見て紹介してもらった・工務店側からセールスに来た・電話帳で調べた・親戚知人等に紹介された・その他 ()

■ 最後に増改築した時についてお問い合わせします。増改築を計画したのはいつ頃ですか？ またそれはいつ頃実現しましたか？

(計画した時期) 年 月頃 (実現した時期) 年 月頃

■ 今後も増改築の計画はありますか？ もしあればそれはどこですか、またいつ頃のご予定ですか？

ない・ある → (計画している場所) (予定している時期) 年 月頃

■ 住居の背後の緑道はご利用になっていますか？ 利用している場合は、どのような用途ですか。(複数回答可)

利用していない・利用している → 通路・洗濯物を干す・物置・園家への近道・自転車置き場・灯台置き・ゴミ置き・その他 ()

■ 差し支えがなければ、ご連絡先をお教え下さい。

又、昔の様子が見える写真等をお持ちの方があれば是非お知らせ下さい。

お名前 電話番号
御住所 e-mail:

■ お住まいや大淵村での生活に関して、何かコメントがあればお聞かせ下さい。

アンケートは⑧に続きます。どうぞ協力お願いいたします。

(1) 年齢と性別をご記入願います。 (2) ご近所で徒歩で行動される範囲を線で囲って下さい (例をご参照下さい)。

(3) 以下に該当する場所に記号をつけて下さい。この地域の範囲外にそのような場所がある場合は、その地名の後に記号をつけて下さい。また、コメントも書き加えていただければ幸いです。

- 男・女
- ① 村の中で目印になっているもの (F) 村の中で頻りに入っている場所 (N) なくともある場所
② 友達と集まる時に集う場所 (P) 田舎(田舎)の遊び場所 (C) サークル等趣味活動の拠点
③ 日常的に利用する場所 (K) 良く行く知人宅 (G) 日用品を購入する場所
④ 仕事で行く場所 (W) 仕事で利用する場所 (H) 趣味等で利用する場所
⑤ 毎年(毎月)恒例で行く場所 (J) 結婚・通婚に繋がっている場所 (R) 思い出の場所
⑥ 知らなかったところ (Δ) 知っているが行ったことのない場所
● その他

